

578

296



* 0054666000 *

3

0054666-000

578-296

伝説の熊野

那須晴次・著

郷土研究会

昭和5

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

578

296



野熊の説傳

247



此後能治書

子以之能一也

師之研考



578-296

序

傳説は歴史でもなく、またお伽噺でもない。その民族の人々によつて築かれた美しい夢の塔である。その頃の人々の等しく持つてゐた自然讃仰、郷土受慕の純な心の象徴とも見るべきものである。

世界の何處の國にも何處の里にも傳説のない處はない。わけて我熊野は建國文化の發祥地であるだけに古くから

面白い豊かな傳説を數多くもつてゐる。

千古不伐の森林熊野、鯨潮吹く黒潮熊野、幽邃の瀕峽、飛泉の那智、そこにはあまりに尊い傳説が多く秘められてゐる。

私は「傳説の熊野」によつて、郷土熊野の人達のありし世の生活を偲んで戴けば満足なのである。

この集を成すに就ては幾たびか熊野の山路に海邊に旅をなしては、そのところへの傳説を探り覓めて記しとごめ、傍ら學生達の休暇歸省するたびに其の郷土の傳説

を蒐集せしめたものが積り積つて二百餘種に達したのである。

あるひは記憶の謬錯があり、あるひは傳聞の訛誤があり、あるひは移動轉嫁せるものも尠くない、之が整理なり補正なりする事は容易な事ではない、幾たびか筆を投げては中絶し、中絶しては又思ひ出して筆を執つたことである。

學生の粗朴なきぢのまゝの文もあり又ぎごちない擬古文そのまゝのものもあり、玉石混淆ではあるが、それらをか

まはす兎も角茲に上梓することにした。
 装幀と挿畫はすべて大阪在住稗田彩花弟の意匠考案に
 なるものである。

昭和五年六月十五日

榴花しきりに散る夕

那須晴次識

傳説の熊野

目次

田邊及白濱湯崎温泉

圓鷄神社の由來……………(田邊)……………	一
辨慶松……………(同)……………	二
會津橋と御々舞岩……………(同)……………	四
千田川の怪力……………(同)……………	五
幽霊松の怪異……………(同)……………	七
弓の名人和佐大八……………(同)……………	九
田邊の夏祭……………(同)……………	二
残花一輪……………(同)……………	三

龜の踊り……………(田邊)……………	二五
開かすの倉……………(同)……………	二五
蟻通しの神……………(同)……………	二六
鎮火の樹……………(同)……………	二八
田邊の藩主……………(同)……………	二九
落武者の最後……………(同)……………	三三
龍泉寺……………(同)……………	三四
船幽霊……………(同)……………	三五
勝入齋父子の幽霊……………(同)……………	三六
行の森……………(同)……………	三六
首切井戸のあと……………(同)……………	三七

切戸地蔵の一本杉：(田邊)……………二六
 三倉屋敷：(同)……………二六
 牛の鼻：(同)……………二七
 番所の鼻の猿(湯崎温泉)……………二七
 白瓦濱の甲羅法師：(同)……………二七
 温泉村の祖先：(同)……………二七
 親鸞上人と湯崎：(同)……………二七
 まぶ湯：(同)……………二七
 魚釣の鼻：(同)……………二七
 疝氣湯：(同)……………二七
 豆や一ぱち：(同)……………二七

會津川附近

秋津の鶴：(下秋津)……………二七

龍神山の天狗：(上秋津)……………二七
 稚兒と大人の足跡(同)……………二七
 戸閉岩：(秋津川)……………二七
 雷の落ちぬ村：(下秋津)……………二七
 釘抜き橋：(同)……………二七
 爪かき地蔵：(万呂)……………二七
 お手かけ草：(三栖)……………二七
 五郎地蔵：(同)……………二七
 米を洗ふ辨財天：(同)……………二七
 衣笠城趾：(同)……………二七
 岩屋観音：(同)……………二七
 湖見峠合戦：(長野村)……………二七
 勘右衛門の死：(同)……………二七
 根笹の櫻：(中芳養)……………二七

天狗の鼻：(中芳養)……………二七
 寄言の宮：(下芳養)……………二七
 虫の堂：(上芳養)……………二七
 御影の淵：(稻成)……………二七
 稻成神社：(同)……………二七
 蛇に影を吞まれた清助：(同)……………二七
 津浪の村：(新庄)……………二七
 松上の大黒天：(同)……………二七
 神島と大岩島：(同)……………二七
 押分岩：(下芳養)……………二七

富田川附近

桐の木上人：(岩田)……………二七
 人柱：(彦五郎の淵)……………二七

お札が降る：(岩田)……………二七
 萬さんと天狗：(同)……………二七
 女郎淵：(同)……………二七
 鶴と獵師の娘：(朝來)……………二七
 千束の由來：(同)……………二七
 杖大師井：(同)……………二七
 糠塚：(同)……………二七
 乳岩の傳説：(栗栖川)……………二七
 野中の里秀衡樓の傳説(近野)……………二七
 宗高の茶碗：(長野)……………二七
 清姫れちき：(栗栖川)……………二七
 清姫の生れた庄司屋敷(同)……………二七
 芝の御殿：(同)……………二七
 のぞきの橋：(同)……………二七

奥平あな	(北宮田)	二〇四
おでんの火	(同)	二〇七
椿温泉	(東宮田)	二〇八
人頭の由来	(同)	二〇八
蘆雪と牛	(同)	二一〇
湖邊の武士	(同)	二一三
玉彦小詞	(西宮田)	二二三
龍になつた籠屋の娘	(同)	二二四
天狗谷の奇話	(同)	二二五
江戸へ上る狐	(同)	二二六
觀福寺三ッ鱗の紋	(南宮田)	二二七
鳴かない蛙	(同)	二二七
龍賀法師	(同)	二二八
コモリアナ	(同)	二二九

シヤ香水	(南宮田)	二三〇
天狗につれてゆかれた人	(同)	二三三
一目狸	(同)	二三三
城山	(生馬)	二三三
劔神社傳説	(鮎川)	二三三
兵生の松若	(二川)	二三四
瓦達大和尚	(市之瀬)	二三五
竹の皮の戦略	(同)	二三七

日置川附近

天狗傳物語	(日置)	二二九
蛇原	(同)	二二九
茂兵衛と旅僧	(同)	二二七
ねびしやくしんの傳説	(同)	二四〇

辨財天の化身	(周參見)	二四二
稻積島の森	(同)	二四二
天狗退治	(同)	二四三
なみなき	(同)	二四四
エセレンホー	(同)	二四四
こつち勝つた勝山	(安宅)	二四六
法經塔と箸折峠	(近野)	二四九
血か露か	(同)	二四九
三日森	(同)	二五〇
高知	(宮里)	二五〇
將軍瀧の由来	(同)	二五三
大塔峯	(同)	二五三
乳大師	(豐原)	二五三
天狗岩	(宮里)	二五三

御屋敷	(宮里)	二五五
劔神社の森	(同)	二五五
水呑峠	(同)	二五五
安	(同)	二五七
劔の柄塚	(同)	二五八
女僧と狼	(大都川)	二五八
十善の森	(同)	二五九
牛鬼の瀧	(佐木)	二六〇
がまの瀧	(同)	二六〇
硯の大師	(同)	二六一
四郎五郎鳥	(同)	二六一
小房殿	(川添)	二六一
七人塚	(市鹿野)	二六一

串本及其の附近

串木といふ名の由来：(串木)……………一五
 稻村亭：(同)……………一六
 蘆雪寺：(同)……………一六
 丹敷戸畔の森：(同)……………一七
 射の杜：(同)……………一七
 高島と牛越：(同)……………一七
 彌助芋：(同)……………一七
 橋杭岩の傳説：(同)……………一七
 女郎島：(同)……………一七
 通夜島：(同)……………一七
 おほな魚：(和深)……………一七
 雨島の宮：(同)……………一八

浦の水の神：(有田)……………一八
 河童と牛：(江住)……………一八
 遠良浦のがば：(同)……………一八
 二人のかたわ：(同)……………一八
 八人塚：(同)……………一八
 筆島：(田並)……………一八
 こんびらの淵：(同)……………一八
 双島：(同)……………一八
 鎧石：(同)……………一八
 旭の森：(潮岬)……………一八
 番所の芝：(同)……………一八
東牟婁地方
 佐吉と鯨：(太地)……………一九

山の御殿：(高池)……………一九
 蔦かすの稻田：(西向)……………一九
 那智山縁起：(那智)……………一九
 もぐらさくら：(同)……………一九
 河内大明神：(高池)……………二〇
 魚植の瀬：(七川)……………二〇
 七川村の先祖：(同)……………二〇
 十七岳：(古座)……………二〇
 おたへ山：(同)……………二〇
 愛宕神社の由来：(高池)……………二〇
 硯の大師：(古座)……………二〇
 牛鬼淵：(三尾川)……………二〇
 天磐盾：(新宮)……………二〇
 浮島蛇身物語：(同)……………二〇

徐福の墓：(新宮)……………二〇
 村上家の八幡さま：(七川)……………二〇
 護摩を焚く蛇の谷：(三里)……………二〇
 小栗判官と湯峰：(湯峰)……………二〇
 柳の糖：(楊枝)……………二〇
 犬鳴き：(三尾川)……………二〇
 薩摩守忠度誕生地：(九重)……………二〇
 赤い猫：(田原)……………二〇
 維盛の末葉：(色川)……………二〇
 勤九郎磯：(津賀)……………二〇
 鬼ヶ城の海賊の妻：(木の木)……………二〇
 道具長者と諸平：(那智)……………二〇
 游のゆしさん：(游入丁)……………二〇
 海賊藤四郎と小女峰：(古座)……………二〇

蛇の子與太郎：(高池)……………二四
 釣鐘を着た鬼婆：(那智)……………二七
 破天荒な仇討：(潮岬)……………二五

日高地方

道成寺の傳説：(藤田)……………二五
 道成寺の釣鐘：(同)……………二五
 道成寺縁起：(同)……………二六
 入相櫻：(同)……………二六
 狼と辻地藏：(山路)……………二六
 日和田の瀧：(同)……………二六
 不動明王：(同)……………二六
 餅のつかない里：(切目川)……………二六
 龍神温泉：(龍神)……………二五

なますの淵：(高城)……………二六
 出合の河童：(龍神)……………二七
 越海瀧：(同)……………二六
 枕かへし：(同)……………二六
 五百原社の大杉：(同)……………二六
 針尖嶽：(同)……………二六
 お姫瀧：(寒川)……………二七
 大海嘯と南部：(南部)……………二七
 安養寺の古狐：(同)……………二七
 鹿島神社の玉：(同)……………二七
 田岡兵左衛門：(山路)……………二七
 小山峠の天狗：(丹生)……………二八
 狼平藏：(山路)……………二八
 雨の森：(由良)……………二八

今宮社前の石：(藤田)……………二八
 關山の天狗：(由良)……………二八
 しさゝの簀：(岩代)……………二八
 柳の井：(同)……………二八
 馬に救はれた判官：(南部)……………二八
 巨人の足あと：(同)……………二八
 平須山：(上南部)……………二八
 弘法井：(同)……………二八
 水湧かぬ地：(南部)……………二八
 袈裟井：(同)……………二八
 高見松：(同)……………二九
 要石：(同)……………二九
 三鍋：(同)……………二九
 有馬王子と結松：(岩代)……………二九

花山天皇の御遺跡：(南部)……………二九
 安養寺の黒佛さま：(南部)……………二九
 片倉峠の櫻：(同)……………二九
 豪力頼田：(同)……………二九
 南部鹿島：(同)……………二九
 河童石：(同)……………二九
 千人壺：(上南部)……………二九
 人魚となつた濱の娘：(南部)……………二九
 牛の宿 (傳説を訪ねる熊野の旅日記の中より)……………三〇

挿 畫 目 次

千田川の怪力	六	天狗徳物語	三〇
蟻通しの神	六	稻村亭	二六
桐の木上人	七	橋杭岩の傳説	二七
乳岩の傳説	六	釣鐘の鬼婆	二八
兵生の松若	三	道成寺の釣鐘	二五

田 邊 及 白 濱 湯 崎 温 泉

闘鶏神社の由來（田邊）

闘鶏神社は今より千五百年ばかり前人皇十九代允恭天皇の御時に建立せられたもので其の當時は田邊の宮といつたものださうです。それより約七百年の後、近衛天皇の御時に熊野の別當湛快本宮の熊野権現様をこゝに移つして新熊野権現と名づけたのださうです。

之が抑々闘鶏神社の始まりです。それより約四十年後、元暦元年源平の戦が起つた。當時熊野別當は湛快の子湛曹が田邊に住居してゐた。湛曹は源頼朝と外戚のおばむこではあるが是れまで平家安穩の祈禱をしてゐた。所が紀の國中の人々は皆源氏方に心を寄せてゐるので湛曹一人が源氏に背むいてゐては後難の恐れがある。しかし、今更平氏を見ずする事も昔の好しみを忘るゝ事である。

兔ややせん角やせんと案じてゐたが此上は神の御啓示を見るより致方がないと思ひ、田邊の宮に七日七夜參籠して御神業を奏し祈請したが、たゞ源氏に味方せよとの御言葉があつた。が猶も疑ひをなして赤きは平家、白きは源氏として赤白各々七羽の鶏を権現社前にけあはせたが戦はずして赤の鶏の方が逃げてしまつた。そこで湛曹もいよ／＼決心して源氏方につき旗上げをしました。即ち闘鶏神社といふ名が始めて生れたのです。

それより湛曹は熊野三山金峰山、吉野、十津川の命知らずの兵どもをよせ集め兵船二百餘艘を調へて其勢二千餘人を率ゐる若王子の御正體を舟に乗せまゐらせ田邊の湊より漕ぎ出で源氏方に加りました。伊豫の國より彼の河野四郎通信も千餘騎の兵を率ゐて馳せ加り九郎判官義經を助けて平家を壇の浦に攻めよせたのであります。この事は平家物語や源平盛衰記にも見えて居ります。又倭漢三才圖會には次の如く見えてゐます。

トチアヘセ
鶏圖權現在三牟婁郡田邊

相傳昔源平合戦時、試催鶏圖以白鶏爲源以赤鶏爲平則白者得勝因當國武士
通志於源家

辨慶松 (田邊)

我がふるさと田邊の町は木の國でも古い傳説をもつてゐる町です。彼の源平赤白の鶏を闘はせたといふ闘鶏神社、辨慶の生れたと傳へられてゐるうぶゆの井、辨慶松など枚舉に遑がない程であります。茲に最も歴史的な彼の武藏坊辨慶について述べやう。

抑々辨慶の生地は古より紀州熊野といふ説と出雲の國等といふ説とがあります。辨慶は熊野別當湛曹の子であるといひます。湛曹の屋敷は今の上片町清水邸であつたのだと傳へられてゐます。辨慶は此の屋敷で生れたので、大きな彼の辨慶松は其の邸跡にあります。其の最初の松は天正十六年に上野山の城主杉若越後守が芳養泊城を西之谷八王子砦に移す時、日高郡小松原村九品寺を移して城の廣間となし此の辨慶松を伐つて臺所の虹梁とした。周圍五抱あつたといひます。安藤家領主となるに及んで之を植ゑついたのでが正徳四年八月の暴風雨の時に吹き倒された。後又植ゑついたのでが現存の松で轟々鬱然として町を蓋ふもの實に舊藩主の賜であります。

此の松及び祇園社その邊が皆所謂湛曹の屋敷の跡で其の記録は闘鶏神社前の安部氏方にあります。安部氏は湛曹の子孫ださうで此の家には、辨慶うぶ湯の釜及湛曹の烏帽子形の鐵の兜も傳はつて居ります。

辨慶長じて叡山の西塔に居つた故に西塔武藏坊辨慶と稱せられる様になつたのであります。他年義經の家來となり義經と共に奥州に下り七つ道具を兩肩に背負ひ立往生して戦死したといひます。辨慶産湯井は大字上片町の田邊第一小學校の構内に有つて辨慶産湯の井と傳へて居ります。辨慶の力餅傳ふる所によれば關東より熊野に參詣する者は必ず此の田邊の城下に宿し辨慶松、産湯の釜等を見、其の夜は此の宿で餅を搗く事を例として居た。之を稱して辨慶の力餅と云ます。

辨慶腰掛石 は町内字屋敷町八阪神社境内にあつて辨慶が腰を掛けたので大きな凹になつたのだと傳へられてゐます。

和漢三才圖會に曰く

辨慶大織冠十一代關白道隆公氏族、熊野住侶辨正一男也。幼時在三雲播、稍長學法於叡山、而好兵學、以爲惡僧。先是義經住奥州、與秀衡議亡平氏事、爲窺六波羅形勢。治承元年復登洛。辨慶聞義經有興廢志、進爲從者。其智勇人以稱之。

又曰鷄關權現在平婁田邊(中畧)

時別當名湛曹、武藏坊辨慶之父也。湛曹那智別當教眞之五男、母六條判官爲義之女也。則與義經親屬故、辨慶出仕義經、軍勢大而空死、惜哉。

會津橋と獅子舞岩 (田邊)

「紀州田邊にすぎたるものはお寺三ヶ寺に會津橋。昔はかく唄はれて田邊の名所であつたとの事です。當時の橋は現在のとは違ひ唐金のぎぼしが付いてゐて、その二番目のぎぼしに立願して咳を

治した傳説があります。この橋は維新前の大水害に流れて阿波に行き間もなく阿波から獅子舞岩が流れて來たさうで當時の人は橋と岩との交換だ、と云つたさうです。

獅子舞岩は名の通り形は獅子によく似てゐます。頭部だけしか地上に現れて居りませんが見ると成程似てゐると思はせます。岩が流れて來た當時雨の降る寂しい夜には、岩が「阿波へ歸りたいよ」と繰り返し繰り返し泣いたとの事です。

獅子舞岩はそれから後、もう阿波へ歸る事なしに田邊の名物となり、田邊の傳説に數へられました。秋晴の四國の山々が雲の様に見える時はそれを眺めて、今なほ愛郷の念をもよほしてゐる事です。

千田川の怪力 (田邊)

田邊町江川に昔千田川と言ふ角力取りが住んでゐて、當時日本でも有名な角力取りでした。四國にも強い角力取りが居て一度千田川と角力を取らうと思つて千田川の家へ來て見たが折悪く、千田川は薪を取りに行つた留守でしたので待つてゐた。

と千田川の母がもう餘程年を取つてゐるのに六十貫位の火鉢をさげて來たので四國の角力取りが

おそろしくなつて歸らうとしました。するとそこへ千田川が百貫程の薪を持つて歸つて來たので再び驚いた。やがて會津川原の土俵でいよ／＼角力を取ることになつた。

兩力士が土俵に上ると見るまに、千田川が片手で相手の男を高くさし上げて「天か地か」と言ふと、彼の角力取りは「天だ」と言つたので天へ高くほり上げられてもんどりうつて地上に投げ付けられ、そのまゝ死にました。之を聞いた四國の角力取りの親類の者が田邊へ強い角力取りが出ないやうに鬮神社へ石燈籠を立てた。それから強い角力取りが田邊地方に出ないのださうです。

さて千田川は大阪に出て當時の關取朝日山の弟子となつたが、例の怪力でめき／＼昇進して小結となり江戸に赴き徳川將軍の觀覽を得てとう／＼二代目千田川吉藏と名のつて天下に名を轟かした。

或時千田川が錦衣故郷に歸つた時、關取の力の程を見せて下さいといつたところ、千田川が早速米一俵を借り受け、その先に筆を挿み墨をつけて、米俵を手にさし上げ千田川と輕々鮮かに書いて見せた、併し何といつても十六貫目の米俵を手にしてのことだから千田川の川の字の最後の線がゆるんださうである。千田川の碑は今元町金比羅權現の表通りにある。碑文は次の如くである。

千田川吉藏の碑

力士通稱吉藏。千田川其號也。考甚兵衛有七子。力士第六子也。家世農、力士幼而



有_レ力。容貌魁偉。骨法不凡。殆有_二拔山之勢_一。及_レ長不_レ事_二生產_一。乃去之_二浪速_一。學_二角觥於朝日山_一。朝日山所謂頭取者也。時力士年甫十九。日夜奮勵。能究_二其術_一。班籍累進。至_二小結_一。後趨_二江都_一。經_二大君之寓觀_一。名聲大噪於四方。實文政四年也。吾侯徵而賜_二以月俸拾口_一。越十一年春正月疾而死於家。享年三十八。葬_二于本所萬精院_一。力士爲_レ人潔整。尙_二氣節_一。以_二義俠_一自任。亦爲_二世所_レ知也_一。舉_二一男一女_一。男先天。官時賜_二二口米_一。以存_二其後_一焉。頃傳_二其技之徒_一。懼_二其名之湮滅_一。相謀建_二碑于地藏寺門外_一。以表_二歲時奠供之地_一云。

弘化二乙巳年十二月日

北新町 甚助建之

幽靈松の怪異

それは昔ながらの瓦土塀がそのまゝ土族屋敷の跡を物語る田邊町堀町といふのがある。雨のしめやかに降つて闇夜の晩である、こゝまで來ると傘のうちが俄かに暗くなつた。はて變だなど仰いで見ると、思はず首をすくめた。ヌツと薄暗の空に黒い陰影が頭の上を撫で、枝を地上に垂れた老松それは幽靈松である。

幾十年の昔であつたかそれは知らないが、今のあの幽霊松の下に一軒の宿屋があつた。或日一人の虚無僧が其の軒端に立つた。そして玉を轉ばすやうな、流麗な尺八の音は屋島といふ曲を吹奏し、虚無僧はやがて草枕の宿りをこゝに求めた。併しこの虚無僧は普通の乞食虚無僧ではなかつた。目隠しのあの深網笠をとるとみめうるはしき若者でどこかに品のそなはつたゆたけさがあつた。其夜は更けた。若者は旅の疲れで熟睡した折柄、若者の室へ忍び入つた覆面の男があつた。矢庭に若者の首をしめた。若者にとつては餘りに突嗟であつた。若者は其瞬間蹴ね起きる餘裕もなかつた。やがて曲者は若者の懐から可成り多額の有金が手に觸れた時、自分の豫想のはずれなかつた事を微笑んだ。曲者はいふまでもなく宿の主人であつた。

宿の庭にあまり大きくもない松が植ゑられてゐた。やがて歲月は経つた。松はだん／＼成長したが松が宿の二階に達する頃、誰いふとなくこの松は幽霊の形に似てゐるといふ。宿の主人はこの庭の松を見ることを好まなかつた、やがて此家の主人をはじめ一家は一代の間に絶えてしまつた。

幾年かの後此家の軒には御旅人宿といふ看板の代りに新しい琴指南の看板がかけられた。琴に堪能な師匠の門前には町の娘達は競うて美しい姿を運んだ。或夜のことであつた師匠は美しい娘達に今夜は屋島の曲を教へて上げやうといつてやがて絃の調べを試みた。娘達の顔ははれ／＼してうれしさうであつた。娘達はお師匠さんの爪弾く繊細い手つきに目を注いだ。やがて盤上に轉ばすやう

な屋島の悲曲が始まつた。その時であつた。異様な物音が幽霊松の方から傳はつたと思ふと、ガラガラツと瓦の落つる音がものすごく家は氣味わるくゆれた。娘達はアツと悲鳴をあげて逃げまどつた。師匠も勿論眞青な色をなしてふるへてゐた。それよりは屋島の曲は決して弾かなかつたといふ。今も幽霊松の傳説は町の人の口に語り傳へられてゐる。

弓の名人和佐大八 (田邊)

和佐大八の墓は田邊町江川淨恩寺に在り。高さ約二尺の石塔にて「到蓮院安譽休心居士」とあり、裏面には「和佐大八範遠」と刻しあり。

大八は海草郡和佐村の人。幼より射を能す。十二歳の頃、紀伊侯の臣葛西園右衛門の弟子となる。園右衛門は京都三十三間堂にて一萬本中、通り矢七千八百五十九本を中て日本一の名譽を得たる剛の者なり。其頃尾州侯の臣に星野勘右衛門あり。斯くと聞き君命を奉じて三十三間堂に行き一萬本中八千四百四十五本を中て更に日本一の名譽を得たり。(此の通し矢は慶長十一年淺間平兵衛五十一矢を射中しに始まる。其後三十三間堂は弓取る武士の日本名譽の道場となれり。競技時間は前日の夕刻に始まり翌日の夕刻に終る。而して通り矢の多き者を以て日本一と定む)

星野が日本一の名譽を得し時葛西は病氣なりき。時に大八年漸く十八、而も軀幹長大膂力人に超え、殊に剛弓が得意なり。師の爲、且は我が身の爲、星野を凌いで武士の名譽を輝かさんと乞ふ事再三、許されず。遂に事若し成らずんば切腹して謝罪せんと誓ふ。此直訴功を奏し藩主の許を得、大八は京都に出でたり。之れ實に貞享三年三月二十四日なり。此日大八は決死の覺悟を以て晴の舞臺に現はる。星野が八千餘本を射てより僅に十四日目なり。滿都の士女は此の年若き勇士に向ひて驚きと危ぶみと疑の目を以て迎へたり。紀藩よりは松平甚五郎以下の審判官がずらりと其席に着く。

大八は禰十字にあやどり後鉢巻凜々しく得意の剛弓を引き絞り引いては放ち、放ちては引く。實に一世の壯觀なりき。現今淨恩寺に大八の弓あり。長さ七尺五寸、太さ三寸五分の竹の弓。宛然天秤棒の如く兩手にてグツと引くも撓まず、是或は京都にて用ひし品ならんか。然るに五千本中射通せしもの僅に三千九百餘本。さしもの大八心痛の餘り覺えず其場に卒倒したり。時に觀覽者中より深編笠の武士つと走り寄り「比類なき若者ぞ」と激賞しつゝ小刀を取りて大八の双腕を刺し惡血を除き布を以て縛し「さあ之で大丈夫だ確りやられよ」と力を付く。不思議なる哉大八其後心氣爽然百發百中一萬本中遂に八千八百七十八本を射通し、茲に目出度日本一の名譽を博したり。此の深編笠の武士の誰なりしか、當時の何人とも知れざりしが後に至り星野勘右衛門なりと判明す。古武士の襟度實に敬す可きものあり。

大八は功により藩主光貞公より三百石を賜はる。其後大八は婦人の爲に失敗し田邊に流罪となり後悔煩悶の極或夜守衛の隙に乘じ高山寺山下の深淵に身を投じて死す。故に此淵を「和佐淵」と云ふとあり。更に湯川退軒翁の「田邊舊事記」を見るに、寶永六年三月十七日囚人和佐大八來る。更に正徳三年三月二十四日大八腫腸を患ひて死す。紀藩監察齋塚甚衛門之が爲廿七日を以て來る」とあり。則ち田邊にては足懸五ヶ年住したりしなり。貞享三年三月二十四日十八歳にして弓の名譽を得、正徳三年三月二十四日四十五歳を以て死す。年號こそ變れ、同じく三年三月二十四日と云ふも又不思議といふべし。

田邊の夏祭 (田邊)

昔、田邊町内の人々が暑い／＼眞夏に祭典をするのは骨が折れると言つて祭を九月頃にまで延期したことがあつた。すると其の年町の人々が恐ろしい惡疫に罹つたと言ふことである。

七月二十四、二十五は田邊祭典の日であるが、此の日は瀬戸崎方面が非常に波が荒れる。これは昔、或人が祭典の日に大きな釣鐘を舟に積んで田邊へ來た。所が瀬戸崎方面で海が荒れて其の釣鐘が海中へ沈んだ。

其の後、人々が頻りに探したがとう／＼判らなかつた。それが今でも海の底にあるから其の日は海が荒れるのださうだ。

子守歌に「田邊祭りは二十四日五日波が高いよ瀬戸崎は。」

祭典には御笠を引くのが風習である。御笠の由来について昔天皇が熊野行幸の途次龍駕をこの町にうちすてられて、熊野三山へ御参詣になつた。それをお笠としてお祭りにひくやうになつたといふ。各町々から引出すお笠は七臺ある。いづれも古雅なものだ。

その中、江川町の大黒天の左手に持つてゐる寶袋が自然に落ちたならば、其の年は大漁であると言ふ。

北新町の御笠は今は餅花であるが、昔人形を乗せると少しも動かなかつたと言ふ。鬮鶏神社の裏山に天狗岩といふ岩がある。その岩に乗れば必ず鼻血が出るさうである。

残花一輪 (田邊)

平家にあらずんば人にあらずと豪語したのも槿花一朝の夢、さすがの平家も壇の浦の藻屑と消え果てゝしまつた。其翌年の事であつた、落人と思はれるやさしい都の女は此の田邊の村落に流れて

來た。

時は長月折しも月は中天に輝き、どこからともなく笛の音は冴えて聞えてゐた。なに知らず彼女は家を出た。冴えた月の光りは彼女の顔を美しく照らして、蟲の音もかすかに薄命をかこつ哀しき調べのやうである。はら／＼と女の目からは露の涙が月の光になめらかに光つて頬をすべりおちるのであつた。深い思ひ出に耽つてゐた彼女はいやが上に暗い世界へ引入られるやうでした。あゝとう／＼平家は滅亡した。一世二世までも夫婦の契をした夫の行方は今に知れないのだ。

彼女は都に於て夫佐久磨土佐之守盛繁が熊野に落武士となつてゐる事を耳にして、かよわい女的身ながら都より田邊まで戀しい人に會合んが爲に、なれぬ旅路をはる／＼やつて來たのであつた。残花一輪彼女の今の身ほど薄命に呪はれたものはありませんでした。

神よ平氏にばかりさほどつれなくあたり給ふのか、のろはしい此の世よ。

折しも其處を通りかゝつたのは郷土櫻井正之助であつた。すゝきの間より月のあかりに見える女の姿、おゝ彼女だ、日頃思つてゐた彼女。彼の喜びはいかばかり彼は彼女にと一歩々々と近づいてゐた。

わらわも武士の娘源氏のはしくれ武士に。

さらば一と思ひに此の短刀で。すきを見た彼女、うんと正之助の横腹に——鮮血は飛んだ。「よー

しかうなれば可愛さあまつて憎さ百倍「さては欺し討ちをしをつたか——」と正之助は三尺の大刀ぐつと引きぬいた。横腹かゝえて彼女に迫まつた。

あはれや繊弱き女の身の上いかで男に敵對できよう。遂に正之助の刃に倒れた。折しも其處を通りかゝつた一武士。「やあ人殺し。」「なんと。」しかし正之助は横腹の傷の痛みに堪へかねた。遂に一武士の刃に仆れた。「うーんさてはあの女を」

「此れ女、しつかりせよ」苦しうございます水を一ばい下され」よしさらば與へるぞ」湯のみを彼女の唇につけた時、淡い月の光りに照らされて武士の目と彼女の目はびつたりとあつた。おゝお前は、貴方は——

「氣をたしかにしてくれ」いゝえ妾は駄目でございます、のろはしい身の上、憎つき源氏、無念でございます。」よく言ふてくれた藤枝「盛繁さま」彼女はしつかと盛繁の手を握つた。おう駄目か呪はしい此の世よ。

さらば一緒に死出の旅路に。

二人の死骸は重なり合つて松の木の下にあつた。月は彼等を無心に照らしてゐる。青白い顔、靜かに眠るかのやうな二人の顔に——蟲の音はいよ／＼冴えて、浪の音もほど遠く笛の音は未だ聞えてゐる。

龜の踊り (田邊)

今より七十餘年前大海嘯の有りし時、新庄方面は家屋流失し田邊は火災起り大騒ぎなりしに此海岸に近き磯間浦へは大浪押し寄せ來りたるにもかゝはらず一軒の流失家屋もなく不思議のことに思ひ居たるに海嘯の四五日前文里灣の砂上に目方八十貫の大龜はひ上り居るを磯間の漁夫之を發見しよく／＼見れば前足二本共野犬か狐かに噛まれ自由を失ひ九死の所不愍に思ひ兩足を縋帶し手をつくしいたはりたるも其甲斐なく海嘯の去りし翌日死せり。

漁民八人にて之を荷ひ磯間なる覺照寺内へ持來り住職に依頼し施餓鬼を行ひ同寺の境内へ埋め龜の碑を建てぬ。今に其の碑は同寺に存せり。其の後誰云ふとなくさしもの大津浪が磯間を襲はざりしは彼の大龜が靈顯ならむと依つて年々舊盆の七月十四五日は新佛の爲に盆踊りをなし、十六日には覺照寺境内の龜の墓前にて其靈を慰むるため龜の踊りを行ひ村の老幼男女が種々なる變裝をなし音頭取の聲に鐘の音も冴えて夜中踊りあかすとなり。今日に至るも磯間の漁民は海龜を捕へ殺すことなしといふ。

開かずの倉 (田邊)

幽霊松はもと有名松といつたさうですが幹や枝が幽霊の手の様に垂れて居るので何時か有名松の名は幽霊松と變じて呼ばれるやうになりました。私等の幼い時、家の軒も三寸下ると言ふ夜半の二時三時頃には此の松に幽霊か、又は人玉でも出るのだと言はれて小さい胸を臆病にしましたが今は何事ありません。形態學上の美松として縣の天然記念物に指定されて居ます。

其の松の側に古い土倉があります。壁の崩れるにまかせ、葛の這ふがまゝにまかせて幾十年前前から其のまゝに放られて居ます。此の土倉は昔、平氏の落武者が十幾人か隠れまじりけれども遂に追手の爲めに發見されて倉の中で悉く切腹しました。だから其のたゞりで開けたら災がするとも傳へられて居ます。又昔、元の可兒邸の所で一人の虛無僧が尺八を流して行くのを呼び込まれて令嬢の琴に合奏させられました。令嬢に懸想して不埒に及ぼうとしましたので、手打ちにされて倉の所で倒れました。それで其のたゞりで倉を開けぬとも傳へられて居ります。それ以來この奇怪な倉を使用すれば祟りがあるといふので誰も手を着けるものはありませんでした、つい近頃までこの謎の土倉が残つてゐましたが今は取りはらはれてあとかたもありません。

蟻通し神 (田邊)



或日のことである吾が日の本は瑞穂之國の南半島こゝ紀州田邊に外國から使者がやつて來た。見れば面構へ心にくいまで猛く態度も傲慢でどうやら腹には一物有りげな様子、さて徐ろに口を開いて曰く「俺の國の武威は四海に輝いて誰知らぬ者もない筈、さて俺は此所に諸神と約束をする事にする。それは今問題を出すをそれを解き得なかつたなら其方の國は俺の國の屬國とする」と言ふ事だ。勿論誰も解き得まいと思つての相談である。胸の中には瑞穂の國を己れの屬國にしようとの魂膽がありくと讀めた。

諸神進み寄つて「問題と云ふのはどんなものか」と尋ねると使者ふんぞり返つて口邊に嘲りの笑をたゝへながら「問題といふのは是だ。此所に法螺の貝を俺が持參して居るが、勿論此貝尻には穴をあけて居るが此貝の中に一本の糸を通してもらひたい」と言つてにやりと無氣味に笑つた。諸神は大に驚いた。なぜならば此貝の内部はもとより非常に複雑な穴であるからである。どうして糸を通してたものであらうかと諸々の神々達は額鳩首めて相談したがどう考へてもいゝ思案はなかつた。此の時ひとりの神が進み出て「私にどうか其の事を任して下さい、きつと糸を通して見せよう」と言つた。使者は言ふに及ばず諸神も驚いて目を見はつた。其の神を擬つと視ればまだ若神で名も知られて居ない神であつた。

やがて神は蜜を持つて來て貝の口からどん／＼流しこんだ。蜜はさすがに複雑な穴を通り抜けて

貝尻の穴へ流れ出た。すると神は蟻を一匹捕へてこれに糸を結んで貝の口から追ひ込んだ。蟻の鼻先は甘い蜜に心を奪はれて次から次へと蜜を追つて遂にあの複雑な法螺貝の穴を何の苦もなしに通らばれた。見れば後には初めの通り糸を結んで居る。さすがの法螺貝にも今は全く完全に糸が通つた。是を見た使者は「日本の本國はやはり神國である」と恐れ其の智慧に感服して遠く逃げ歸つてしまつた。諸神大に喜んで「さても瑞穂千足の國にも是ほどの賢神のあるのを知らなかつた」と大に其神の奇智を褒めそやした。そして蟻によつて糸を通した事によつて蟻通し神と申し上げた。是こそ西牟婁郡田邊町字湊の土産神である。

不思議にも蟻にせめられて苦しんで居る時に、此の社の石を持つて來て家に置けば蟻にせめられる事を防ぐといはれてゐる。

鎮火の樹 (田邊)

田邊湊の氏神蟻通神社の境内に大きな樟の木がある。枝は四方に伸び擴つて殆ど境内を蓋ふとしてゐる。此の木はよほど古いもので中は洞空になつてゐる。傳ふるところによれば此の木には雌雄の白蛇がゐてよく宮の危難を救ふと言ふ。今から凡そ百二十年前、田邊町の大火の際、火の手は煽

りに煽つて遂に延焼し神社の附近まで猛火の中に包まれたが、人々は施す術なく、唯茫然として腕を拱くのみであつた。今にも社殿が火に包まれようとした時にあの大木から白蛇があらはれて口から水を迸り噴き瞬く間に火を消し止めて危難を救ふたと言ふ。その後安政の大地震に際して再び田邊町が火焰に甜め盡された時にも、同じ様に噴水したので今尙鎮火の守神として名高い。樹齡は凡そ一千年幹の圍り三丈、梢は天空を拂つて十二間の高さに達してゐる。

一説に樟の木それ自身が水を噴いたともいひ傳へられてゐる。

田邊の藩主 (田邊)

安藤家の祖先は安部仲磨から出る。仲磨から七代の裔孫安部左衛門朝任に至つて、藤原姓となり七つの引領の紋を賜はつた。是から安部、藤原の頭字を合せて安藤氏と稱した。幼から弟重信と共に家康に仕へた。年十七の時、姉川の戦に功を顯した。家康の駿河に隱居となるに及んで本多正純・成瀬正成と共に其の老中に加はつて政務を預り聽いた。後徳川頼宣の駿遠を領するやうになつて其の傳相を命ぜられた。元和三年、遠州掛川城、一萬石を加へられ、同五年七月掛川から轉じ、紀伊田邊城主の命を受けると頼宣から更に一萬石を加へられ、與力、足輕同心の給分共、合せて三萬八

千八百石餘を賜はつた。

潮垢離濱 今の元町金比羅宮の下の濱にある。後白河法皇、熊野御幸の時、潮垢離をなされた所である。今鬮社祭禮にこゝに潮垢離の式を行ふのは、之に因んでゐるのである。

腰掛岩 潮垢離濱にある。こゝに後白河法皇の御腰を掛けなされた岩であると申し傳へてゐる。

髭洗井 古町の山際に井の跡がある。文明中連歌師宗祇此地に小庵を結べる時堀れる井であるといふ。

世を旅に宿をかり田の邊かな

と詠んだのも此庵であつた。宗祇が湯川といふ姓を假れるのは此庵のありし上野山は湯川氏の砦があつた頃で其縁でこゝに閑居したといふ。

蘇生山 ヨロズ 黄泉山を訛つたので熊野は冥途黄泉の神であるからだといふ。又いふ清姫が安珍を追かけ、あの栗栖川のねじ木でしかと安珍の姿が田邊町會津橋を渡る所を見届け五里の道を息をもつがすマラソン競走のそれならでひた走りに走つた。

田邊の西の町はづれヨロズ山に來た時さすがの清姫も阪道にぶつたほれた。折柄通り合せた旅醫者に救はれやつと息ふき返したので蘇生山と名づけられたといふ。

落武者の最後 (田邊)

暗黒なる空、どんよりした色の海。怒り狂つた海は白波を持ち上げて扇ヶ濱にとひた押しに押し寄せて來る。扇ヶ濱の波打ち際、十町の間は眞白な泡沫が砂を嚙んで咆哮してゐる。

まだ三時と云ふのに太陽は雲の後でその周圍の空をぼんやり照らして居る位で四面はもう淡暗い。風はもう止んだが波は愈々高くなる許りである。

その波間——白い波頭の間を必死に岸に近づいて來る一艘の和船がある。東風にあふられて沖へ沖へ流され様とする舟を力一ぱいで岸に近づけて居る。揺り上げられ揺り下げられする舟の中には胃を着た二人の武士、一人は甲を取つて大童となり倒れさうな足もとを踏みしめながら櫓を漕いで居る。他の一人は舟の舷に手を掛けて振り落されまいと、しがみ附いて居る。二人とも武士とは云ふものゝ、顔色の青白い、すらりと丈の伸びた關西武士、西國に逃げんとして逃れ得なかつた平家の落武者、源氏の兵に追はれ追はれて遂に熊野まで來たのである。

ほんの二三十分程前には田邊に上陸しようかしまいか迷つて居たのであつた。

田邊は熊野別當や辨慶の出生した處で、今では源氏に組して居るのである。しかし田邊へ上陸出來ないからと云つて一里だつて前の方へは漕げないし、それかと云つて今朝源氏方に追はれた南部

の方に歸るわけにも行かぬ。まゝよ今此の舟と共に沈んでしまつた方が良いのではあるまいか？しかし平家は未だ滅亡してゐない。風前の燈火とは云ふものゝ、まだ落ち伸び得る見込は無いでもない。吾等も敗れたりとは云へ平家の武士である。平家の未だ滅亡せざる間はそも無やみに死ぬ事も出来ぬ。田邊に上陸したならば、どうせ見附かるにはきまつて居る。見附かつた時は見附かつた時で何とかなるであらう。一人でも二人でも源氏兵を斬つてから死んでも遅くはない。

斯う決心をした平家の落武者は轉覆しさうな舟を漸く扇ヶ濱に乗り附け、素早く松林に姿をかくした。淡暗闇の中に空腹と疲労を抱いた二人は新庄方面へ落ちのびる積りで刀をたよりに食物をあさりながら重い足を引きすり引きすり木影に姿を消した。

田邊のはづれ權現山の麓の一軒家、もう此處を通りさへすれば大丈夫、新庄も眼の前だ。明朝までには田邊からすつと離れるであらう。

斯う思ふと急に疲労を感じてきて腹が減る。一軒家からの酒、さかなの臭がどうしても鼻を去らぬ。何か食ひたいなあと暫く佇む折、がら／＼と開く一軒家の障子。ふと見上げた落武者の顔、それは見るまに眞青に變つて、唇はぶる／＼震へて居る。

「ヤツあやしき者！」と一軒家から出て來た源氏方の武士達。世は源平の戦の眞最中、源氏は平氏を怨み、平氏は源氏を憎む。

「平氏の落武者」源氏武士達は直感した。

「やいッ！待て！逃けるとあらば承知致さぬぞ」源氏武士は早や刀の束に手を掛けて居る。

「失敗つた」見附かつたと思ふや二人の落武者は死者狂ひで今來た闇に逃げ出した。

「逃がすな」待て」口々に何か罵りながら熊野武士は追かけて行く。道は曲りに曲つた長い細道で此の道のつきる處は扇ヶ濱である。その上その兩側は深い竹籐と、いばらの繁みである。うまく此の中に逃げ込めば、中々さがし出す事が出来ぬ。

空腹の爲めに走つては打倒れ、打倒れては走り、一氣に八九町も走つたがもう一步も歩けぬ。これまでだと松の根方に打倒れて動かない。兩側の籐やいばらの中を一つ／＼調べながらも様子知つたる源氏武士、幾時もとぬ中に早くもどや／＼と押し迫つて來た。

もう誰が來ても逃げる力がない。たゞ寄らば斬らんと身構へたものゝ、それもほんの型だけに過ぎない。それと知つた源氏兵の一人つか／＼と寄つて

「起きろ！」と一人の頭を蹴つた。

「武士の頭を土足にかけるとは無禮者！落武者とて侮どるなッ！此の怨は死しても忘れぬぞ！」

最後の一太刀、怨の一念——力をこめたる片手斬り前に進んだ一人の脇腹に深く——眞赤な返り血を洗びた二人の落武者今はこれまでと顔見合はせて自刃した。

其後何時からともなく、「平家の落武者が自殺したあの松の所に幽霊が出る。眞青な顔をして口からたら／＼と血を吐きながら源氏を呪つて居る」と云ふ話が評判になつた。

龍泉寺（田邊）

小さいながら田邊町と云ふものを發展せしめた會津の流の西側に龍泉寺と云ふ淨土宗の寺がある。日曜毎に無邪氣な小供等が茲に集つて貴い佛の教を受けて居る。さて此寺に一つの傳説がある。昔延暦年間に奈良の權操僧正が大旱魃に雨を祈る爲、大和國布留社で藥草喻品を七日講ぜられた所、毎日何處からともなく童が來て御經を聞いてゐた。七日に滿つる日「何者か」と尋ねると童は「私は此山の小龍ですが七日の聽聞により安樂世界に生れます事の嬉さよ」と云つて隨喜の涙を流した。

で僧正が「龍は雨を心に任せるものだから雨を降らせてくれ」と云つた所「大龍王の許がなくて、自分の計ではなり難うございますが、後生菩提を御助け下されば身は失せても雨を降らせませう」との答、「宜しいとも、必ず追善しよう」と御諒承あつたので、小龍は雷となつて昇天し雨を二時程降らせたがその身は碎けて五ヶ所に落ちた。僧正是を憐み、その五ヶ所に五寺を建立して懇ろに弔つてやつた。龍泉寺が即ちその中の一つであるのださうだ。

船幽靈（田邊）

頃は文久元年のことで所は田邊城であります。

夏も過ぎ初秋の或る夜、半三と云へる片町の漁師が現今も残つて居る水門よりふと海上に大魚の跳る有様を見て長井岩男なる藩士の居宅へ報告に参りましたので、彼は二人の友と共に夜網みをすることにしました。やがて船の用意は出來て半三共四人で水門を出ました。其夜は妙に波靜かので大魚は一向見當りませんがいつになく他の魚が多く有りました。が網をうてども／＼一匹の魚さへ取れません。彼等四人は尙も船を右よ左よとあやつりながら捕魚に餘念がありませんでした。しかし波は靜かでありませんが、あたりはいやに赤い様な又オレンヂの様な海の色に見えて一、二間のさきは、ぼんやりとして見えませんでした。

ちやうど今の波止場の所へかゝる時突然微かに彼方に男とも女とも知ることができない髪をばらりと切りはなつた二名のものが此方の船へ／＼と來る様に見えました。此れを見ました四人はそら出た例のやつだと刃をぬくやら船板で水を掻くやらしてやつと水門まで漕ぎ着けましたけれども氣が變になつて人を見れば切る様になつたさうで、暫らくしてやつと正氣に返りました。其の時はさ

すがの猛き武士も青くなつたさうです。これが世にいふ船幽霊といふのだと大評判になりました。

勝入齋父子の幽霊 (田邊)

田邊の藩祖安藤帶刀直次公が尾州長久手の戦には未だ彦兵衛といつて家康直參の旗本であつたが同じ日に豊臣軍の大將池田勝入齋信輝と紀伊守之助の父子二人の首をとつたので直次公が田邊に封ぜられた後も父子の怨が安藤家へ崇つてか田邊城内にも和歌山藩邸にも父子の幽霊が時々出たさうで代々の殿様が若死しました。二代直治公は三十で死し三代直門は公十九で死にました故後には世繼は生れると直に下々の子として育てました。現に先代直行公は幼名を捨福丸といつて中間の家で大きくなりました。

行の森 (田邊)

田邊の町の東に盡きんとするところ湊村三郡製絲場前に少しの廣場があります。古老の言によりますと數百年の昔のこと、或奇特な行者が行をする爲に埋つた所ださうです。それから後埋つた人

は二三人ださうですがそれらの人々が埋る時には身体を清めて自分の信ずる神に祈を捧げ白衣をつけて深さ二三間、一間四方位に掘つて、その周りを石で登んでその中に這入る時には自分の財産及衣類や暫くの間食つて行く事の出来る色々な腐らない様な旨い果物などを持つて入つたのださうです。中に入つてからは上を石で蓋ふてもらつて石の上に正坐して一心に神を念じ腹がへつて來ると果實を少しづつ食つてその食物がなくなつた時には神を念じつゝその死をまつたさうです。それで町の人々は此處を行の森と云つて尊び今でも掘らないで草地にしてゐるのださうです。

首切井戸のあと (田邊)

どこの寄宿でも便所は傳説を生みやすいものですが田邊中學寄宿舎には他の寄宿舎では想像も及ばない位便所が多く傳説を持つて居ります。

僕等の寄宿舎の在る所は錦水城の立つてをった所ださうです。さうして便所の附近が丁度首切井戸のあつた邊です。そのためにこの寄宿舎が建てられて間もない間は夜な／＼かつて首切井戸に投ぜられた人々の靈が現はれて僕等の先輩を悩ましたさうです。今でもその靈が呪はしくも着きまつて便所の敷石はきちんと疊まれておりません。直しても直しても其の翌朝は元の様にだらしなく

亂れ敷かれて居ります。

切戸地藏の一本杉 (田邊)

明治維新の頃在所の或る男が田邊城下に賭博に来て物の見事に多くの金を得て、ほく／＼喜んで一杯氣嫌のチドリ足で會津川堤を東へ／＼我が家へと歸りかけた。と切戸地藏(紺屋町の少し行つた堤の横)の所まで来たとき突如覆面が表れた。彼を熊手でむごくも殺した。それを一本杉の根本に埋めてしまった。其の夜から毎夜一本杉からは幽霊が出たさうである。下手人はいふまでもなく先きの賭博に負けたものである。しかし一本杉も二三年前に切拂ふて年を追ふてそんな噂も忘れられてゆく、毎年盆の廿四日の晩には美しい提灯の灯がすゞなりの山形をつくつて涼しい河風にゆれながら會津川に映るころ町の人々の参詣するものが多い。

三倉屋敷 (田邊)

今より二百年以前田邊町上屋敷町に三倉屋敷といふ屋敷があつた。此の家の主人は安藤直次公に

仕へてゐた祿の高い家柄であつた。此の屋敷には老人夫婦と主人の妻とその子佐太郎と五人家内であつて其の他家來、女中が澤山召し使つてゐた。

新に入つて來た女中に梅といふ女があつた。梅は老人夫婦に又なく可愛がられ、佐太郎のおそばづきとして侍るのであつた。いつか佐太郎と梅とは戀仲となつたので、老人夫婦と主人とは大そう心配して梅をば何んとかして家から出さなければならぬと思つて佐太郎を呼んで云ふには「おまへは彼の梅を嫁にするといふことは我が家の家名にかゝはるから、彼女のことはわし達に任してくれ」と誨さんばかりにいつた。佐太郎は今更仕方もなく黙つたまゝうなづいた。老人夫婦と主人とが梅に云ふには「おまへはこのやうな所で奉公をして居つても仕方が無いから大阪へ今から三年奉公を務めて來よ。さうしたなら佐太郎の嫁に貰つてやる」と云つた。梅はそれをほんとうの事にとつて、やがて主人に暇乞をして大阪にいつた。梅は大阪で一心に奉公をしてやがて三年といふ可成り長い月日を送つて、先づ自分の郷里である湯崎にかへり、再び三倉屋の門前に立つた。

以前見知りの彼の門番に佐太郎様と逢はしてくれと云つたが門番は劍もほろ／＼に梅のいふことに取合はなかつた。なぜなれば佐太郎は門番に美しい女が今に來るから來たならば、けつして入れてはならんぞといひ附けてあつたからである。梅は其處で始めて自分が欺かれてゐたといふ事に氣がついて一度は湯崎へ歸つたが此仇をどうして取らいで置くものかと女の執念恐ろしくも復讐に燃え

た。さうだ、自分は死んで仇を取りかへすより外に方法はないと決心したのであつた。其夜我が屋を脱け出た梅は三倉屋敷へやつて来て、とう／＼門の柱に首を縊つて死んでしまつたのであつた。その朝佐太郎が朝飯を食べようと思つて茶碗を見ると、五寸もあらうかといふ様な大きな蟹が茶碗一杯にふさがつてゐるのでした。佐太郎は驚きのあまりぶつ倒れた。それから病氣になつた。雨の降る晩には傘をさして大きな音をたて、佐太郎のそばに来るのです。又佐太郎の寢所のそばでげた／＼笑ふのです。彼はとう／＼お梅の死靈に取りつかれて死にました。それから夜家人等が火鉢圍をんでゐると不意に屋根の上でげら／＼笑つたりするのです。ある時隣座敷の襖がすつとあいたので家人等はそら來たと狼狽して逃げるはずみに火鉢を蹴倒しそれが座敷に燃え移りとう／＼三倉屋敷も灰燼となつたさうです。

牛の鼻 (田邊)

田邊町元町字牛之鼻と言ふ所に次のやうな碑がある。「日高郡熊野神社渡御舊跡」昔關東奥州の人が西國参りをして日が暮れたので一行は岩あな(牛の鼻)に宿をとつた。夜になると遙か海を見ればピカ／＼と光つてゐるものがある。翌朝行つて見ればそれは神様の御神體であつた。一行はそれをいたゞいて東國の方へと出立し和歌山の熊野まで來た時にこゝによき場所ありとそこにうつし

祀つた(今の熊野神社一の鳥居)。牛の鼻といふ名は何が元となつて稱へ出したのであらうか。昔から其の場所に一つの岩山があつて波浪にうたるゝ事幾春秋、こんなぬけ通しの穴になつたのださうだ。この山には二本の松の木があり山の形は丁度牛が夏の日中に疲れた爲めに、ねころんでゐる姿によく似て居る。二本の松は角で、ぬけ通した岩穴は鼻で山は胴体で大体に牛の形である。それが何時の頃か磯嵐のために一本の角である松の木が折れたのださうである。今は茶店が出来て熊野往來の旅人が牛の鼻の穴をぬけ通る涼しい風に遠く海洋を眺めながら休憩する場所となつてゐる。

磯頭岩洞穴 形状眞奇絶

長嘯吞滄溟 時又含明天

番所の鼻の猿 (白濱)

人もない番所の鼻の眞晝何所からとも知れず出て來た一匹の猿は潮の干た岩影の腹を取らうと焦つて居た。空は晴れて遙かの沖の雲の峯ばかりが異常な眩しさで輝いて居た。

今一度手を出した猿は離れる事も出來ない腹の囚となつてしまつた。やつきになつてもがく度に毛は撚り落され金切り聲に荒れ苦しむ猿はどうする事も出來なかつた。日は暮れてゆく南國の濱邊

の満潮は此上もない大きな擴りに漫々と湛へられて次第に砂を沈めていった。

海中に引き込まれまいとして何の甲斐もなく猿の体は次第に潮の中にひきずられ果は頸まで浸されさうになつた。と丁度漁夫が彼方の鼻を廻つて此方へと近付いて來た。やがて捕られた鰻はぬる／＼する岩の傍に掴むものもないあつけなさに砂の上に投げ出されて居た。見廻して居た猿は歡びに満ちた叫を残して姿を消した。漁夫もなんだか面白いやうな嬉しいやうな心持で濱邊を去るのであつた。

やがて漁夫の頭にさうした追憶さへうすらいでいった。漁夫の家は濱邊の一軒家である。ある日彼は家で網を繕つて居た。と不意に出て來た猿は山の芋を彼の前に置いてそこはかとなく立去つた。始めて本當の人を知つた猿には強い印象が残つて居たんだらう。

漁夫は靜かに鰻と猿のあの時の争ひの不思議なシーンを呼び起して理由もなく微笑まれた。

白良の濱の甲羅法師 (白濱)

温泉で名高い白濱の村に彦左と云ふ力の強い男があつた。

或年の夏田の草取の歸途甲羅法師と命がけの角力を取つた。そして彦左が勝つたと云ふ。それま

で度々甲羅法師が陸へ上つて來て惡事をするので以後陸へ上らぬ條件付で命を助けてやつた。

其の時彦左が萬一白良濱が黒くなつて沖の四双島へ松が生えると陸へ上がらしてやらうと云つたので其の後甲羅法師は四双島へ松を植ゑたり白良濱へ墨を塗つたりしはじめたがいつも波にさらはれて目的を達せずと／＼陸へ上つて來れないやうになつたと云ふ事である。

甲羅法師と云ふのは河童の方言でしょう。子供の時海水浴に行つて甲羅法師に尻を抜かれると云つておどろかされたものです。

温泉村の祖先 (湯崎)

今よりおよそ、五百年昔のことである。淡路方面の漁夫が俄かの大嵐で三十幾隻の漁船は、どれもこれも我勝ちな方面に吹き流された。其の内の二隻は湯崎の海邊に漂着したのであつた。この二隻も亦二つに分れて、一つは今の鑛山の一つは今の湯崎に着いたのである。

湯崎についた方では、さびしいながらも陸地に上つてやつと命拾ひをした喜びはつゞみきれなかつた。そして海岸に噴き出て居る泉などを見て、珍らしがつて居た。彼には妻も同船してゐた。

(當時湯崎には同じく流れ寄つた者で十四戸で村を作つたといふ)それからの彼は職業を求めざる爲に

苦心した事であつた。しかしまだ當時一向開けて居ない湯崎の事故に、野生のもので彼等は露命をつないでゐた。かれ等は一方に百姓を營み、かたはら漁獵をした。田はおもに、鑛山の方面だつた。そして彼等は絶えず噴出する泉の前に、みすばらしい茅屋を造つた。幾代か後に彼等の家は旅館業をやる様になつたのである。其の頃にはもう湯崎もだん／＼發展のけはいが見えて、早くもこゝに温泉旅館を營むことの利益を知つて、あしこゝに宿屋が建てられるやうになつた。彼等夫婦の始めた旅館はまづ第一に先鞭をつけたゞけに、客足をひいた。それが今の淡路屋ださうである、そして彼の最初漂流した時發見した泉は海岸通りの道ばたに堂々たる洋館となつた。それが今の濱の湯ださうである。湯は勿論自分の物では無い。が彼が作つてゐた田は依然として彼の家得である。かくて今日の旅館といふ旅館が大概あの時漂着した人達を祖先にもつてゐるといひ傳へられてゐる。

次に鑛山に流れ寄つた男は不圖海岸にキラ／＼光る物が散亂してゐるのを發見した。勿論此れを金にしようなどとは思はない、それが一体何であるかが、分らなかつた、しかし彼は、それを拾ふことをあたかも仕事の様にして居た。遂に彼は、自分で、嵩口や、鑿を造つて、大きな穴を掘るに至つた。其の時分の事であるから、鑛石は多くあつたに相違ない。彼は益々力を得て、困難な仕事をせつせと、やつた。ハンマーの石を打つ音が巖窟をもれて響く日が毎日のやうに續いた。

彼がある日こつ／＼鑛石を掘つてゐる時であつた不意に頭上から大石が轉り落ちた。彼は傷を負

ふて失心した。醫者は勿論、藥としてない弧島のやうな村だ。彼はこの日から草の床に呻吟した。しかし神は彼を捨てなかつた。彼が傷した頭を抱へ乍らちようど湯崎の方にやつて來た時に、彼は一人の老人を目ざとく發見した。彼は老人に傷の苦しいことを話した、すると老人はひどく同情して色々傷に對しての療法を教へた。老人のいふ事を彼はもらさず聞いた。「それは此の向ふの海岸に近い所に温い泉が盛んに湧いてゐる。その泉に、一日に二三回かゝさすに、は入りなさい」といつた。

彼の喜んだことは一通でなかつた。彼は又とぼ／＼老人に教へられた湯まで辿つて行くのであつた。併し後の足はもう一步も歩るけなくなつた。彼は路傍に倒れた。けれども折角老人が教へてくれた療法を無駄にして引かへすはあまりに残念である。彼は又心を取り直して立上つた。そして休んでは歩み休んでは歩みしてやつと峠まで來た時に湯崎村の此處彼處に煙が登つてゐるのを見た。彼は驚いた。きつとあそこには人が住んでゐるのだ彼の歩みは急に元氣づいた。彼は漸くにして湯に辿りついたのである。彼が一日二日と湯治して居る内に果して彼の老人の教へられた通り傷は平癒した。それが今の屋形湯である。その隣りの元之湯は瀬戸村の人が始めて見つけた湯ださうである。崎之湯は天狗が高尾山に腰をかけて、立ち上る時に出來た足跡が凹んでそこから湧き出した湯であるさうだ。

親鸞上人と湯崎 (湯崎)

紀南郷導記には「マブの湯」は在所の東にあり疝氣脚氣冷症に善し「屋形の湯」は小瘡を治する事、奇妙なり、此山上に薬師堂あり開帳は鳥目百餘なり。堂守は瀬戸村土人三太夫といふものあり此の地に來つて住居す。「元の湯」は下疳諸瘡毒に善し、昔親鸞上人此湯に入られしと言傳へたり。されば「門徒の湯」とも言ひしと見えたり。

まぶ湯 (湯崎)

「湯崎も昔は鑛山で賑やかであつたさうだ。鉛山といふ地名もそれから來たのかとも思はれる。

昔貧乏なお爺さんがあつた。そのお爺さんが冬になると、とても私等の想像も出來ない程「しもやけ」をしたり、「ひび」をきらしたりする。それで貧乏な上に働けず一層貧乏することでした。神や佛に祈つては「ひび」や「しもやけ」の癒るやうにと立願しました。或夜有難い夢を見た。それは或所に貧乏な夫妻が在つて夫は仕事の爲に病氣となり、妻が、甲斐なくしく働いてゐました。或

日妻が磯で貝を拾つてゐる時亡つたはずみに怪我をしました。そして「しもやけ」をしてあつたのが潰れてとても痛みが堪えられませんでした。すると神様が出て來てその女を岩の間のぶくぶくと湯が湧いてゐる所へつれていつて手や足の怪我を浸して癒してやりました。こんな夢を見たお爺さんは夜の明けるのを待つて夢で見た岩の所へ行きますと湯が本當に湧いてゐました。お爺さんは神の助けと喜こんでその湯で毎日々々手足を洗ひました。すると夢の通り「しもやけ」や「ひび」は不思議にも癒つたさうです。それが今のまぶ湯であるといひます。

魚釣の鼻 (湯崎)

湯崎の海邊何時も魚釣に行く魚釣の鼻と云ふ所がある。そこで、もし道具をかく(磯に道具のつりが引つかゝること)なればどんなにしても取れず、又其處へ舟で來て櫓をあてるなれば必ず大損害をうけると云ふ傳説がある。

「昔源頼朝公の御近臣安達藤九郎盛長と云ふ人があつたが、頼朝公の勘氣に觸れて紀州へ流された。盛長は今の瀬戸の盛長山に一人住まつてゐた。この人は大層魚釣が好きで又上手であつたさうだ。或日この盛長が今の魚釣の鼻——昔は何といつたか、わからないが——そこへ行つたの

だ。所が、どうしても釣れない。終には道具を置いてしまった。何年間と魚を釣りに行つたが上手な盛長もこゝで一回だけかいたのだ、そこで盛長が怒つてそれからは死ぬまで魚釣りに行かなかつたさうだ。

盛長の住まつてゐた所へは今もあるとほり、藤九郎盛長神社といふ祠が建てられた、それが今の村社である。

疝 氣 湯 (湯崎)

八十四代順徳天皇の御代のことであつた。一人の衰へた老人が疝氣で道傍に座して、頭を垂れてさも悲しさうにしてゐたのを通りかゝつた一人の白髪の老人があはれと思つて言ふには「此の道を辿つて里に出たならば泉がある。その泉に入つたならば癒る」といつたので、衰へた老人はそのとほりにするとやがて疝氣は治つたと言ふ。それが今の疝氣湯ださうだ。

豆 や 一 ば ち (下秋津)

蛇は寸にして人を呑む。豆や一ばちは身体は小さいが大獣をも恐れないといふ氣象の男でありました。好きこそ物の上手なれといふ諺に違はず彼は非常に狩が上手でありました。狩に出ると何時も獲物をもつて歸らない時はありませんでした。

或日の事銃を肩にして坂本の峰をおりて山の中腹に來かゝつた頃彼は餘りの不獵に側の石に腰をおろして腕を拱ねき思案にくれて居ると頭上で豆や一ばちくと呼ぶものがあります。方向がしかと分らないが樹の上らしい。

彼は餘り喧しく呼ぶので「オイ何の用事な」と答へました。すると上の方で「一ばち薪やろか」と叫びました。

豆「オー呉れ。」と答へました。

すると人間の手が落ちて來ました。

再び「一ばち薪やろか」といひます。

豆「オー呉れ」と答へると、人間の足が落ちて來ました。

驚きながらも豆や一ばち此はてつきり天狗に違ひないと思ひ。おのれ憎つき天狗め同胞の仇敵討たておかじと鐵砲に視をさだめ、やがて又彼の呼ぶのを待つて居りました。其の様な事あるとはつゆ知らず又その上の方で「豆や一ばち薪木やろか」と叫びました。

豆「今度は俺の方から良い物をやるか」と叫ぶと共に引き金を引きました。すると弾は命中したのか怪物は彼方の松の木の上に呻き聲と共に大きな雲を巻き起して立ち去りました。

幾日か立つて豆や一ぱちが崎之湯へ行くと負傷した大きな入道が風呂に入つて居ました。これは先日一ぱちに討たれた天狗の變装したものでありました。腕の傷を癒さうと思つて湯に入つてゐたのでありました。

大入道傍の人々に向つて「わしは數日前山道を歩いて居ると何處からか鐵砲の彈丸が飛んで來て斯く傷したのである」と話してゐるのでした。それを聞いた豆や一ぱち恐しさに腰も抜けん許りに驚天し早速そこに浮べる漁船に打ち乗つて逃げた。然るに其の船は天狗が彼方の四双島から乗つて來た船であつたから天狗は船を豆や一ぱちに取りられて島へ歸へる事が出來ず崎の湯の裏の穴に這入つたといふ事で今でも其の穴を天狗の穴といつてゐます。

會津川附近

秋津の鶴（下秋津）

秋津の或る山邊にとある富豪が住んで居た。大きな庭の彼方には小高い巖が聳えて居た。其の巖の窪に或年鶴が巢をかけて一個の卵を生み落した。

さもしい戯に一時の面白味を託するのは矢張人間だ。する事もなしに庭を歩いて居た園主には好奇の光がただよひ始めた。間もなく彼は沼の家鴨の卵とそれを取り換へて置いたのだつた。

雌鳥はそれとも知らない。唯優しさと限りない慈しみでそれをあたゝめてはあたゝめた。日は経てどんな悲しみが雌鳥の美しい眼を引掻きまはしたらう。巢の中にはあの醜い嘴のだゞつ廣い黄色な家鴨の子が居たんだ。

雌と雄の互に見合はず眼にどんな驚きと悲しみが人知れず籠つて居た事だらう。臆て雌雄の鶴はさも悲しい叫びをつゞけながら青空高く舞ひ上ると、見るまに二匹は何所とも知れずに去つてしまつた。

幾日か経てそれ等は多くの友を連れて來た。矢張り友達等も悲しさうに鳴くばかりどうしやうと言ふ考へもないらしかつた。もうもどかしさに堪へられなくなつたのか、一羽は巖にあの白い體を

うちつけて、斷末魔の羽ばたきをしながら無惨な死を遂げた。一つは沼に陥つて死んでしまった。そして呪に迷ふ二つの靈ばかりが残されてしまった。

それ等を靜かに高樓から見居た園主の顔には言ひ知れぬ憂と悶の影がたゞよひ始めた。「救はれない罪」面白くもない日はそれから毎日のやうに續いた。庭の木は枯れる田や畑は壊れた。自分の富の廢滅を見つめて居る園主には自分の過去の如何に鶴への戯に好く似た運命の繰返されて居た事を思つて今更のやうに戦きの止まないのを感じた。家は消えはてゝ今は早や土地の人々にも忘れられた。そして草原ばかりが残つて居る。

龍^ノ神山の天狗 (下秋津)

昔、下秋津の里に一人の樵夫が住んでゐた。彼は毎日龍神山に出掛けて木を伐り出し町に出て賣ぐのが生活の全部であつた。母は老ひの身にも拘らず、わが子の爲に毎日辨當を持つて行くのが常であつた。

十二月頃の龍神山は日の光も漏さぬ大木が森々と老ひ繁つて、冷いじめ／＼した森の氣が身に沁んで来る、彼は餘りの寒さに斧ふる手を休めた。今までこつ／＼と木靈してゐた音も止んで一層

あたりは、ひつそりと淋しくなつた。

しかし母の事を考へると遠い山路を通つて辨當を運んでれる——又斧を手にするのであつた。木の葉の茂つた大樹の蔭に憩ひながら饑えた猿の様な腹を抱えたとき、母の持つて來た辨當、それは麥飯であつても非常にうまかつた。所が毎日不思議な事が度々起る様になつた。木を伐つてゐると、轟々たる音が聞えて、辨當がなくなる。

家へ歸つて問ひ合して見ると、確に持つて行つたと言ふ。そこで彼は獨り考へる事があつたと見えて裏へ行き、大きな荒砥に斧を載せてごし／＼磨ぎ出した。

水のついた手は凍る程冷い、然し彼は一心に研いだ。日も暮れ家に燈もつけられた頃彼は閃々とききました大斧をひつさげて家に入つた。何時にもなく彼は早く寝た。

母は不氣味に思つた。確かに手渡した辨當を受取らないと言ひ、又半日中斧を研ぐなんて、氣が狂つたのではあるまいか。又龍神山の神域でも汚して罰が當つたのではあるまいかと。しかし翌朝になると息子は非常な元氣でお晝を持つて來る様にと言つて出掛けた。

今日は何時もの森の中に入つても彼は木など一向きらず、母親の來る所の木蔭にかくれて息をこらして忍んでゐた。しばらくすると母親が向ふからやつて來た。息子の名を呼ぶ。しかし彼は姿を見せない。急にあたりが暗くなつたと思ふと兩肩に白い翼をつけ白いあご鬚の長々とたれてゐる

顔の赤い、勿論鼻は高かつたのに違ひない、天狗が辨當を受取つてゐる。彼は矢庭に躍り出した。天狗の肩先深く切りつけた。天狗はぎやつと恐しい聲を出すや否やばさ／＼と片翼を残して遠くへと飛び去つた。母親は只茫然としてゐる。

彼は凱旋將軍の勢ひで家の寶にと翼を手にして家に歸つた。

數日は経つた。彼は天狗の復讐を恐れて家に許りゐたが、或夜暗い晩ではあつたが續々と海の方から黒雲が湧き起つて雷鳴のするのを見て取つた彼は、天狗が復讐に來たのだと思つて堅く戸締りをした。

しばらくすると／＼戸をたたく者がある。そら來たと思つた彼はやにはに斧を手許に引き寄せて立上つた。母親はぶる／＼震つて念佛を唱へて居る。戸の隙き間から煙の如きものが入つて來たと思つた瞬間白衣の老人が立つて居る。肩先から腕は片方きり落されて赤黒いすた／＼になつた肉からはぼた／＼と血が流れる。刻一刻顔色が蒼ざめて行くかと思はれた。彼は思はず身ぶるひした。白衣の老人は苦しい息の下から微かにうめいた。

私をあはれと思はれませんか。眞に私をあはれとお思ひになるなら先日の翼をかへして下さい。私はこの苦痛を忍んで山からとぼ／＼歩いて來たのです。以後は一切惡事をしませんからと無い手を合さん許りにして頼むので遂に羽をかへしてやつた。白衣の老人は翼を片手につけるや否や天狗

の姿になつて、厚く彼に禮をのべ龍神山に向つてももの凄しい羽音を立て、飛び去つた。

其後天狗に出遇つた人は誰一人ありませんが、今でも龍神山で物凄しい天狗の羽音を聞くといふことだ。

稚兒の足跡と大人の足跡 (上秋津)

石ころばかりの傾斜のつよいだら／＼坂を這ふやうに杉林の間をぬつて出ると今までとはかはつて道もほそく又木々は小さい。しばらくおもしろくもない所を行くと黒く日にやけた岩がある。それにはつきりとした幼子の足跡のやうなのがある。里人はこれを「稚兒の足跡」といつてゐる。昔怪人がこの岩を踏みしめてさうして奇絶峽に跳んださうだ。ところがその跳ぶ間に大人になつてさうして奇絶峽の岩についたといふ。それで今でもそこには「大人の足跡」があるさうだ。茫然と怪人をおもひ浮べてゐると涼しい秋風が颯と兩頬を甜めて行くのであつた。

戸 閉 岩 (秋津川)

口熊野の一寒村に昔から人々に驚異の心を懐かせてゐると云ふ一つの傳説があります。所在は高

尾山の北麓秋津川岸に絶壁なしたる岩があります。其の下部に丁度戸を閉ざした様な岩に七五三繩が張られてゐます。之を戸閉岩と稱して今猶疑惑の的になつてゐます。

昔から其の岩戸の中には寶物が入れられてゐるといふ。苔むした岩戸に多年風雨にさらされては判然とはしないが、何か文字が刻まれてゐる。この古文字を讀破する事が出来たならば岩戸は自然に開くと云ふのです。

昔ある雲水行脚の僧が戸に刻まれてゐる古文字を殆んど讀み得て今一字で終らうとする、その時山鳴り地震動して僧は驚怖に堪え兼ねて匆々と逃げ去つたと云ふ事です。

雷の落ちぬ村（下秋津）

昔々それは大昔、下秋津村にしばしば雷の神が落ちて、其の都度村人を害した。村人は雷がゴロ／＼鳴り出すとだれもかれも恐怖するのでした。或は蚊帳の中にもぐり込むもの、鎌を戸口に立て、桑ばら／＼をいふもの、まるで氣が狂つたやうでした。それで雲の森さん（下秋津の鎮守神、熊野王子の一）が非常にお怒りになつて或る大雷雨の日、雷の神の落つるを見たと思ふと其の頸を引つかまへてしまつた。

雷神は大變驚いてひとへに天上に歸らして呉れと頼んだ。そこで、雲の森の神は雷神に嚴かに言ひ渡した「これから以後は決して下秋津に落ちては承知しないぞ」といふことで、やつと、雷神は天上に歸ることができた。それ以後下秋津には決して雷が落ちた事がなかつた。

しかし今から五六年前どうしたとか一回落ちたことがあつた。村人達は驚いたそれは其年のお祭にお渡りを廢したのが祟つたのだと言ふことに想ひ至つた。そこで新たに神輿を買ひ競馬を催し神意を慰むべく賑やかな祭をした。それ以後は雷が落ちた話を聽かない。

雷の嫌いな人があれば下秋津村にひき越するがよい。

釘拔きの橋（下秋津）

今は昔百有餘年前のことである。恐ろしい大海嘯が起つた時のこと、人と言ふ人生物と言ふ生物は何物も残さず悪魔のやうに押し寄せた海嘯に吞まれてしまふのであつた。無論田邊附近の物は何物も餘さず流された。その時大きな千石船が、荒れ狂ふ怒濤に奔弄されながら流されて行くのを見た。丁度其の船が上秋津邊り迄流れた時或一つの橋の傍で止つた。もう動かない。乗つて居る者はよみがへつたやうに喜んだ。

それから十日ばかり後には水は全く引いた。さてこの千石船どうしたものだらう。流されなかつたのは良かったが、持つて行く事は到底不可能であると思案の首をひねつたが、どうも妙案も出ない、そこで船に打つて居る釘を悉く引き抜いて船板をたゝんで持つて行つたとの事である。丁度船が此の橋で止つたから船に因なんで釘抜きの橋と名附けたのださうです。

爪かき地蔵 (万呂)

會津川の支流に沿ふた堤防を行くと三栖村の善光寺に至る迄に小さい小山の上にコンクリートの地蔵建築物の築かれてゐるのが見えるであらう。此は所謂小山の地蔵でその東の山の麓にも小さな祠がある。これが傳説の爪かき地蔵である。

時は第五十二代嵯峨天皇の御代である。弘仁八年の舊曆五月の下旬、即ち弘仁七年に弘法大師が高野山上に彼の金剛峯寺を開かれた翌年である。此の時大師はこの地方に來られたさうだ。舊曆の五月下旬と云へば今の梅雨期我國の最も雨のよく降る季候である。その時も非常な豪雨で川水が溢れて大師の通られてゐた所の東の麓の上には當時の事であるから完全な堤はあつたかどうかは知らぬがそれが今にも切れんとして居つた。

大師は初めての土地であるからそんな事とは夢にも知らず、何時止むとも知れぬ雨中をしのんでビシヤ／＼と泥道を東の麓中の道の方へ歩を進めて居られた。その時遂に麓の上の堤が切れて忽ち大洪水となつた。そしてその魔の手は忽ちの内に麓を嘗め盡してその勢は山麓に及ぼうとした。足元に氣を取られてゐた大師は此の時迄氣が付かなかつたが氣の付いた時には已に遅かつた。

併しちつとして居ればそれ迄だ、水に押流されて運命を共にせねばならぬ。「當に人事を盡して天命を待つべしだ、最後の手段を取るべきだ」と云はれたかどうかは知らなかつたが結局附近の山に逃げるより取るべき手段としては無かつた。それで此の際登る場所などを探して居られう。大師は今の地蔵のある所迄來た時附近の岩に手をかけて上らうと試みた。やつとの事で登られた。しかし非常に力を入れたので足をかけた所に爪あとが残つた。大師はやがて山頂の道に至つて東方に行かれたさうだ。

附近の人たちは大師の徳をしたつて居た折から、之を聞き、「之は大師の爪あとだ」と云つて其處に小さい祠を立て、崇めて居つたのが今日に至つたのださうだ。今行つて見ると長さ五寸位のノの形となつてゐる岩が祠の中に安置してゐる。附近には笹草が生ひ繁つて非常に荒廢してゐる。そして毎年八月の二十四日には西にある小山の地蔵と合併で盛大な投餅が行はれる。

お手かけ草 (三柄)

ちいさな草で畑に生える草、殊に蜜柑畑に多く生じる雑草が我が三柄村にある。昔、中三柄の尋聲寺と云ふ寺に、或るお手かけが大そう美しく花だと云つて持つて来たのがその草なのだ。お寺では方々の家に分けた。

さてそれが夕べの間に速にまさり人々の氣附いた時は早やおそく畑といふ畑には一面に生え蔓つてゐた。村人ども困りはてし草取りにかゝつたが速に生長する草であるからなか／＼絶えません。今は百姓の一番苦しい草引を尙ほ一層まさしめた。稱して村人達はお手かけ草といつてゐる。

五郎地藏 (三柄)

三柄村下三柄高坊と云ふところに、名ばかりのさゝやかな地藏堂がありました。それは何時頃建てたか誰によつて建られたか、左様な事は知られやう筈はない、併し、随分舊くから有つた者と見えて、その小さな地藏堂は殆んど朽ち果て、彫刻人知らずの木像の地藏様がぼつねんと塵に埋れて

祀られてゐました。

万治元年の頃此の村に五郎と呼ぶ少年が居りました。彼の家はごく貧しい生活をして居りましたが、彼の正直なことは近所でも評判のほめられ者でした。五郎は毎日々々山に行つてお花を切つたり、或は村人達の用を聞いては、家の生活の助けとして正直に、よく仕事に精を出して働いてゐました。

彼は今日も朝早くから山に行つてお花を切り、それを田邊の城下へ賣りに行くのでした。彼はこの地藏堂の前に荷を置いて休みました。彼は花束の中から若干の花をぬいてそれを地藏様の花筒にさして一心に拜みました。五郎はかくして毎日々々この地藏様にお祈りを致しておりました。

月日は夢の如く流れました。五郎も立派な若者になりました。そして今や彼は前の様な花賣りではなく田邊藩士小川氏の僕として前にもまして一生懸命にその職務にいそしんでゐました。

彼の忠實な務め振りは直に主人の知る所となつた。彼は段々主人に寵愛されるに従つて益々その勤勉振りは進んでゆくのでした。——何となれば、彼は主人に認められやうと云ふ様なそんな浅はかなさもしい考へで働くのではなく全力を盡して働きたいと云ふのが彼の性質であつたから——自分の缺陷を顧みずして他人の幸運を羨みねたむのは小人の常であるが、彼よりは古參の佐之助と云

ふ僕もその一人であつた。

五郎は何かにつけて佐之助の爲に虐げられた。併し従順な彼は佐之助が彼よりも年長であるの自分新参者であるが故に、素直に佐之助に従つてゐました。五郎が忍んで居れば居る程、それによい事にして佐之助は彼に益々つらく當りました。

その頃佐之助の主人と同藩士である落合某の僕、仁藏と佐之助の兩人は佐之助と同じ屋敷に仕へてゐる侍女の楓に人知れず戀心を抱いて居りました。

或る日左之助は仁藏に語らつて五郎を追ひ出さうといたしました。然し惡計はいくばくもなく暴露された。こゝに前から楓に思を寄せてゐた佐之助は幾度か悪を友とした仁藏が自分の戀敵であると知つた時、彼の憤怒の刃は必然仁藏の上に落ちて行くのであります。——その結果彼佐之助は遂に仁藏を失き者にせんと計つたのであります。

それは暗い／＼闇の夜でありました。ザーツザーツと打ち寄せる波の音のみが淋しく、夜の寂寞を破つて聞えました。佐之助は五郎に命じて仁藏を誘ひ出させました——海近い松並木であります。……その夜！その三つの影は何を爲したか？ その夜明け方大暴風がありました。——それは夏季には珍らしくない田邊地方の暴風雨でありました。

嵐の夜は明ける——あれ程荒れてゐた風は静まり海は凪いだ！。併し流石に濱邊には種々のもの

が打ち揚げられてそゞろによべの嵐の烈しかりしを語るかの如くでありました。それら、打ち揚げられしものゝ中から仁藏の屍が出た。

忽ち濱邊は黒山の人を築いた。やがて検死の役人が來た。そしてすぐ様佐之助と五郎とは囚れの身となつた。併し、五郎には何の罪科もないのである——彼はひとやの中で、自分が故郷に居る頃拜んだあの地藏様を幾度も／＼お祈りした。そして冤罪の明らかならんことをお願いするのであります。

或夜の事でありました。五郎はうつら／＼としてゐると「五郎」「五郎」と低い底力のある聲で呼ぶ者があります——彼は思はず目を開きました。見ると何うでせう。……：目前に立つてゐるのは確かに自分の日頃念じて居るあの地藏様ではありませんか、五郎は思はず平伏しました。地藏様はおごそかな口調で申されますやう——「五郎、お前は中々感心な男だ。わしは久しくお前に供養せられたあの地藏尊であるぞ、この度汝の冤罪を明かにせんが爲め此處へ参つたものだ」と。

かう言つたかと思ふと地藏様の姿はかき消すが如く消えてしまひました。五郎はハツと目が覺めてあたりを見廻しましたが誰も居りません、矢張彼は冷たい牢獄の中の囚人でありました。やがて夜が明けました。

彼はこの夢を唯の夢として、すてる事はどうしても出来ませんでした。そして前にもまして地藏

様を信仰しました。

やがて彼等二人の罪は決まつて打首にされることになりました。……いつかの夜の松並木で……佐之助の首は先づ打ち落されました。今度は五郎の番です。首切り役が秋水三尺水も滴らんばかりの太刀をふりかざしました。やがて氣合の掛け聲と共に、一閃きつと打ち下されました。ガチツと云ふ異様の物音が致しました。五郎は瞑目して端然として坐しておりました。

二番太刀は、はねかへされて首切り人は卒倒しました。群集は、此の變事はきつと何かの靈の五郎を助けるものだと思ひました。

かくして五郎の無實の罪は晴れた、彼は無事家に歸ることが出来ました。

村人は五郎の助かつたのは全く地藏様の御加護によるものだと言つて不思議がりました。彼、五郎自身も全く地藏様の御蔭だと云ふことを信じて居りました。

それから間もないことです、五郎の世話で地藏堂は立派に建て變へられました。靈顯あらたかな地藏様として人々からは非常に信仰されました。

それは、今より二百六十有餘年前、萬治元年の事です、この事あつて以來この地藏堂は誰言ふとも無く「五郎地藏」と呼ばれる様になりました。

今の御堂はそれから後當時の場所より一町程下手に建てられたものださうです。

米を洗ふ辨財天 (三栖)

今は三栖村内唯一の村社珠簾神社の一社あるのみだが、以前は各字悉く小祠を有し村内通じての社數實に多かつたのを今を去る凡そ三十八九年前明治九年頃一度整理合祀して其數を減じ更に明治四十二年に至つて合祀の結果村内一社となつた。

その合祀前のことの出來事であるが三栖村字三栖切岩には切岩神社として市岐島姫命を祀り現今作れる砂坊跡に大松生ひ茂つた中に祭られ彼の川の中島にあつた。所謂辨財天として特に世に尊崇の聲高く毎月朔日の朝は辨天様が米を洗ふのだとて此處より流るゝ水が白く濁ると言ひ傳へられたが正しく毎月一日に川の流れが白く濁つた。誠に不思議なことであつた。現今生存してゐる五十六七歳の人々はよくこの事を見たといふことだ。その後合祀せられてからはかゝることはないのとのである。今はその邊の澤から富田川迄も蛇の通道があつて大水の時などはよく蛇が現はれるといつてゐる。

衣笠城趾 (三栖)

三栖村大字中三栖彌五郎谷に在り。山麓より上ること八町にして山頂に達す山頂平坦なる所昔の城趾なりと。

土人傳へて云ふ、昔百合若大臣といふ人籠城したるに水の道を止められしにより、詮方なければ敵をして脅かしめん爲、白米を以て馬の背に流し、馬を洗ふが如く見せ装ほひたりと雖も戦況詳ならず。

又、文永の代(凡そ六百六十年前)龜山天皇の御宇、鎌倉北條時宗執權の頃愛須八郎源經信の居城たりしといふ。今の尋聲寺の石垣は此城の堀の石を取りて築きたる者なりと續風土記に見えたり。

現今此山頂樹木生ぜず僅に小松の點々散生せるのみなれども山上眺望絶佳にして田邊灣を脚下に聚めて見晴よし。而して現今此山上に東宮殿下御成婚記念として衣笠遊園地を作り益々其の眺望を佳くせり。

みすまるの里を照らして玉なせる月さし登る衣笠の山

岩屋觀音 (三栖)

下三栖字岩屋谷にあり。知法寺の南約二町、自然の大洞窟に處し其廣さ約三百坪に達する所謂巨

人釜をなせる中に一堂宇あり。眞に絶境たり。

此處に僧行基の作なりと傳ふる十一面觀音の本尊を安置し他に脇立地藏尊立像及び不動明王の坐像あり。其説に曰ふ。

寛延二年秋新庄村の某有志等は夢に三夜引續きて鳥の巢觀音御本尊告げて、波音高きを以て吾れ靜なる三栖村岩屋谷の靜境に移りたしと、其夢を見し某等は互に相談して不審に思ひ其時の東光寺住職通天大和尚に語りしに大和尚も亦同様の夢を見たりと。

いよ／＼不思議に思ひ茲に有志等凝議して其尊像を岩屋谷に移し奉りしと、依て昔より新庄村より鹽賣商人本村へ行商する都度其西方岩屋谷山上に初鹽を供して後通過せりと、又岩屋谷口の小橋は明治の末世に到る迄尙新庄村より架換に來れりと。本村に遷座し給ひてよりは岩屋普門寺と稱せられ古來靈所として尊崇を受く。

其堂宇は洞窟中に掛造られて十五坪の廣さあり。其造營は寛延三年庚十月知法寺住職禪佐着生の建設する所たり。今此靈所を尋ねんに邊り疊々たる岩軸の中に堂宇建立されて眞に仙境にあるの感あり。

はる／＼とたのみをかける岩屋山祈る佛の影ぞ新たに……(岩屋觀音御詠歌)

潮見峠合戦 (長野)

長野村馬鹿野の捨木坂は有名な古戦場である。

天正十三年、豊臣秀吉が根來寺を破壊し、又、太田城を水攻にして陥れ、吾熊野征伐の爲蜂須賀彦右衛門、藤堂與右衛門、仙石權兵衛、青木勘兵衛、尾藤甚右衛門、杉若越後守、宇野若狭守の七將と、家來七千餘騎を率いて田邊に押し寄せて來た。

是より少し先に日高郡の小松原の城主湯川中務少輔直春が豊臣氏が攻めて來ると聞いたので、近露に退いて横矢六郎に助を求めた。

此の時市之瀬村の城主山本主膳守が岩田川原に陣を敷き、岩田川を挟んで豊臣方の軍を撃退したが衆寡敵せず、遂に下川(地名)に敗北してしまつた。

そこで湯川直春、山本主膳の二將が新に聯合軍を組織して西郡栗栖川に本陣を敷き覗橋を落してしまひ、小野辻を嚴重に固め汐見峠を越えて捨木坂で豊臣氏と激戦した。然し湯川、山本勢は峻峻な山路に慣れて居るので盛んに駈けめぐつて大木、巖石等を投げて寄手を苦しめた。

さしもの藤堂、蜂須賀の勢も山路で、地理に明るくないため駈引も自由でなく、とうとう田邊に

退いて一旦休めて曠日彌久の策を立て、守つて居た。

然るに一方湯川、山本は附近の地理に詳しい爲種々様々の謀で寄手を惱し、遂に或風雨の夜に乗じて田邊の本陣を襲つて焼き立てたので彼等も遂に和を請ふて退陣してしまつた。故に翌年の天正十四年に湯川直春、山本主膳は一族を率いて和州の郡山に参観したが秀吉は拜調を許さず却つて欺いて直春は旅館に於て毒殺され山本主膳は浴室で暗殺された。彼等の末路は誠に憐れであつた。

其の一族等は或は自殺し、或は殘黨二百人押寄せて芳養の城主杉若氏を襲撃したが敗北したり、或は戦死してしまつた。かうして市之瀬村の城主山本主膳があれ程功を立てながら、あれ程まで奮戦し乍ら、報もなく遂に暗殺されてしまつたのは憐と言へばあまりに憐である。

今も龍松山辰卷之城跡が残つて居る。同村一乗寺に偉大なる功績のある山本主膳の墳がある。

勘右衛門の死 (長野)

田邊灣に注ぐ會津の流れを溯ぼること二里餘にして長野村に至る、自然の風光に恵まれたる山中の村、永久に平和そのものゝやうな此の村にかうした傳説があらうとは——翠綠滴る槇山の中腹に、危く轉げ落ちんとして辛くも踏み止まつた形の大巖石が突兀として其の頂を雜木林の中に露はしてゐる。土地の者はこれを大岩と呼んで罪人の儚なき最後を弔ふてゐる。

今から丁度八十年程以前天保年間に此の村に勘右衛門といふ獨りものが居つた。放縦の結果の生活苦か、孤獨の淋しさを忘れんがためか、夜な夜な作物を荒し留守宅を襲ひ時に農具、家具に至るまで手當り次第盗み取つた、犯人が勘右衛門だといふ事が早くから知れてゐたので彼に注意を與へたのは二人や三人ではなかつた。けれ共彼は依然として之を繰り返して更に改めなかつた。勘右衛門のかうした略奪に逢つた里人は大なる脅威としておびえ慄え、異端者として彼を惡んだ。

そこで村人は或夜勘右衛門退治に就いて會議を開いた。衆口的一致する所は彼に私刑を加へるにあつた。其の日は煙る春雨に槇山の頂は見えなかつた。今日を最後の勘右衛門は夫れと知るや知らずや堀立小屋に夢圓らかなる午前五時頃村の中央なる地藏堂には一聲の法螺の音が響き渡つた。多數の百姓共は竹槍其他の獲物を携へて彼の堀立小屋を包圍した。しかし勘右衛門は此の目に餘る大群衆に自ら觀念の眼を閉じて少しも抗はずして遁れ／＼て彼の大岩の頂に登つた。

此の時群衆の中に傳五由と呼ぶ男がゐた。彼は眞先に勘右衛門に近寄るよと見るまに手にした熊手を彼れの腦天に打込んだ。あゝ凄慘なる光景よ。全身血に染つた勘右衛門の罪の骸はそこに横たはつた。彼は苦痛の腫を幽かに見開き傳五由を睨んで「貴様の屋敷に必ず草を生やさで置くべきか。」と只一言彼の玉の緒は絶えた。それから星は移り物變つたが傳五由の子孫には決して男の子が生れぬといふことだ。

根 笹 の 櫻 (中芳養)

中芳養から南部に越える山路に櫻花を以て名高き根笹と云ふ勝地があります。此處には唯一本の櫻樹があつて満開の候には村民が唯一の遊場として春の休日を利用して花見に來るのであります。昔といつても文久年間のことです。櫻木の傍に常七と呼ぶ一軒の茶屋がありました。

或秋の日でした一旅僧が通りかゝり茶屋に休息して折柄秋の紅葉の谷間さら／＼と流るゝ水音を聞きながら何時ともなく眠つて仕舞つた。やがて目覺めて彼旅僧は其場を出立しました。さて數時間の後彼僧再び歸り來り日頃手に持つて居た杖を立てゝ主人にこの杖を抜取るとは堅くなりませぬと云つて前の路より下つた。主人が僧の言葉を夢にも忘れずにゐました。すると翌年其の杖より若葉が出て年々太くなり今日の如き大櫻樹となつて花の頃は霞か雲かと疑はるゝばかりの有名な根笹の櫻となつたのです。

天 狗 の 鼻 (中芳養)

流れもさゝやかな芳養川を上ること約半里にして左へ折れて崖の如き山の急な細路を爪先登りに

登れば又半里ばかりにして山頂に達する。山頂は全部禿げてゐて圓い小さな美しい石で敷きつめてゐる。

そして其の所々に或は山門に座つてゐる獅子の如く或は砂漠の中のスヒンクススの如き形状種々な大石が頭角を表はしてゐる。其の又所々に盆栽さながらの枝ぶりのよい美しい小松が青々と日光に輝り映えてゐる。目を下方に轉すれば千仞の谷である。何しろ高い所であるから南部や田邊の町が一瞬の下に集まり、瀬戸崎より切目崎の方へ太平洋を遙かに見渡される。弓形を畫した水平線に消へ行く煙の跡、附近の灣内を疾走する漁船、入江を取り巻く松の緑より立ち上る白い煙——遙か彼方煙とまがふあたり、熊野三千六百峯、肩を並べて蜿蜒龍蛇の如く走る。まことにこれ自然の一大公園である。そしてこの高所の最も廣い所の中央の高地に巨大な犬の如き岩石が突兀として座つてゐる。此の岩が即ち天狗の鼻と稱する有名な岩である。

話は昔のことである。此天狗の鼻と名づけられた大岩に天狗が棲んでゐた。此の天狗さんなかく痛快、毎日の如く熊野の天空を飛行機のやうに翔巡つて、時々人をさらつて行く。そして若しもそれが善良な人であつたならば大きな羽に乗せて方々へ見物に連れて行つて呉れる。そして十日ばかりも経てば又もとの所へ歸つて来る。そして色々とお土産を持たせて歸らす。

天狗さんと旅行して來た人の話はばかに面白い。まるで夢のやうな話であるが、今からでもすぐ

羽にのつて大阪へ日歸りにゆく。大阪の三越は大きいですなえと言つたやうな調子で平氣で遊び話しをする。併し若し浚はれた人が悪人であつたならばそれこそ大變彼の天狗の鼻の上から松の木の高い枝にもつてゆかれて、そこで八つ裂にされて谷底目がけて打込まれるのであつた。ほんとに見付かつたが最後身体は地下深く永久に姿を消すのであつた。

こゝに又面白いおぢいさんがあつた。彼の山麓に小さな庵を構へ毎日銃をひつ提げては山へ狩に行くのが常であつた。しかも身の丈拔群、偉大な体格そして眼光鋭く何事をやつても奇才がある。今はかく老衰した身とはいへ、どこかに武士の面影がれつきとして犯しがたいところがある。彼こそ桶狭間における今川の勇士山本源次郎定時であつた。

千軍萬馬の間を駆け巡つた彼定時も武運拙なく遂に流れ／＼て此處南紀州の山麓に身を隠し冬は山へ夏は海へとその折々の漁獵に安樂な日を過してゐたのであつた。或冬の日であつた彼は銃を肩にこの天狗の鼻附近をさまよつてゐた。

身を切る寒風も多年鍛へた彼の身体には何の苦痛もなかつた。彼も文武に勝れた好漢、あの天狗の鼻に腰を下した彼はこゝから俯瞰した南海の雄大な自然にしばし恍惚となつた。やがて彼は腕を組んで何か感慨に耽つてゐた様子だつた。彼の胸に浮ぶものそれは過ぎし何十星霜の昔や干を交へた桶狭間の戦が走馬燈のやうに頭に回轉するのであつた。そして思ひ出から思ひ出へ追想から追

想へと沈む時だつた。俄かに附近の樹木を揺がす異常の音と同時に山嵐が颯と吹き下すと見る瞬間彼の姿は地上遙か彼方の空に姿を消して行くのであつた。

數日たつた後だつた、村の者ども彼のおぢいさんの姿の見えないことに氣がついた。あゝあのおとなしいおぢいさんは何處へ行つたのだらう、もしや狼の餌にでもなつたのではなからうか、村人は彼の突然居なくなつたことに不思議の瞳をる見張るのであつた。この噂が人から人へと傳へられると村人から平生したはれて懐しみの深かつた彼のことゝて人々は二日も三日も山や林を搜索した。併し十日たつても二十日たつてもおぢいさんの姿は見えなかつた。

かくて去るものは日々に疎しの諺の如く月日の立つにつれておぢいさんのことはだん／＼村人から忘れられようとしたある日、それはあれから三ヶ月もたつての三月三日の御節句の日であつた。

村人が三々伍々毎年のやうにいろ／＼珍品を趣向したお辨當を用意して彼の天狗の鼻で飲めや歌へと遊んでゐた時だつた。そよ／＼と今まで彼等の頬べたをなでゝゐた春風がさつと急に強くなつて來たかと思ふと一種異様な音がして一陣の風がサツと行き過ぎた。村の人々の驚きは一通りではなかつた。すると不思議や村人の前に、そこには例のおぢいさんが倒れてゐたのであつた。

皆は夢かとはかり喜び喜んで酒や水やと浴びせかけた。やつと我に返つたおぢいさん。平氣の平さで今まで身を隠したわけを語りつゝそばの袋より取り出したのは黄金の茶釜であつた。折しも山

を照す春の日光を受けて釜はまばゆく山吹色に晝々と輝いてゐた。それがお爺さんの天狗からの土産であつたのだ。彼のおぢいさんそれからといふものは天狗さんのお氣に入りとあつて以後おぢいさんがこの岩の附近に來れば必ず天狗が迎ひに來たと云ふ。これより村人はこの岩を天狗の鼻と稱するやうになつた。

寄言の宮 (下芳養)

芳養王子は下養芳村の産土神である。古、神官があつて或夜夢に束帶の神人告げていふに「我は今度泊りの鼻に寄れる神である。早く我を迎へよ」と翌朝神官其處に到るに一つの笏が流れ寄つてゐたので直ちに迎へて御神体とした。或は言ふ、笏の流れ寄つた場所は今の川口に在る俎岩である。神樂歌に曰ふ「よりこと菊の花しるしにしやくしんよねが豊年でハリワドン／＼」よりことは寄言である、菊の花は九月九日の祭日である、しるしにしやくしんは驗に笏、笏と杓子に通ずよねは米である、豊年を祝するにめでたい歌である。

虫の堂 (上芳養)

虫の堂は上芳養村字西山に在り。境内三畝九歩、口碑に人皇九十三代、後伏見天皇の正安二年（今より六百卅年程前）に旱魃あり農作殆ど枯死す。里人此地に集り雨請の祈禱を行ふ。偶々七月廿三日夜大雨沛然として至る。翌朝小名田間に地藏尊一躰鉦一口あり。里人依つて此地に小堂を建て安置す。鉦の銘に常陸國小田地藏常阿彌陀佛正安二年二月日と刻しありき。

其後此堂に集り虫送りを爲せし故事あり。其の法は竹の棒を組み合せ其上に直徑四尺許りの輪を設け之を臺とし笹にて圓錐形の物を造り、其の中に米の粉を練りたる餅を入れ、一人頭上に御幣を立て「實盛さんの御弔ひ虫も蠅も御供せ」と口々に呼び立て、村送りを爲す。村民何れも長さ七八寸位の棒を持ち田の周圍を巡り火を點じて下芳養海岸に送出す風習也。毎年六月初丑の日行ふ。其費用芳養谷（十三ヶ村）の負擔にして此の笹御輿を擔ぐ者は肩瘡を患はぬとて遠く富田邊よりも希望者あり中々盛んなりしも、近年は全く其の事類れたり。

御影の淵（稻成）

稻成村字糸田高山寺の河岸に大樟樹がある。其の下は明治廿二年の大水害以前までは一碧の深淵であつたが水害後水脈が次第に變り今は河床高くなり水は其の東部を流れて居り御影の淵通稱楠木

の淵が名のみとなつて居る。

この樟樹の傍に一石碑があつて碑面には鑿淵との大書が刻んである。又裏面には左の文がある。高祖弘法大師、嘗て慈貌を此の淵に照し手すから肖像を彫り以てこれを留む。今微雲館に安置せる所是れなり。故を以て此の淵鑿淵の號あり、先師義讓碑を樹つるの志あり。檀越某及び老婆智白、財を捨て、之を營まんと欲せしが未だ果さずして皆歿せり。予深く遺憾となし、今爲めに前志を紹ぎ碑を樹て、以て之を表し、併せて銘す。銘に曰く「礎々たる斯の石、蒼々たる此の淵、光明道德深くして且つ堅し」

時に嘉永三歳次庚戌春高山寺主三世義汎謹書（原漢文）

こゝを御影淵又は鑿淵といふは昔弘法大師が熊野參詣の途次おのが姿を此の淵の水に映して自像を彫刻せしによつての名であることは碑文に示すとほりである。其像は即ち高山寺の本尊として祀られて居るのがそれであるといふ。斯様な古跡であるに青淵が砂礫と化し石碑は路傍に底脚が埋まつて實に見る影もないのは惜しい事である。

稻成神社（稻成）

今稻成村にある稻荷神社はもと田邊の紺屋町の在る所に鎮座してゐたさうである。

文祿元年朝鮮征伐の時杉若越後守の息主殿が船十艘人數六百五十人を率いて出陣しようとして此の社に参詣し家來の黒阪といふ者に命じて社の扉を開かした。社人が「昔からあの扉を開いた事がありませんから止めて下さい」と願つたが黒阪は聞かず、無理に扉を開かせた。すると黒阪は忽ち盲目になつてしまつたと言ふ。

又慶長十年領主淺野左衛門佐が社人の諫めるのも聞かないで社の木を伐つて船を造らした。その年八月船を沖に出すと破れてしまつた。それでさすがの左衛門佐も松千本を植ゑて罪を謝したさうである。

それから弘仁年中に弘法大師が熊野参詣をした時こゝで稻を擔た翁にあつて法義を語り合つたがこの翁が稻荷様であつたと傳へられてゐる。

蛇に影を呑まれた清助 (稻成)

稻成村の下村の在所より離れて北へ進むと、めぐらん谷池と言ふ大きな池があります。其の池より奥に上つて山を越え北に進むと西の谷村と稻成村との界に大龜岩と言ふ大きな岩があります。その岩には大きな無数の洞があります。

此處には古來大蛇が住んで居ると言ひ傳へられてゐました。今を去ること約五十年昔のことでした。稻成村の下村の百姓山本清助といふ大膽な人がありました。

その人が或日草刈りに大龜岩の下に行きました。そこで草も十分刈れたのでさて歸らうとしてひよいと上を見たところが下から二つ目の洞から大蛇が首を出して火のやうな赤い舌をぺろ／＼弄そんでゐるのでした。さすがの大膽な清助ぢいさんキャツと叫ぶが早いか刈つた草籠を捨てたまゝ吾家に歸へつたが其日からといふものは氣分が悪くなつて寢床について一月ほど養生したがその甲斐もなく死にました。此の方面の人々は蛇に影を呑まれたので死んだのであるといひ傳へてゐる。今だに人々はそこへ行きません。

津浪の村 (新庄)

僕の故郷新庄村の大瀉神社は今小山の丘のこんもりと茂つた森の中にある。僕等七、八歳の時にはよくこの境内で角力をとつたりして遊んだものである。此の神社は今より八十年程前は今の村役場のある所であつた。

所が天保の大地震の時である。此の神社に奉仕してゐる神主が或夜ふとした夢に神様が現はれて

「此の一、二ヶ月程後にはきつと大地震が我が地方に起り新庄村は大津浪に襲はれて村民は大難儀する。早く村民に此の事をしらせ、我が神体をも高い小山に遷せ。」と殿に仰せられた。

初めは神主も半信半疑であつたが三夜續けて同じ夢を見た。神主もよく／＼不思議に思つて「ひよつとしたら事實の事であるまいか、しかし今村民に知らせると大層大騒ぎをすることであらう。」と考へて或夜こつそりと御神体を今の小山に遷された。

一月は早や過ぎた。しかし未だにその地震が起らない。所が二ヶ月程たつた或夜大音響と共に大地震が突發した。同時に我が村は大津浪となり村民の悲鳴の聲三日四夜つゞき全村の家といはず倉といはず流れて荒野となつた。神主はつく／＼此の神様の有難きことをさとり早速地震後その小山に神社を造營した。今も村民は非常に此の神を崇めてゐる。

松上の大黒天 (新庄)

安正元年十月強い地震があり、その時同時に海嘯があつた。それが前後三回に及んだ。新庄字新田原及名切等の民家は一二回目に殆んど引渡はれ健固なる家屋も三回目には全部掻き流はれた。

只一つ残つたは榎本幸助氏の庭前に今尙ほ亭々として矗立する老松あるのみであつた。

この老松は現今周圍一丈五尺あり高さ三丈程の所から二枝に分れてゐる。この枝のマタの所へ當時大黒さまの像がかゝつてゐた。榎本家には村の祭禮には今でもこの大黒天を屋外に出し安土産神社と共に祭典を行ふてゐる。

神島と太岩島 (新庄)

その昔一巨人が南部の鹿島と田邊灣内の神島とをば太い繩にかけて、天秤棒で荷なつて來ようとして天神崎のあたりまで來た時おこが折れてそのまゝ現在の所にこの二つの島が在るのだと云ふことだ。

こゝに又大岩島についてはその昔一巨人が爪の間がくすぐつたいから、よく見ると四つの石がこまつてゐた。巨人はその中の一つを取つて投げたのが現在の太岩島だと云ふ。

押分岩 (下芳養)

鬱蒼として晝尙暗い石の階段を踏んでゆくと一大巨巖が折裂けて或は幅の廣さ一間にあまり或は

狭まつて三尺、社前に通ずる自然道をつくつてゐる。其奥まつた處に所謂秋葉神をお祀りしてゐるのである。

元文中のこと、此處秋葉山の麓、不動堂に庵を結ぶ天室厭離といふ僧があつた。彼の僧信州秋葉山に至り當時の神官池永丹後に従ひ秋葉の神を勸請して海路芳養浦に無事着いたのであつた。

が不祥に因り神威を汚さんことを虞れ谷川を溯つてこの田川の秋葉山に達した。さうして鎮め祭るべき社地がまだ成らないので一夜傍の藪中に安置し奉つた。

その夜里人ども秋葉山の方に當つて一大音響を聞いたので翌朝山にいつて見ると不思議や一大巨巖中央より兩斷して神前に通ずる路自ら開けてゐるのであつた。

これを見た里人は皆神の押分けたまふところであるといつて押分岩と名くづるに至つた。

富田川附近

桐の木上人（岩田）

暮れ易い秋の日も椽側に薄暗く迫つて来た。

上人はやがて筆を擱いた。寫しかけた磬若經が床の傍に最早三百卷に達して堆かく積まれたのを見て自分の畢生の事業が半ばに届いた事を思ふと愉快な心持が胸にこみ上げて獨り微笑まるゝのであつた。

それにしても自分が二十年前行雲流水の旅の果てにかうした草深い片田舎の庵寺に脚をとめてから、すっかり落ちついた気分になつて村人の誰れ彼れとも今は離れられぬ關係にあつた上人にはもはや此村を捨てゝ何所へ行くあてもなく、又此村を捨てる氣にはどうしてもなれなかつた。否一生この庵を自分の修業三昧の道場として愛戀措く能はないものとなつてしまつた。

さつきから裏の山畑で鋏をうつてゐた權助爺の唄の聲も止まつたと思ふと爺の姿は上人の前へ現はれた。

「お上人さま毎日よくおせいが出ますね」

「いゝや秋の日は短いのもう冬至も近いからのう」

「お上人さまの様に毎日机にもたれて字を寫してばかりゐてよくまあ厭いてこないものだね」

「いやこれもお前が畑を作るのと同じことだ、わしの修業だからのう」

「お上人さまこの桐の木もお上人さまが植えなすつてから、まだやつと五年位にしかならぬと思ひますが大きくなりましたね」

「いゝや、わしはお經を寫すのが、いやになると桐の木を見る、桐の木はわしが好きな木の一つだよ、大きくなるのも毎日見てゐるとわからないがね」

「今から十年もすりやこの木もうんと大きくなるでせうね」

「わしはそれが楽しみなのぢや、わしの今寫してゐるお經が六百卷に達するには今からまだ十年かゝるよ、それまでにこの木が大きくなつて大磐若經六百卷を納れる桐の箱になるかなあ」

「そりやなりますよ、お上人さまは十年、廿年先きのことまで考へてこの桐の木を植ゑられたのですか、えらいもんだなあ、お上人さんは」

爺はかくいひつゝそこへ今畑で引いた肌の眞白いよく肥えた大根を五六本おいて販つていつた。

上人は机を去らうともしなかつた。さつきからの彼との問答を追懐しながら桐の木を今一度見上げた。そして儂は大磐若經六百卷を寫し終へる迄はどんなにしても生きなければならぬ、思へば此の寫經を始めたのは十年前、わしも若かつた二十年計畫で取りかゝつた畢生の佛への念願、これが



慧心堂上人

完成さへすればいつ死んでもよい、それまでは大切な命だ。

かくて上人の勇猛精進は遂に大磬若經六百卷の寫字を見事に成し遂げた、そしてあの桐の木が立派な白木の箱となつて其表に大磬若經六百卷慧空上人寫之といとも鮮やかに墨痕淋漓と書かれた上人の筆跡は又なく立派だつた。

上人は正徳三年癸巳十月十四日を以て歿したが享年七十一才であつたといふ、歿後上人の書いた大磬若經は毎年青田の御祈禱とて六月丑の日に之を引き出し富田川五ヶ村岩田、市ノ瀬、朝來、生馬、鮎川、岡の寺々の住職が集つて一大供養と御祈禱を行ふ事にした。

それが輪番に持ち廻つて讀經して居つたところ、中道にして大磬若經の新版が出来たので、それを用ふることにして遂に上人の寫したものは岡の普大寺にとどまつたまま今日に及んでゐる。

尙上人の墓は岩田村字立慧空庵にあり、同庵の慧空の硯の井といふは上人の大磬若經六百卷を寫すに日用ひた水であるが近村の人々稻田に害虫の發生の多い時はこの水を載いて田にやる、又子供の出齒其他安産治療を祈願するため此水をいたゞくといふ。

(桐の木上人とは筆者が特に名づけたもので慧空上人その人である)



人柱(彦五郎の淵) (岩田)

大鰻で知られてゐる富田川にからまる傳説である。岩田と生馬と朝來との境をかぎるところ、其處には年が年中碧水をたゞへた深い淵がある。澄み切つた清い水、水底には鮎の群が白い鱗をかへしてゐる、土俗はこれを彦五郎淵と呼ぶ。

側には柳の繁つた堤防がある、これを彦五郎堤防といふ。今は昔この村に彦五郎と呼ぶ百姓が住んでゐた。彼は眞目面な正直な農夫であつた。毎日腰辨當に星を頂いて家を出で、薄暗くなる迄せつせと田を耕した。

かうして村の人々は皆純朴で勤勉で何不足のないほんとに平和なその日を送るのであつた。

しかしそれはいつ迄も續かうとはしなかつた。或年、連日大雨が續いて、其處此處に山崩れがおこつた。未だ雨は止まない、村民は總出で堤防に集つた。そして洪水を防いだ。然し大自然の暴威に對しては如何ともする術は無かつた。

其夜遂に堤防は切れた。洪水は破竹の勢で浸入した。外は、ぬば玉のやみである……

犬は吠える：雨は車軸の如くである。人々は恐れ戦き寒さに震ひつゝ、高所に避難せねばならな

かつた。

汗と油で作り上げた田も畑も一夜の中にあとかたもなく甜めまはされた。百姓たちは色々評議した。或者は嚴丈な堤を設けてこれに柳を植えてはどうかと云つた。或ものはしつかり石を切り出して礎をかためようと云つた。かやうな評議の後屢々造りかへて見たがやつぱり大自然の力にはどうすることも出来なかつた。田畑は年々荒れる一方であつた。彼等の不幸は極に達した。迷信があちらにもこちらにも起つた。或ものは氏神さまの祟りだといつた。或ものは氏神様の御怒り故日ならずして園村を擧げて全滅せしめられるのだといつて泣き叫んだ。

人々の顔は日一日と暗くなつて行つた。終に迷信は彼等を支配した。衆議はおみくぢをたばることにて一決した。翌日氏神さまの前におごそかな式が擧げられた。神主は一心に念じた。見る見る中に明らかかな啓示が強く／＼示された。それは「堤に人柱を立てよ、然らば村は安泰なるべし」との御宣託であつた。人々は萬事が解決したやうに思つた。しかし百姓たちは村のために命をすてるにはあまりに小膽であつた。「わしはその任を負はう」と申し出る勇士は一人もなかつた。

終にその晩評議會が名主の家に行はれた。人々は何だか死に／＼行くやうな氣がしてならなかつた。うつかり言ひすべらせば自分の命は土手下の一塊の土と消えはてねばならないと云ふ考へは皆の胸に深く根を下してゐた。だから一座は白けわたつた。それは暗い顔の會合であつた。

所へ一人の智者が表はれた。名を彦五郎といった。かれは靜に立ち上ると徐に青白い唇を動かして言つた。「吾等の中で着物を縦縞についだ人をこの任に當てしめやうではないか」と。あゝこの言ははやまつた。駟も舌に及ばなかつた。何といふ運命の惡戯だらう實にかれは自分の着物が縦縞につがれてゐることに氣がつかなかつた。衆人の視線は云ひ合せたやうに彼の着物に注がれた。見られて彼は自分の着物を点檢した。「アツ」と云つた彼の唇は蒼青になつた。坐の中程に燃えてゐた行燈とうつりあつて見るも物凄かつた。

翌日悲痛な式が堤防に行はれた。神主はノリトを上げた。つゞいて彼の乗つた白木の箱は七五三繩をかけられて徐行した。中からはたへ難い咽び聲がきこえた。終に彼は堤の穴におとしこまれた。續經の聲におくられてだん／＼穴は埋められていつた。村人の咽び泣きの聲があたりに洩れた。嗚呼彦五郎はかうして村の犠牲となつてしまつたのだ……すゞろ寒い夕邊人々は泣きながら三々五々別れて行つた。

その後この村には平和が續いた。その年も暮れて翌る年の五月が來た。降りつゞく大雨にも堤防はびくともしなかつた。五穀は豊かにみのつた。彦五郎を埋めた跡には大きな石碑が建てられた。

誰云ふとなくこの堤防を彦五郎堤防といふ様になつた今でも大水の出た時でもびくともしない。

雉も鳴かずば打たれもすまい

父は流れの人柱

といふ田植歌はかうした話を物語ると同時に永劫に彼れの靈魂を慰さめることだらう。今でも富田方面の人は着物を縦縞につがないやうにしてゐる。

(一説に彦五郎は彦之丞と五郎兵衛といふ二人の名であるといふ)

お札が降る (岩田)

毎年紺屋の形紙を賣りに來る伊勢の男が今年は半年後れて來た。その話に伊勢方面ではいろ／＼のお札が空から毎日の様に降るのです。それでこれは何かの端兆であらうと非常な評判ですとこのことであつた。

それから間もなくの事であつた川下のお徳さんが家の前の小川で鍋を洗つてゐる時でした。不意にチリリンと鍋の中へ空から落ちて來ては入つたものがありました。よく見るとそれは一寸六分の銅の大黒さんでした。不思議な事よと村の人々の話題はそこでもこゝでもエライ噂となりました。

翌る日の事です村の舊家虎屋へはお伊勢さまのお札が降りました。村人はそれツといふので二十人許りうこんの鉢巻でエチャナイカ／＼と踊りこんで行きました。虎屋では酒肴を出して祝ひまし

た。すると村の誰々さんの家へは救間谷観音様のお札が降つた、誰々さんの家へは我様が降つたと其度にエチャナイカ／＼と村人は踊り込んで行つたものです、それが皆土足のまゝですから有難迷惑でも皆んな酒肴を出したものです。

すると或舊家へは位牌が降つたのです。さすが村人もそこへはエチャナイカとは踊り込まなかつた。眞に不思議な事もあつたものですと今年七十七になる老人は當時の追懐を感慨深く物語りました。これは明治維新前後の話です。

万さんと天狗 (岩田)

万さんは三月の節句餅を重箱にして市の瀬村の親類へ出かけました。丁度汗川に入る谷口までいつた時でした。ボカ／＼暖かい春の日影に雲雀の歌を聞きながら万さんは樹蔭で一ぶくしてゐました。すると、そこへ一人の坊さんが通りかゝつたのです。

坊さんは万さんを見ていひました。万さんお前は氣のいゝ人だ、儂がお前に都見物をさして上げよう。さあ眼をつぶつて儂のいふ通りにしなさいと云ふや、坊さんは忽ち鼻の長い天狗に變化しました。

万さんは一時は驚きましたが坊さんのいふがまゝ天狗の鼻にうち跨がつたのです。それからの万さんはツエツペリン飛行船にでも乗つたやうな氣持で大空を翔けつたことでした。

万さんのお家では万さんが内を出かけたまゝ歸つて來ませんので大變心配して市の瀬の親類へ問合せが來ないといふ。村中は大騒ぎになりました。が万さんの消息は依然として分りませぬ。

それから一週間も経つた或晩の事です。万さんのすぐ隣の嘉兵衛さんが子供の高吉さんと二人で風呂に入つてゐました。すると不意にヒューと大地を捲き上げるやうな音をたて、強い風が吹いて來たと見るまに薪納屋に異常な音響と共に何かぶつ倒れたのでした。

嘉兵衛さんも高吉さんも風呂から丸裸のまゝ飛び出しました。

薪納屋にかけつけていつて見るとそこに一週間前から尋ねてゐる万さんが正体もなくぶつ倒れてゐるのです。驚いた嘉兵衛さんは早速万さんの家へ大聲で知らせました。万さんの家の人々もあはてふためいて飛んで來ました。

まさしく万さんにちがひありません。やがて萬さんを家の中へ運びました。背中には草履をキチンと重ねて角帯の間に挿んでゐます。袂からは神の葉が一ぱい出て來ました。そして酒臭くて酒臭くてまるでどろ酔です。寄つて來た人々は只目を見張つて不思議な事だと呆然としてゐました。

かくして万さんは三日程は物もいはず物も食はず、たゞ睡眠を食ふばかりでした。やがて正氣に

歸つた万さんは人々の問はるゝまゝに答へるのでした。

實は天狗に連れて行かれた。東牟婁郡古座の町では忠臣藏の芝居を見せて貰つた。その中には岩田の芝の仙助さんが丁度見物してゐたよといふ。このこと仙助さんに聞いて見ると誠に何月幾日古座で忠臣藏の芝居を見たことだと符合してゐたのは何と不思議な事もあるものだ。と村人は二度びつくりしました。

それから万さんは大阪、京都の芝居を見た事など事細かに語るのでした。

天狗さんが空を翔るのは早いかねと聞くと万さんのいふに「ウン鐵砲の弾丸がやつと後へ隨いて來る位の早さぢや」と語つた。

それから万さんは不意に時々姿を村から隠しましたが人々は又万さんは天狗に連れて行かれたのだといつて天狗万さんと仇名されるやうになりました。

その後万さんが見えなくなつてから或日の夕ぐれ、野良から歸る村人が川で鍬を洗つてゐると不意に金比羅山の茂みから岡川へ水を呑みに來た万さんの姿を見た。それ万さんがと大聲で呼ぶと万さんはすばらしい早さで再び姿を金比羅山の繁みの中へ隠したさうです。

金比羅山にはいつも社殿に天狗の面と自馬の塑像を祀つてゐるが、万さんの姿が村から見えなくなると白馬がなくなつてゐたといふ事です。万さんはお人善しといふよりも少し足りない位の男であつたさうです。

あつたさうです。

此物語を語つてくれたのは万さんの隣の高吉さん今は七十七才の老人です。

女 郎 淵 (岩田)

富田川を溯る三里、岩田村田熊舟越といふ所に達します。此處は昔、水害の時に舟がそこを越して渡つたから此名があるといふことだ。そこから少し行くと、小さな谷川に着く、そこにこんもりと茂つた森がある。小さな堂宇が安置してゐる。

此の谷川に接して、堂宇の下は淵になつてゐます。それが女郎淵です。淵は瀧壺で、そこに一間程の瀑布を懸けた巖があります。

土地の人々は、此の瀑は雨乞の神であるといつて、盛んに雨乞に参ります。参拜して雨降か、晴天續きかといふ事を見て歸る所に面白い傳説があります。即ち此の淵に、鰻と蟹があつて、その鰻が悉く首に環が入つてゐるといふ特種なものです。此の鰻が瀑を登ると雨で、蟹が上ると晴天續きと、わかるといつてゐます。なるほど一度参つて此等の事が眞かと見ますと、雨になるのか、ほんとに鰻の上るのを見ました。又此神の、御神体は龍だといふ事です。

昔、郷の神主さんの草分何某といふ者が蛇体を藁で、造つて参ると、不可思儀な事に此の字だけ雨が降つたとの事です。その草分さんといふ宅が今もあります。又昔、市の瀬村の或者が、兄弟喧嘩をして、此爆に参り申すに「御神体を見せて下さい」と、さうすると、たちまち大蛇が現はれ、鎌首を立てたさうです、男は内に歸り鞋を解きながら死んだとの話です。

昔は村々の人が、此處に参り盛んに雨乞をしたとか、「庄屋政所某」他、二三の庄屋さんの名が石に刻みつけられてゐます。今は、参るのは此田熊の字だけです。この瀑の蛇は雌で、雄は市之瀬村の畑山といふ所に祠つてゐます、そこは、今は淵も何もありません。昔は、碧潭をなし女郎淵から箸を流すと不思議にも河上の畑山の淵に達したとのことです。

鶴と獵師の娘（朝來）

昔と云つても未だ安藤侯がこの地方の領主であられた時分に、それ以前までは鶴が非常に多く田畠を荒すことも僅少ではなかつた。それで田邊朝來等の人々は作物の害を防ぐ爲、一方利益の爲に

多く之を射殺したものであつた。それで、あれ程多かつた鶴も年々に減じて來た。英邁なる安藤侯は早くもこの事に氣をとめられ、鶴の種の絶えん事を憂へられた。それで「以後は鶴射るべからず必ず追ふべし、従はざるものは罰すべし」といふ法度をお出しになつた。そして役人を設けてその追番とした位であつた。それでも役人の目をぬすんでは鶴をうつ者が非常に多かつた。處が朝來に或る獵師（名は不明）があつた。毎日狩に行くのであるが、鶴がうたれなくなつてからは獵は少くなつた。それで悪心を起し夜に入つては役人の目をぬすんで法度の鶴をうつて居た。

この獵師には一人の娘があつた。父の残酷にひきかへ彼女は非常に従順で、而も遵法の志が厚かつた。日頃彼女は何度となく父の鶴を撃つことを止める様に諫めた。けれども、頑固で殘忍な父はその一人娘の諫言に耳をもかさなかつた。彼女は終に意を決した。眞夜中頃「おひづる」に身を包んだ彼女は人知れず裏口から消えた。

一時間程して一箇の黑影は獵師の家の裏口に現れた。彼はあたりを見まわした。——物におびえた様に。微かな月光は彼の顔を照してすごみをおびて居た。彼の手には短銃が握られて居た。突然彼は立止つて月明りに向ふを凝視した。白いものが沼の中に立つて居る。正しく鶴だ。彼はねらひを定めた。一發の銃聲はあたりを氣味の悪い程にこだました。と同時に白いものはその儘そこに斃れた。勿論彼は駆け寄つた。

彼は何を見ただらうか。彼は殆んど失神せむばかりに驚いた。鶴と見たのは白い「おひづる」を着た一少女であつた。而も彼自身の娘だつた。彼は今は冷たくなつた娘をひしとだきしめた。彼は男なきに泣いた。彼は始めて目が醒めたのだつた。夢遊病患者が或る刺激にあつて本心に立ち歸つた様に。

千束の由來 (朝來)

私達の村に千束といふ四方山に團まれた部落があります。神武天皇が紀州方面より大和の賊を平げられんとして朝來方面をお通りになりました。すると峠(朝來村字峠)の庄屋が稻の束を千束献上致しました。其の時に献上した場所が榎のもとであつたので天皇はそれを姓とせよと仰せられて榎本と云ふ姓を賜はつた。今も峠方面に多く榎本といふ姓の家があります。そして稻千束を献上したので千の束を刈取つた村(字)それを千束と名附けたといひます。

杖大師井 (朝來)

田邊から熊野街道に沿ふて東へ行くこと二里許で峠にかゝる、此の峠をやつと越えると道に沿ふた一軒の百姓家の前に三尺四方許の井がある。これが杖大師井です。

昔、弘法大師が當地へ巡錫されました。それは眞夏の大地も焦げつくやうな暑さでした。大師は生馬谷川で、一人の老人が遠い所から水を汲んで来るのに通り合したのですが、大師はあまりの暑さにのどが渴いてゐたので水の喜捨をねがつた。老人は見むきもしないで飲まさうとはしなかつた。

大師は其の谷川の水を河原の下を流される様にしてしまつた。やがて朝來に來た。峠の麓まで來ると高い山から汗水流して、老人が水を汲んでやつて來るのを見た。大師はそれを待ち受けて、又水の喜捨を願つた。其の老人は氣持能くうなづいて水を下さつた。そこで大師は此の邊の井戸は全部金氣があるだらう。それで美しいよい水の出る所を教へると言つて、其の老人の宅の前に行き杖で井戸の場所を示された。すると清い水が潺々とふき出るではありませんか、今杖大師と言ふ井戸がそれです。其の老人は谷地萬吉氏の祖先であると言ふ事です。

糠

塚 (朝來)

糠塚は朝來村大字時にあります。むかし此の所に豪華な構への家を建て、住居する一人の長者が居ました。長者の家には家族をはじめ下男下女等合せて多人數すんで居ました。

毎日々々米を三斗程も搗いたさうです。其の糠を家の前の田の中にすてたさうです。それが積み積んで小さい森が出来たのが糠塚です。

森の土はみんなぬか色です。先年神社合祀以來までは此處に土産神社がありました。今は碑ばかりのこつてゐます。長者の家はすつかり廢滅してあとかたもありません。

乳岩の傳説 (栗栖川)

田邊から六里岩田川に沿ふて瀧尻神社に神主櫛田さんを訪ふ。こゝは九十九王子の一つ後鳥羽院熊野御幸の時瀧尻宿所にて御歌の會のあつたところだ。

そめし秋をくれぬとたれかいわ田川また浪こゆる山姫の袖

瀧川のひゞきはいそぐ旅の庵をしづかにすぐる冬の月影

といふ御會の御歌がのこされてゐる、やがて櫛田神官は藤原秀衝が奉納の小太刀と矢根と鈴とを見せられた。往昔秀衝の妻を携へ熊野本宮に參詣の砌、其の妻臨月にて此の地に至り産の氣あり人家なきを以て社邊の岩窟にて和泉三郎を生む、其時三郎を岩窟に含きしまゝ本宮へ參詣した。

途中野中にて手折り櫻の枝を地にさし參詣の歸途まで此花咲き居るならば三郎は無事なりと立願せしにやがて本宮の歸るさ之を見れば果して櫻花そのまゝであつた。急ぎ岩窟に至ればあら不思議や三郎は狼に抱かれてゐて、岩より白く滴る乳を飲んでゐる。そしてまる／＼と肥えて居るのを見た。依つて七堂伽藍を造營し其修繕維持費として黄金を壺にして近邊に埋めたその文句には。

朝日さし夕日かゞやく神のもとに

と、これは黄金の壺の所在である。なるほど山嶺に夜なく／＼光るものがある。そこは朝日さし夕日かゞやく神のもとであつた。或時村の若者がそれを掘つて見ると壺の中から梵字の卷物と黄金のやうな塊がいくつも出たといふ。

櫛田さんは壺を出してこれだといふ。大きな茶壺のやうな形であつて淡いチャンが流してある。それから櫛田さんの案内ですぐ神社の上の乳岩を探る。中々嶮岨で山上に岩窟がある。布で作つた乳の形が岩窟の入口に幾つも吊されてゐるのは乳の出ぬ婦人が詣るのだと云ふ。試みに岩窟中を匍

匍つて見ると向ふに明りが見えて、小さい出口だが子を負つた婦人でも、私どもでも頭がすれ／＼に通れるといふ。

樺田神司はいろ／＼この地の傳説について話されるので中々興味が盡きない。清姫の生地はこの地真砂であるが庄司といふ姓は此地方が五番の庄とかいはれた其庄屋であつたからだ。今でも栗栖川は三番の庄といふ。それで清姫の本名は真砂キヨといふさうだ。先年日高道成寺に於て清姫千五百年祭が行はれたのに本家本元の清姫の生地には其家が今でも傳はつてゐるのに何にも招待をよこさぬとて憤慨してゐた。但し系圖は北海道へ此家の人が持つていつたといふ。さて此真砂には今でも非常な美人が時折に出る。それは素的な美人が出る。但し滅多に出ない。又此地の女は髪の毛の端が二つに分れてゐるといふ噂だといふ、こんな話があと／＼と樺田氏の口から物語られた。

往昔、此の熊野往來は三栖村より岡へ越した岡の王子社それから岩田の王子、瀧尻の王子と九十九王子が數へられる、それは皆山阪を越えて丁度宿所や安息所にあてられる場所を適當に選ばれてゐる。昔の人の旅は永い道中に變化あらしめんが爲め必ず山阪を越せば川に出で、川に沿ひては山に入るといつた工合に、それは嶮岨でもいとはず景色のよい所を選んだのは全く情趣に基いた旅であつた。現に乳岩の嶮を見ればよくそれが證明せられる。今の人の自動車や自轉車やプロペラ船や汽車で樂な道を早く旅しようといふのとは大分趣が異ふと思つた。



乳岩の傳説

野中の里秀衡櫻の傳説 (野中)

【一】

栗栖川は瀧尻王子の神官櫛田氏は、奥州秀衡由來といふ煤けた書き物を見せてくれた。それは二十枚そこ／＼で綴つた反古様のものだが、読んで見ると中々面白さうだ。併しところ／＼蝕つてそれがお家流ときてゐるからよみづらい事おびた。しい。櫛田氏はお持ちになつて緩々お読み下さいとのことなので歸つてからゆつくり讀む事にした。

文政十年戌正月寫茲也、和州十津川七色之住人森梅旭寫之也とある、表紙には奥州秀衡由來とある、目次は熊野權現靈驗記。野中の里秀衡指櫻之事。奥州秀衡由來之事。とある、熊野權現靈驗記の方は多く蝕んでゐるため遂によめなかつた、で秀衡櫻の方はやつと讀めたので次に原文のまゝ記すことにした。

奥州秀衡の父は和泉の國の住人にて元來藤原氏の嫡流なりしが保元平治の戰に打負け奥州白川の里になのしをつとめ居られけるが四十にあまれども代をつぐ子もなし。けちみやくたへる事をかなしみ紀州熊野權現へ一七日の參籠して願ひしかば其妻みこもりて扱七ヶ月にいたり父重き病にかゝ

りさいごにゆひおきして申しけるは紀州熊野權現へ願ひし所れいけんあらたかに懐胎せり、我かわりに熊野へ早く參詣あるべし又男子たんじやうせばすいぶん大切に育つべし、一騎當千の武士となり藤原氏をひき興さん。といふを限に絶えたりけり。

かの妻百日をすぎざるうちむつを立出熊野へこそは赴きけれ、永の旅路の道はかどらず、日數をかさねようくと紀州口熊野眞砂庄司が宅にこそ宿して翌日芝村の瀧尻五大王子の庭まで行かゝり候所にいまだ臨月みちさるうち産の氣を催し苦しむ所にふしぎや五大王子のあらはれてなんぢ只今いそぎ此山上二三丁上に胎内くゞりとて大きな岩屋あり其所にすて置き熊野へ早く參詣せよのたもふこゑも山おろしにつれてその身も平産あり。

見れば違はぬ男子なり王子の教への通り彼の岩屋の内にねさせ置き熊野へこそは急ぎけれ。十四五丁過ぎぬれば鳥が峠のお地藏をふしおがみ庭の櫻を一枝折りてたづさへ野中の里にぞ着きたもふ所に向ふより山かつども大ぜいひきつれ來りしが見るより女中その櫻はたしかに鳥が峠の名木にて昔醍醐の雲林院の名花にもおとるまじと佛のおしみ給ふ故折事ならざるその枝なり、かれざるよろにし給へといふ。いやとよ左様の事は存せず是迄の道慰にいたしたり。さりながら枯れざるよろを存せず、おのくおしへたまへかしとありければ彼の山かつ聞きて其枝をこゝにさし置きあれなる若一王子權現へ上げ奉らばいかなるのぞみも心のまゝなるべしといひすて皆々はしり歸りけり。

【二】

かの櫻を指置き王子權現へきせいをこめ本宮さして急ぎけり。日本第一熊野山十二社大權現を拜禮し、程なくみ山を參詣しとぶ如くに下向してさし置きたりし櫻を見れば花いきくとしてほひすでにさかんなり。さては我子も無事ならんと近露村をあとに見て十丈峠をはせ登り高原村を打過て岩屋へこそは着きにけれ。捨置きたりし一子を見れば狐狼ども四方をかこひ、伽するていにて左右へ皆々退きけり。

是こそひとへに權現様の御すくひ、いかで御恩を報ぜんと抱き上ればこはいかに早や二つ子のかたちにて母の下向を悦びのかんばせ母もあきれて前後を忘れ、うれし涙にくれながら何をかのものでやしなひに成りしぞと見上る岩屋の上よりも水落ちて一子の口に入りその水薬食ともなりしかや、さてありがたき恵みかなと天を拜し地を拜し夫より都の方へ下向の道、和泉、大和兩國に十年ばかり暮らされて又むつの國へ歸國なり、もはや故郷の縁さへうすくなり又ある時は寺々にてあなたをなたとくらされて程なく母一たをやめ御前と申もすぎうせ給ふ。

かの一子の御名をば五郎若丸と申せしが常に母のものがたりをつぶさに聞きつたへ又熊野權現様へとおもむき給ふ和泉の國へいたりしが以前のしるべを尋ねんところかしこを廻るうちしのだの森のほとりに子ども大ぜい水あそびしてありけるが狐の子なるをつなぎて水中に打入れ泳がせてなく

さむ有様、五郎若丸立寄りたまひいかにお子達それは狐の子なり、親狐が仇をむくのむ恐ろしや我にくれなば錢をとらせんといふ、子供聞きて合點し鳥目三百文にて買取り彼狐の子を身に添へ色々養生をくわへ山の中へ放しければ狐大きに悦び見返りくしのだの森へのがれ行く。

五郎若丸は親の爲にものゝ命を取るまじと思ひしが命を救ひさては我望みも叶ふべしと行過ぎたまふ向ふより二八餘りの女房道のはたにつくばひて今やくと待居たり。五郎若丸なにともがてんゆかず盗人の女房がたらしかけると心得て見ぬふりして過給ふ、後より申五郎若さまと聲かけられ我が名をさして呼ぶはさては以前の縁もがたと立よりたまへば女は手をつき恐れながら私ことはしの田の森にすむやかんのものなり、數少なき子をけんぞくのやかんども餌はみに連れ出けるを里子供の手にかゝり命あやふき折節、御若君のみ助に預り有りがたしとも忝しとも御禮申上ぐべきやうござなく何卒やかんのだいらへ御入奉願と親やかんの待ち奉り御恩ほうじたきとの御願御聞届こひねがひ奉るとありければ五郎若丸然れば可參案内せよとのたまへば、かさねく有りがたき仕合其内金をつんで出し申すべし必ず御受取成間敷くやかんの内には赤狐白狐といふものあり何れなりとも所望なりと仰せらるべし、何事も御のぞみ心のまゝに候なりと申けり。

【三】

やがて近付き道のはたに小さき穴あり、此内にお入と女がふり袖、五郎若の顔に打きせ入れければ

内は大内にちがひなし、やかんの大王きんごしの鳥帽子に金龍の御衣にて白砂へおり立ち、さて有がためうがもなき仕合せ、孫狐が一命をお救ひあそばされ御禮の仕やうもこれなく然れども御望みの程もぞんぜず候ゆへ、此所へ御迎へさし上げ申候なり先々籠の内へ御入といふに従ひ直り給へば以前の大王三方に金子を積んで目八分にたづさへ出で五郎若丸の御前にさし置きしさて頭をさげ些少のいたりに候へども孫めが御恩の御禮と申上ければ五郎若丸見向きもやらす命の禮とあるからは金銀はうけがたし此内に赤狐白狐といふもの有るべし、何れなりとも所望なりとのたまへばやかん謹んで申す様、今は何をか惜しみ申さん、白狐々々と手をならせば、わつば一人立出たり。汝は五郎若君へさし上げ申なり、我に替りて随分御奉公つくすべし、尤君御三代相つとめかへるべしと申付ければ奉畏と五郎若へ御目見へ致しければ五郎若も望み違はず白狐を請とりさらばといふて出で給へばやかんども残らず道の下にかつゝくばひ暇乞をぞしたりける。

やゝあつて白狐申す様は五郎若君御身の上、望み日本一の御大名と仰がれたきだん此わつばが奉察候なり。只今奥州に於て安部の貞任宗任とて兄弟、兄は其たけ九尺、弟宗任七尺ときこゆ、長けは劣りて候へども力強く古今無双のものどもなり栗坂の城をかため元より彼等はあべの一族たるゆへ清明が秘術を以て一日に打しも其夜の内によみかへし軍勢つきる事なし。

又源氏方には八幡太郎義家公寄せ手の大將にて鎌倉の權五郎景正軍大將なり。せめても落ちずゆ

るめても中々驚くけしきなし、さすがの大將も責めあぐみたまひ猶又五ヶ年の軍ゆへ大内のげきいんなのめならず、これによつて八幡殿御やすみと成りたもふ。かゝりける所へ今我君十萬餘騎の勢をもよろし白旗おし立て御加勢なされ候は、いかなる貞任も三日の内に責め落し源氏の御運一時にひらかせん事此の白狐が方寸に候なりと申上げれば五郎若丸御悦びかぎりなし。

【四】

九萬九千のけんぞく一こゑ鳴けば一日の内に一つ所へはせ集り候なり。只今より段々に軍勢の催し候はんと虚空に向つてこん／＼と鳴きければ不思議や四方の山々谷々より歩武者、馬武者數萬のごとく一日のうち十萬餘騎揃ふたり。いさや是より一刻も早く奥州へ御下向と五郎若丸十萬餘騎の大將なり。夜を日についで走せ付き陣所を構へたり。時に源氏の御大將より御たづねこれありけり誠に我こそはむかし保元平治の戦に奥州に入込候、藤原氏の何某、今の名は藤原の五郎若丸と申ものなり、中國にて聞及候は未だ軍の最中なり。又五ヶ年の軍ゆへ大内の聞えも如何と存じ身不肖ながら御加勢願度かくの通りに候なり。と申上げれば御大將御悦び遊ばされ願の通り只今より御加勢これあるべしとのたまへば有がたしと御請申上今宵の内にせめ入るべしと白狐にかたりたまへば先づ今宵は私一人忍び入り内の様子を見届け申すべしと。

やがて貞任が城に入込み彼の七かいの祈所へ八幡大菩薩とあらはれ出でいかに貞任能く聞け我は

源氏の神なりしが最早源氏の末を見はなし汝方を守護すべし、とのたまへば貞任宗任かしらを地に付けありがたき御神かな恐多しと、うづくまる。其ひまに彼の秘術の一卷、と邯鄲の夢の枕をうばひ取りて陣屋をさして立歸り御大將に差上げてさて時分はよしと前後よりせめ落し申さんと白狐が軍勢の中よりは丈け二丈餘りの悪鬼の如くなる武者四人何れも夜討の事なれば、皆黒革緘の鎧にて前後の大將の左右に控へさせ鎌倉權五郎景正軍大將にてせめ入りけり、案に相違の軍勢ゆへ唯一戦に攻め入り貞任ばかりをいけ取り御大將に相渡す、大の高名之に依りて御歸陣の後奥州五十四郡、出羽十二郡添六十六郡藤原の五郎丸に下され、時に御名のりも改め、淡海公の後胤藤原の秀衡と成り國民を安んじ給ふ。

翌年紀州三番の彼の瀧尻五大王子權現に七堂伽藍は秀衡の建立にて其時建立殘金子千兩、彼社の土中に埋みあるよし、又御棟札に秀衡の建立と有る事相違なし、神主は芝村にて立花の秀行と申す仁にて有之奥州秀衡の軍談記に有之事相違無之ものなり。

熊野路を花の盛に歩せばみりの船に浪風もなし。

x x x

附記、末段に黄金千兩を埋むといふは、今瀧尻神官樺田氏宅に保存せらるゝ古き大壺なり、それは何でも今から二十年程前十丈峠のあたり所謂朝日さし夕日輝く神のもとで掘り出したものだ。

宗高の茶碗 (長野)

栗栖川の行程を汐見峠へとりました、三栖から長瀬の谷々は今梅の眞盛り、萬歳の三人づれが見える、鼓や胡弓の音が長閑な曇り日の田舎の春を一層ものうくする。

山里は萬歳おそし梅の花

の芭蕉の句も思ひ出される、こゝは早や汐見の山麓、山畑を開くお百姓と田の畔に腰を下して語る安珍清姫の傳説を聞くうちにこの長瀬には昔、那須與一、八幡の御靈を背負ひ來り今の小學校の臺地的地を造り弓術の稽古をなせりといふ。今も其臺地を弓場(ゆば)といふと又與一宗高の茶碗は峰銀藏氏宅に祀り、弓矢は村社八幡に祀ると

同行有本氏と銀藏氏の宅へ宗高の茶碗拜見にゆく同氏の宅の神棚に祀る茶碗は薄樺色に薄き黒の斑点あり古色を帯ぶ里人熱病の時には之を戴けば立ち癒ゆといふ。

那須といふ姓の此地方に多きはこの宗高の子孫か或は姓をこれにあやかりしならんといふ。

それより此地光福寺に不破數右衛門の娘の墓ありとき々寺を訪ねる、境内に苔蒸したる墓表に「三敬院忠節百心比丘尼」裏には淺野内匠守藩中義士娘俗名キシノ、實歴十二年十二月十二日とあるそ

れは原惣右衛門の娘であつた。和尚が生憎留守な爲詳しい由來を聞き得なかつたのは残念でした。

それより汐見峠を爪先き上りに登る、田邊町が遠望される。海は一面に煙つて夢のやうに白帆が浮いてゐる。

清姫のねじ木の杉から左に下れば傳説の清姫村へおりられる、そこには今でも庄司の姓を名のる清姫の縁故の家があるが皆子孫が美人だといふ。

清姫のねじ木 (栗栖川)

草枕の山路、浪枕の船路、旅にしあれば椎の葉に盛る飯を食ひては熊野三千六百峰を踏み越え徒ち涉りして本宮、新宮、那智と三山參詣の往來絶間なかつた熊野街道、それは今の田邊から三栖に入り潮見峠を越すのであつた。

今は自動車が開けてこの舊道を通るものもないが、山の端を縫ふやうにして路はしばらく羊腸として潮見峠の頂に達するころ路傍に鬱蒼として天空にそよ立ち幾抱へかかれぬ老杉があるのを見るだらう。これこそ清姫のねじ木である。

み熊野の山邊に白百合の精と咲く清姫、安珍を思慕する乙女心はだん／＼面恥かしい戀心となり

遂には裏切られた彼女の戀情は瞋怒の焰となつて燃えた。

庄司の娘清姫は狂亂の如く安珍の後を追ふてゆく。

「安珍さま——安珍さま——」

血を吐く思ひの杜鵑その聲山々に木霊して餘韻は遠く山を縫ひ溪に吸はれて消えてゆく。

可成り長い坂路を喘ぎ／＼登りつめた清姫は、こゝ潮見峠の頂にしばし佇んで山麓から遙かに烟る田邊灣をキツと凝視した。彼女の恐ろしい眼には探し覚める戀しき人の姿は見えなかつた。と彼女は自分のすぐ傍に一本の高い杉の木を見た、すばやく彼女はそれによち登るのであつた。

小手をかざして遙か山麓を見下せば街道をまつしぐらに急ぐ旅僧一人、

「あれ安珍さまが——」

振袖姿の兩袖を引き裂く清姫、悲亂の焰もの凄く握りしめた杉の枝をはつしとばかりねじれば恐ろしくも杉の木はそのまゝのめつて地に這ふやうな曲りやう。

飛び降りさま清姫は又もやひた走りに走りゆく。

「安珍さま——安珍さま」

今も里人の謡ふには

あのみ安珍さん、清姫嫌ろて夜逃げなされた日高川、蛇になつてもこの川を渡らにやるまいぞ

んぶく

清姫の生まれた庄司屋敷 (栗栖川)

栗栖川村大字眞砂といへば富田川を溯る約六里、清姫の生地庄司屋敷の存する所なり。

醍醐天皇延喜延長の頃當地に在住せる武家眞砂莊司藤原清次の許に一人の娘あり肩に喜代との文字あらはれたれば之を清姫と稱ふ。傳ふる所に依れば清次が住居せる屋敷の跡なりと言ふ處こそ今庄司屋敷と稱する所なり其後裔なりと言はるゝ庄司金四郎氏の家に其祖先の位碑あり左に之を擧ぐ

△眞常道悟信士延寶元开四月十四日死去四十二歳俗名眞砂重左衛門尉藤原清支

△慈雲涼岫信士寛文十三癸丑年正月五日六十八歳俗名眞砂兵部衛門尉藤原友則

同所富田川西岸に沿ふ所に面積約五坪ばかりの淵あり。清姫幼少の時より此の淵にて毎夜垢離を取りたれば此の淵を庄司淵と稱す。其の水面より六尺許り離れたる岸に一本の松ありて清姫毎夜衣服を脱ぎて之に掛置きたれば之は衣掛松と稱へしものなりと言ひ傳ふ。富田川出水の際には此邊一面に濁水漲るといへども平時に於ては只川原の一隅に其の面影を存するのみ。

古より何時の洪水にも此の淵のみは砂礫埋れたること無し。又衣掛松は明治二十二年の大洪水に遂に流失せり

芝の御殿 (栗栖川)

芝の御殿か覗の橋かすぎたものです芝村に

時人の歌へるもの其の壯麗なりしを想ふべし。昔後白川法王通御の際御宿泊ありし由言ひ傳ふれど眞否疑はし。聖護院殿御宿泊ありしは確なるべしと言はる。明治維新の際三栖村に綏民局を置くとして此の建物悉皆壊ちて之を移せりと云ふ。御殿の敷地は今眞砂家の庭園にして梅林なり。

御殿の庭に一本の大いなる(周り二丈程なりしと云ふ)糸櫻ありたるが其の下に一基の碑ありて左の銘あり。(此の碑今歡喜寺にあり)

御殿の糸櫻を詠みて

一番の那智へも近し花の瀧

淵泉文化三年丙寅春

杜多義什

附記、糸櫻は恰も枝垂柳の如く花は櫻花に同じ。御殿の糸櫻のわかれ今田上熊之助氏宅前にあり満開の際頗る美觀なり花の瀧とは着想甚だ妙なりといふべし。

のぞきの橋 (栗栖川)

私は唯だ道を急ぎました。岩田川に沿ふて奥まつた所栗栖川村に辿りつくると水車の前に出たのです。月並なシンンではありますが老爺が煙草を——それも椿の葉で刻み煙草を巻いたのですが——吸つて居りました。

私がこれから書かうとするのはこの老爺から聞いた中の一つなのです。……サア私は年號とかは忘れましたが、マウそんなことに拘泥せずにお話を申し上げます。丁度清盛があの大患に取りつかれてゐた頃の話なのです。

父の熱病と又自分の——重盛公は書物にどうかいてございますか知りませぬが肺の病らしう思つゝゐますが——病氣の平癒と祈願とでこの熊野の奥の本宮に参詣なされた時にそれこの舊道を奥に召されてお通りになりましたのださうです。

この舊道をこれから大分お行きになりますと俗に「のぞきの橋」と申して居ります橋がございます。熊野の雄大なそれでゐて女性的な趣を多少なりとも見せてゐます。平和な山の色、又空はこれはまた南國的な然し何かしら或る冷靜が顔に強く表はしてゐる佳人のものごしのやうに唯だ平和であります。その頃の景色を讚美しながら遊山氣分で参つたものでせう。

都からとても離れたこの熊野。平和に眼をとちてゐました熊野は今美しの京男の一行を又將軍をお迎へしたのです。そしてみやびな行列の奥が今覗の橋のたもとまで参つたのです。

昔でございます。幾人かの人々がかつぐ召物に乗られてお渡りになることができなかったと見えます。その頃の橋は大木を横に大きく縦に切つて岸から岸にかけたものです。で輿を下りた重盛公は山氣迫る清淨さに元氣づきながら徒歩で瀟洒な公卿姿に悠々この橋を渡られたのです。碧山が兩方から迫つて草深い此の山間にみやびの平氏の大将貴公子の行列昔ならばこそその所をよつく想像して下さい。橋の中ほどに、いらつした公はふと清冽な流れに多感のお心がふれたのでせうか。

その静流に瞳をじつと視入つてお出でになりました。

重盛公はその時たしか青か黒の水干を着けて居られたのです。それが橋に立つて居られる自分の姿が白装束で水面にうつゝ居るのを見られたのです。賢明な公は「死の影」の自分についてゐることにお氣付きになりましたとでございます。

無事その後參籠を致され歸京になりましたが間もなくおかくれになつたとの話でございます。

與平あな (北富田)

入道雲はむくり／＼と山の蔭より涌き出てきては静かに動く。皆肩を怒らせてゐる。暑さうな雲

だ、太陽は燦々と光りを投げつけてゐる。本當に暑い。然し木蔭は涼しい。黒い蔭、其所にはいつもそよ／＼と涼しい風が動いてゐる。與平は其の蔭を松の木の下にして、大きな石に腰掛けながら静かに釣りをしてゐる。さら／＼とせ／＼と瀬から大分離れた此所は碧潭深く水が淀んでゐる。殆ど流れない。油でも流した様だ。

與平の手がちよつとでも動くと、その微かな響きは竿をつたひ、糸をつたつて、やがて其れは水面に圓い波紋の輪となつて擴がつて行く。彼の後は直ぐ岩山になつてゐて蟬時雨が一しきりさわがしい。どうしたのか今日に限つて一匹も釣れない。もう一匹位はかゝつてくてもよさうな時分であるのに、與平は少々いら立つてきた。しかしつとめて冷靜に還らうとちつとこらへてゐた。水は何所迄も青い。やがて彼が糸をちつと見つめてゐた時に、美しい／＼と鯉が水面に現はれてきた。二三べんぱく／＼と水を口にしたと思ふと銀色の黄金色の鱗をきらりと見せて底へと沈んで行かうとする。

彼は不意に竿を投出し、直に眞裸になつて、さぶんとばかりに水中へ飛び込んだ。與平は彼の鯉を手捕りにしてやらうと思つたのである。彼は逃げる鯉を追ひかけて深く水底へと沈んで行つた。しかし鯉は何所迄も逃げ廻る。彼は段々と呼吸が苦しくなつてきてぼーつとした。

「おやっ」

話に聞いた龍宮の乙姫様の出現か、それとも三保の松原で消えた天女の再現か、彼が氣づいた時は、彼の面前に恍惚たる美しいお姫様が立つてゐられるではないか。彼は又も氣を失はうとした。自分の周囲は龍宮城に出来てゐる。するとお姫様の眞赤な美しい唇が、靜かに動いた。彼は「此所は人間の來るべき所ではない」と何だか耳に感じた様だつた。「變だぞつ」と思つて首をかしげると「今度來た時には命がない」と感じた様だ、「へつ」彼は又びつくり仰天して仕舞ふと、又々ぼーつと夢の中へでも誘はれる様に感じた。

彼がぼつかりと水面に現はれると漸く正氣づいた。與平は驚き恐れて岸に上り、身体を拭いて着物を着、前の岩の上へ腰を下した。まだ足がわな／＼と震へてゐる。けれども何と考へても不思議で仕方がない。鯉を追かけた。美しいお姫様と出會つた。此所は人間の來る所でなくて今度きたら命がないといつた様だつた。彼は煙草を取り出しすばり／＼煙を吸ふた。紫色の煙がゆるやかに上つて行く。「おかしいなあ」と又首をかしげた時に

「あゝ」大事なく人様より借りてきた煙管が、ゆら／＼と水の中へ落ちて行くではないか。與平は打驚ろいて又ぼーつとした。水の中へはいれば命がない。彼はどうしてよいのやらわからなくなつた。彼はやがていつになく打沈んで歸路についた。

持主に深く詫びて許してもらふ事にしやうとした。が彼の煙管の主は頑として許さうとはしな

つた。彼は困り切つた。程經て與平の姿は再びさきの淵の巖頭に佇んでゐた。その煙管の持主をつれて兎に角今一度あの淵へはいらなければならぬ運命におかれた彼は禪にしつかり繩を結びつけて置いて相手の男にそれを持つてゐてもらつて、若し泡が出たなら引き上げてもらふ約束をした彼は又水の中へはいつた。碧潭の中へ、眞白な足裏が融込んで仕舞つた。瀬の水音がちよろ／＼と靜に響いてくる。水面の一部分は太陽の光りを投げつけられて、鱗の様にきら／＼と輝いてゐる。入道雲は矢張り飛び出して来る。入道の肩が日光に射られてまぶしく光つてゐた。さつきから煙管の主はしつかと繩を持つてゐるが、いつまでたつても泡が出てこない。「變だなあ」彼は遂に繩を引き上げ始めた。

與平は再び水面に其姿を見せた、しかしそれは青白い冷たい屍の與平であつた。村人はそれ以來その淵の穴を「與平あな」と稱へる様になつた。そしてその與平あなは今も富田川の下流、平にあつて村人は昔の與平物語を忘れない。後の山は其の後石切場となり、其の近くには、天然記念物大鰻棲息地の白標が立つてゐる。

おでんの火 (北富田)

昔北富田の保呂に一軒の金持がありました。その内に下女奉公をしてゐた女がありました。名はおでんさんと云ひました。おでんさんが間もなく妊娠しましたのでどう云ふ譯か知りませんが追ひ出したのださうです。それでおでんさんは悲しさのあまり富田川の深い淵にはまつて最期を遂げました。今でも雨のしとしと降る晩等其の亡魂が火の玉となつて表はれ保呂の街道をさ迷ふのがおでんの火です。

椿 温 泉 (東富田)

椿温泉のまだ見つからぬ前のことです。脚を傷した一羽の白鷺がこの湯のある所へ来て毎日のやうに、足をその湯にひたして居たさうです。そして幾日かたつて足も癒えたと見えて何處へか飛んで行きました。それを或人が見てから不思議に思つて發見したのがこの椿温泉だといふことです。

人頭の由來 (東富田)

東富田村に人頭と言はれる處がある。「平家にあらざるものは人にあらず」と驕りたかぶりし一門

も一度秋風の落莫たる運命の如何ともする事能はず戦へば敗れ、敗れては戦ひ、西の方へくと追ひつめられ遂に壇の浦が彼等の斷末魔の場所となりました。中にも一門の公達新中納言知盛甥能登守教經をはじめ勇ある人々はいづれも戦死をなし二位尼は寶劍を持し主上を抱參らせて「我は女なりとも敵の手には掛るまじ」と言ひ水に投じて相果てた。かくして華やかなりし平家も遂には西海の藻屑と消えしは壽永四年である。

あゝされど猶婆婆をむげにふりすて難く未練多き平家の殘黨日本の津々浦々に隱家を求め廻るのであつた。そして紀州は熊野のはてなる東富田の人里離れた所に辿り着きける一門の人々は里人は全く交通を立ち桃花源の生活をなしてゐた。そして日々溪谷を跋涉しては獵をなしそれによつて漸く命をつないでゐる有様であつた。暫時は彼等も落付いたやうであつたが源氏の勢益々盛になるにつけ彼等平氏の一族たち今は世に生きて憂き目見んよりは死して安住の地を求めるに如かずと部落の人々遂に死に絶えて終つたのである。それらの人々を此の土地に埋めた。そこを後の世の人々が呼んで人頭と言ふ今は唯一家あるのみで人里より十八町程離れてゐる。

日頃は薪とりの里人が通るのみであるが二月三月頃になると梅花開き谷間はさながら人間世界にあらざる別天地となる。

蘆雪と牛（東富田）

蘆雪は河原に出て堤の下を流るゝ富田川の水に繪の具皿を洗ふのであつた。赤や青や白の繪の具は友禪模様の波紋を畫がきながらやがて消えて流れていつた。

午後の日さしはなごやかに權現平の赤土山が一直線に光つて見える。蘆雪は此遠望の景色が又となく氣に入つた。彼は寺の一室で繪筆にあいた時はいつもこの堤にきてあの一直線の赤土山を見るのであつた。

彼は此の寺に來てからもう彼は一年になるが寺の庫裡から座敷の襖に白猿やら猛虎やら寒山拾得やらの大作をものした。

和尚は殊に白猿を激賞して村の誰彼に自慢げに之を見せようとした。最後に本堂の大襖だけが残されてから彼はばつたり筆を投げた。彼にはもう畫きあいたのか又京に歸りたくなつたのか、それからはとんと筆を採らうともしない。

和尚は折角今になつて本堂だけ白襖ですて置かれる事を好まなかつた。それでも和尚は催促がましい口はちつともきかずに居るものゝ胸の中ではいつ描く事であらう。もうこのまゝで歸られるの

ではあるまいかと心もとなく思はれてならなかつた。

それから一月二月三月と月日はながれた。蘆雪は相かはらず筆をもつ事をしなかつた。しかしあの川の堤の河原に遠い赤土山を眺むる蘆雪の姿を見ぬ日はなかつた。そして近頃は必ず河原の草原にねそべつて放し飼ひにしてゐる農家の牛を見ては頻りに目を離さなかつた。そして何か考へてゐるやうであつた。そこには可愛いゝ小牛がまるで小鹿のやうに彼の側近く迄よつてきては草を食つた。その度に親牛はもう／＼と蘆雪の方を見てつゞけ様になくのであつた。

彼は親牛の瞳が人間の瞳のやうに思はれてならなかつた。優しいうるんだ瞳孔に牛とは思へない懐かしみがあつた。彼れは一つかみのかにつり草を親牛の口元へもつていつた、牛は驚きもせずおとなしく食つては反芻した、そして河原にうづくまつて蘆雪の方を見ながら又ももう／＼とないた反趨しながら。さうした事があつてからは蘆雪は河原に出る度に此の親子の牛を見る事が一つの楽しみとなつた。

或朝の事だ本堂の佛壇に茶を運んだ小僧がキヤツといつて和尚の室へかけこんだ。和尚は驚いて何事だと叫んだ。小僧は大變です／＼和尚さん本堂に眞つ黒い牛が、牛が上つて居りますといふ、和尚も半は疑ひながらいつてみるとこれは驚いた、本堂の白襖四枚にわたつて、牛が描かれてゐるのであつた。一つはうづくまつて草を食ひながらこちらを見てゐる牛、その瞳がほんとに今にも話

しかけさうだ、草を食つてゐる口はまさに動いてゐる。
今一つは小牛がしつぽを振つて向ふむきに走つて行つてゐる繪である。かくて牛の圖は今も同寺の寶物中の白眉として永遠に傳はるべき藝術品であらう。

湖邊の武士（東富田）

富田より新道路を行けば見草と言ふ所がある。見草より見草奥に行けば湖のやうな大池がある。昔此の池のほとりで一人の武士が刀を磨いで居ると池の面から一匹の小蛇が泳いで来て武士の足を呑まんとした。武士は氣味が悪いが、刀を足の先にあてがつて居ると蛇は足を呑むに従つて次第に體が二つに分れた。武士は最後に刀をはねると同時に深山は大嵐起りもの凄くも暗愴たる暴風雨となつた。と忽ちに小蛇は大蛇と變つた。武士は眞つ蒼になつて後をも見かへらず一散に山を下つて農家に着いたが一言も話すことさへ出来ずたゞがた／＼と慄へて夜具を頭よりかむつて寢入つたがそのまゝ死んだと言ふ事である。

玉彦小祠（西富田）

小さく石垣をめぐらし松のちよつとした茂みの中の小祠。村人は玉彦様と稱し腹痛病の神として信仰して居る。その由來は斯うである。

八幡さまの祭典の日。それは數百年もの前のことである。今年數へ年僅かに六歳の玉彦は稚兒舞の稚兒として稚兒衣装に身を裝ふ美しい稚兒であつた。稚兒衆は音頭取の太鼓の音に姿も優にやさしく神前に舞を捧げるのであつた。

稻穂漸く稔る八月十五日の日。村人等の待ちに待つた産土神の祭典の日である。

玉彦は渡御の先達として渡御の出發所を立つた。福田谷の舞。それは渡御の途中での行事であつた。彼等は神の舞子として選ばれた美少年、その舞ぶりに優り劣りはなかつた。然し日頃より他の稚兒衆の羨望の的であつた玉彦は今日何故か活氣がなかつた。彼はあせり氣味に身を舞はすのであつた。彼の顔は蒼白となつた。その瞬間!! 彼玉彦の魂は早この世に留まらなかつた。

不慮の不祥事に祭典係は狼狽を極めた。大混雜の中に玉彦の體は最寄の家に運ばれた。前代未聞の出來事に村民はたゞあきれはてゝなすすべしらぬ有様何とも手のつけやうもなかつた。或夜名主某は八幡神に夢の御告を受けた。「玉彦は神の子として懇に葬り取らせよ」玉彦は神の子として葬られた。しかし彼の死因は遂に不明であつた。翌年一人の老法院がこの村に來り某家に宿つた。その家の主人夜明より腹痛になやまされてゐた。彼の法院「玉彦様を信仰せよ」と云ひすてゝ禮もせ

すに立去つた。彼の法院の村を出たのを誰一人として見たものはなかつた。玉彦様は腹痛の神だとの噂は四邊に傳はりそれを念じたものは不思議にも全快したといふ。

今はこの小祠に詣ずる人もないが、八幡祭りには獅子頭三頭を捧げるのが例である。

龍になつた籠屋の娘 (西富田)

田邊西之谷の籠屋に娘がありました。池に行きたいといふから両親も不思議に思つてゐたが、或る日つぶり山の二つ池に連れて行くと、この池には針があるといふので新庄の池につれて行くと、この池には剃刀か鎌があるといふので、堅田の池に連れて行くと、こんどは下駄と銀の簪を残して池に飛び込んだ。

再び出て来た時には龍の姿になつてゐた。父は驚きましたが度胸をすえてもう一度元のすがたになつて母に暇乞ひをせよといつたので再び元のすがたになつて母に暇乞ひをしに池の面に顯はれたその時母は娘の龍にむかつて必ず人を食べてくれるなといつて一首の歌を作つた。「うらみごんせん堅田の池に秋の稲穂のつゆほどに」昔はこの銀の簪をほしく思つてとりにいつたものがあつたが簪を持つと動く事が出来なくなつたといふことだ。今もこの簪と下駄は池の傍に祀られてゐる。

天狗谷の奇話 (西富田)

「若い衆、家の子僧知りませんか」或女は髪をふり亂し目を異様に光らせて近所の家々を呼びはり乍ら廻つてゐる。時は丁度今から八九十年前のこと。或る黄昏どきである。彼女が「家の子僧」と云ふのは堅田村の鹽屋(所の名)にある熊坊と云ふ八歳の少年の事で彼の母と一緒に麥蒔に出たのである。夕方彼の母は夕飯の仕度に戻つた、さうして熊坊は近くに麥蒔をしてゐる若い人々がつれて歸つてくれるだらうと彼女は思つたのでそのままそこへ残したのであるが、彼女がさつきから愛兒をさがしてゐる所を見るとどうやら熊坊が行方不明になつたらしい。

「ほんまに熊坊はどこへ行つたのか……熊よ熊ア」いくら呼んでも返事がない、唯夕もやの棚引いた中に細野浦一帯の連山が「どうしたんだ」と云つた風に聳えてゐるのみである。

「熊よ熊ア」彼女は血をはくやうに三呼し四呼したがやはり何の返事もない。時折り向ふの山から何かきこえてきたやうに思つたので、新しい期待を以て聞き耳を立て、見たがそれが向ふの山の木靈にすぎない事を知つた時彼女は失望するばかりであつた。

まだあたりが明るい中はよかつたが、日がとつぶりくれるに従つて彼女の心は糸の如く亂れ愈々

じれて来るのであつた。その日は終にすぎたが熊坊はとう／＼夜が明けても歸つて來なかつた。翌日細野の灣に一隻の藝州の帆前船が錨を投げてゐた。この船は堅田重太右衛門と云ふ侍士の家（判屋と云ふ）の宿船であつたがその船の人がこんな事を云つた。

「俺等が夕べ十二時頃立ヶ谷を通つてゐると向ふの天狗谷で小さい子供が泣かされたり笑はされたりくすぐられたりする聲がきこえて來たので不思議に思つた」と。それを聞いた人が天狗谷へ行つて見ると、果して熊坊は手と足と胴と首とバラ／＼に引き裂かれてゐたと云ふ。

江戸へ上る狐（西富田）

熊野權現山に登る右の谷に小さな池がある。その池のある谷を小屋谷といふ。そこには太古から狐が住む。其狐が夜妙な聲で鳴くときつとその土地の人が翌日死んでゐると言ふ事である。

その狐の一匹がこの地で産する富田砥石を積み込んでお江戸へ上る船にのり込んで江戸の地に渡つた。お江戸の或る狐使ひの話に江戸の狐で紀州富田の小屋谷の事を話すといふ事が、江戸へ上る砥石業者の耳に這入つたと言ふ。

觀福寺三ツ鱗の紋（南富田）

南東富田村境に富田川に臨む眺望よろしき山の麓に禪宗臨濟宗白華山觀福寺といふ大きな寺がある。今の住持は鎌倉建長寺管長の間宮英宗師の高弟であるといふ。この寺の紋所三ツ鱗に奇しき傳説がある。

寺の古い住持が或とき美しき女人が參詣して女婢とならんことを願ふまゝに住持そのまゝ許したところ檀家はあやしみ痛くこれを爪弾きした。此女住持に飯を盛る度に手をもつて之を蓋ふ癖があり住持不思議に思ひ心持よからず遂に女を寺から追ひ出した。すると奇怪や四邊暗憎となり雲さへ起り女は蛇体に變化し天上した。同時にそこに三ツの鱗が残された。それが寺の紋どころとなつたといふ。

鳴かない蛙（南富田）

こゝ富田村觀福寺には二畝位の池があります。何處ともなく田植歌の聞えて來る初夏の頃其の池

には幾萬とも知れぬほど眞黒く群團をなしたおたまじやくしが泳いでゐます。するとおたまじやくしから成長した幾萬もある蛙がまた巧に浮たり沈んだりして鳴いてゐました。こゝに一つの不思議な傳説が生れました。

昔この寺の元祖樹下本院様が弟子を相手に一生懸命勉強をして居られた時、どうも池の蛙が喧ましくしてしようがない。和尚様は机の側から離れて池の周圍を廻られた。やがて和尚様の力の籠つた聲が本堂の弟子達の耳へ響きました。と蛙は不思議にピタリと鳴く音を止めました。「コレ／＼蛙鳴くの止めよ」と云ふ風に説かれたのだらう。それが傳説となつて、それからと云ふものは何十年もの間この池の蛙は一聲だに鳴いた事はありません。否これから寺の續く限り鳴かない蛙であります。何と不思議な話ではありませんか、其の直ぐ下の田にはだらしのない大聲をはり上げて何萬の蛙が鳴いてゐるのに。

龍賀法師 (南富田)

南富田村榮觀福寺に龍賀法師の墓がある、是れは觀福寺のすつと以前の和尚であると聞いてゐる。此の和尚は稀に見る高僧であつた。晩年わしは南富田村大字中の牛が壺の海で定に入るぞとい

つてゐた。すると或時和尚の姿が寺から消えた。村人達は大勢かけつけて、方々探した。と牛が壺の巖の上に立つたまゝ定に入つてゐた。

人々大勢が／＼で和尚を岩からはづさうとしたが、和尚の體は岩から根が生えたやうになか／＼はづれさうになかつた。其の時或一人が和尚は生きてゐても終には又物にかゝつて死ぬのである事を聞いてゐた。これは金をあてがへば、はづれると言つたので金てこをあてがつて、こでると難なくはづれたさうである。

そして懇ろに觀福寺の墓地に葬つた。不思議な事には石塔に字を彫らない。石塔に字を彫りつけると手から血が出て來るとまらないさうである。参拜者は今でも絶えない。

コモリアナ (南富田)

南富田村大字榮村に「大湯」といふ處がある。そこには丁度紀伊山脈の分れた峰續きかと思はれる小さい丘陵があつて、富田川がその麓を流れてゐる。麓と言つても山と接してゐるのでその淵は非常に深い。その水に浸つた所の岩から、湯崎まで大きな穴が通つてゐる。その長さは少く見て一里半、多くて二里位あるさうである。

そして湯崎に近い所の穴を「コモリアナ」といひ、其處にはその名の如く「カウモリ」の巢が澤山ある。是だけでも人が入らないといふ事が明らかである。穴は非常に大きく昔から誰もその中へ入つて行つて無事に戻つて来た者がない。一度或人が約束して探險に行つたが遂に歸つて来ず窒息して死んだのか、又は怪物に殺されたのか、それさへ探し當てに行く者がない。コモリアナの入口は大きな岩石が横はつてゐるさうである。老人の推量する所を聞くと、大昔はこの山脈で鑛物を掘つたらしくその鑛物の脈の跡、即ち掘つた跡が現在の様になつたらしく随つてその穴は一直線ではなく、周りの大きい所も小さい所もある筈で内部は一樣ではない。

ジャヤ香水 (南富田)

昔「キタマヒ通ヒ」といつて諸荷物を運搬する和船があつた。それは多分東京(當時の江戸)から大阪邊へ運んだものらしく、丁度其の船が當地の沖を通航中であつた。大變ジャヤカウ水の香がするので現在の東富田村字袋といふ所へ寄港し、ジャヤカウの香をたどつて山中へ入つて行つた。丁度富田坂の下へ來ると、雨傘をひろげた程の太さの蛇が悠然と横はつて死んでゐたのを見付けた。一行は非常に驚き「ジャヤカウ水」をとる爲に船に積んで家へ持つて歸つたといふ。それからそこには其

の大蛇の子孫であらうか、大きな蛇ヒヤなりのヘビが棲んでゐるさうである。誰かそれを見に行つて餘りの大きさに驚いて發狂したといふ。

天狗につれてゆかれた人 (南富田)

當地では昔からよく天狗に連れて行かれたといふいひ傳へがある。當地某は田邊から帆前船に乗つて航行中、不圖天狗に連れて行かれた。他の船員は非常に心配して一生懸命に探したが分らない遂に某は或山奥へ連れて行かれた。天狗は平生善行した者は御氣に召して、殘虐な事はせずよく款待されるがそれに反して悪行を積んだ者は股をひき割かれるさうだ。

某は天狗の氣に入つたのか、甘い食物を食はして貰ひ色々世話をして貰つたといふ。そして半年程経つて再び元の船の上に何ひとつの傷もなく置いてくれたさうだ。そして天狗は「それまで歡待をしてやつた事、世話してやつた事を決して人に話すな。さうすればお前に出世をさしてやる。さもなくば命はないぞ。」といふたさうである。果して某は今尙現存し、外國で海上生活をしてゐるさうである。天狗が御馳走を呉れるのは主に柴の葉ださうだ。

一 目 狸 (東富田)

富田川口から東富田村大字袋へ越す途中に一目坂といふ所がある。其所には目が一つで怒れば怒る程目の玉が大きくなる狸があつた。人々は非常に恐れてゐたさうだ。丁度目くらが其所を通り合つたところ例の一目狸が大目をむいて「之でもか／＼」と次第に目の玉を大きくする。ところがこちらには目、それが何とも見えない。「それ位は何だ。」と繰返していつた。すると狸は段々目を大きくして遂に目をむき出して死んでしまつた。以後其所を一目坂といふ。

城 山 (生馬)

城山は生馬村にあつて附近村民の傳説を持つて居る地である。山は四方竹箒で取りまかれて田の中に一山はなれてゐる。又木はよく茂り鬱蒼としていかにも由緒ありげな所である。其所には平氏の墓がある。それは昔源平の相争ふた時、源軍の勢力が強大で平軍を壇の浦で敗つたから、平氏の殘黨は浮ぶ瀬が無くなつて、たどりたどつてやう／＼此所まで落ち延びて來たが、平氏の運命最早

つきたことを知つたので、源氏を恨みながら此所で自殺したのであると傳へられてゐる。又竹箒の中へは其の時持つて來た寶物を埋めたと傳へられてゐる。

✓ 劔神社傳説 (鮎川)

畏れ多くも後醍醐天皇の皇子護良親王は、足利氏の難をお避けになつて、遠くこの熊野路に落ち延びて來られた。途中、ありとあらゆる難澁をも冒され今の西牟婁郡鮎川村を通られて熊野街道を東へ／＼と進まれたのである。

今より約八九十年も前に鮎川村の民が或は路傍の畑の中から或は水溜りの中から立派な刀の鏢や刀身の片を發見したのである。それで之を護良親王の御遺物としてあちらこちらに祠を立て、鏢や刀身を各々お祀りしてゐた。

所がその後、之を立派に一つの刀として、鮎川の氏神住吉宮と合併して茲に劔神社を立て、その靈をお祀りしてゐる。毎年八月末日の祭禮には十里に餘る遠方からも、之に参拜する人が絶えない程である。

兵生の松若 (三川)

田邊を去る東六里二川村に兵生ひょうせいといふ一寒村がある。この村の官林は往古より斧鉞を入れざる大深林であつて昔から神秘的の深山、果て知れずの深山として村人の畏敬する處である。

この山に松若といふ怪巨漢があつて、樵夫の目にかゝつた時は常に曰く「若し一朝事ある時は此處に來りて我を呼べ我出で、一臂の力をかすべし。我に千人力あり夢忘るゝべからず」と。

彼身長一丈有餘、常に裸体であつて身に松脂を塗り之に赤土の粉末を抹して、宛然山門の仁王尊の如くであつた。

天正の頃豊臣秀吉兵を送つて口熊野の邑に陣し松若、山本、湯川氏を討つた。この時松若山中より出で來り湯川氏を助けんものと二丈斗りの松丸太を小脇に抱込み床柱を振廻すが如く薙ぎ倒して豊臣勢を惱し神出鬼没捕へることが出来ない。

銃を以て彼を撃つも弾丸が反發して彼の身に傷くる事が出来ない。長鎗を抛げて彼を斃さんとするも鎗の穂先が折れて用をなさない。大軍の中に走り入り取つては抛げ擲んでは擲ち甲冑に身を堅めた豊臣勢の猛者共を弄する事恰も小兒の鞠を弄ぶが様であつた。遂に夜に乗じて豊臣勢の陣營に



火を放ち亦立つ事能はざらしめ、後をも觀みずして山に入つた。曰く「事ある時は兵生に來りて我を呼べ我は幾百歳を経るも死せず、病まず、老いず」と。

嗚呼、兵生の松若、今果して健在であるか。

良遂大和尚（市之瀬）

良遂和尚は今より凡そ二百七十年前の人である。和尚は肥前の人で海藏寺に住職をなしてゐたが或事の爲に郷里に歸らうとして寺を出立した。

そして富士城といふ所迄來た時丁度安藤帶刀公がお通りになつた。帶刀公と和尚は兄弟の如く非常な親しみをもつて交際してゐたので、帶刀公は直ちに興よりおゝりになつていふのに、「其處を通るは良遂でないか」とお尋ねになつた。和尚はしたしく歸郷の事情をこと細かに申しあげた。がしかし公はなかく承知されないので、この地に永久に止まる様に繰り返し／＼解き聞かせたので、和尚は公の友情の深いのを感じてとゞまる事になつた。和尚もう海藏寺にとゞまらずお前の好きな土地へ隠居せよとの御命令があつたので早速市之瀬の興禪寺に参りたいと云ふ事をお告げになつた。公はそれが爲に和歌山の地より觀音堂を仕組んで送り田地八町四面を與へて市之瀬へ隠居さす

事になつた。其處で餘生を安樂に送つた。

和尚が或る夏の夕方附近の山をめぐつてゐた。すると此の天氣の良いのに不思議にも濕つてゐる一個の大きい石を見出した。和尚はしばらくの間ながめてゐたが聽てこの石はきつと雨天、晴天を知つてゐる石に相違ないと云ふ事を覺つた。それで明日は必ず雨が降るだらうと思つてゐた所その翌朝は非常な大雨が降つたと云ふ事である。

この石は雨が降る前兆には必ず濕るのであつた。不思議なこの石を地藏尊にきり「天乞地藏」と命名して寺より半里位の山に小さい御堂を建て安置する事になつた。毎年二月廿四日は地藏尊のお祭で投餅、見世物等の催しがあるので附近の老若男女數をつくして参拜する。

和尚は又自分の子供よりも可愛い一匹の馬を養なつてゐた。その馬は非常に賢くやさしくて和尚のお使ひは勿論、寺役人が山より伐り出して賣る材木までも、脊に積んで市場へ運んださうである。又店に買物に行く時には買物の品をしるした紙片をつけて行かせ、店の前へ行けば直ちに一聲嘶いて主人を呼び出すのである。主人は脊の紙片を見て求むる品物をつけてやると又一聲嘶いて歸つて行つたといふ事である。村の人達は皆神馬の如く敬まひ馬がお通りになると門口に待つてゐて「お馬さん轆を打つてあげませう」と云つて親切になし轆が新しいならば足につるし、まぐさ迄も村の人達によつて運ばれた様である。今でも寺へ登る道を馬道といつてゐる。

この馬道昔は随分廣かつた様だが今では細い道となつてしまつた。其後間もなく和尚は病に臥した。病中自分の子供とも愛撫する馬に「今度はとても駄目だからお前と一緒に極樂往生をしよう、きつとその通りにしてくれよ」と再三繰り返して眠るが如く逝いてしまつた。

その後馬は毎日く嘆き悲しみ、和尚が死んで四十九日にもならないうちに、死んだといふ事である。

和尚の墓は寺の東方に設け石碑の前には馬を埋め、今では村の人々から深くく尊崇されて参詣する者が絶えない。

竹の皮の戦略 (市之瀬)

城山は昔、山本主膳守の陣取つた所である。この山は今の春日神社の上にあつて、切り立てた様に高く聳えて居る。その城跡の下にある弘法大師堂の附近にある主膳守及び眷族一門の墳墓が今に残つて居る。その碑は墓面苔蒸して書き記して居る事柄が磨滅してゐるが、主膳守が天保十五年亥九月十三日に死んだといふ事だけは判然として居る。

さて城跡に登つて見ると今は頂上は畑となり杉、檜等の苗が植へられ、周圍は梅畑となつて居

る。壕等も四方に廻らして居たのであらうが、大方は埋まつてしまひ、或は叢と森になつてしまつて居る。その當時當地は非常に富み榮えて居つたのである。巍然たる城廓が一度に戦亂の巷となり。兵燹の焰と化してとう／＼落城となつたのであるが、今にして思へば一場の夢に過ぎないが、櫻花の咲き亂れし壕梁の周圍又は城廓が今の世までも残つて居つたならば、どんなに立派であらう。天地の悠久から見れば洵にはかないものである。傳説によると。

主膳守は敵を防ぐために竹の皮を幾萬枚と砦の丘に敷き並べて、攻め寄する敵が登れば迂らして困しめたといふ奇策を用ひた。主膳守はお風呂を召して居る時に敵につき殺されたとか傳へられてゐる。

日置川附近

天狗徳物語 (日置)

日置川を船で下つた人々は口ヶ谷のせしらく淺瀬を下るとき仰いで山の中腹の苔むした岩根に黒ずんだ松樹の孤立する天狗山を見た事であらう。こゝにも一つの奇しき物語がつたへられてゐる。若しあなた方が所望なさるならば舟子は片手に櫓をあやつりながらこんな話をあなた方にして下さるに違ひない。

日が暮れる松明もてこい田の主よ

今から丁度三十年程前のことである。いつ晴れるとも分らない五月空からさみだれが降りしきつて卯の花が黄昏のほの明りの中になつかしく香る夕暮のことである。田植を終へて泥にまみれた足を洗ひに川邊に行つた徳さんが歸つて來ない。夕餉をすましても歸つてこない。家人の驚きはもとより十戸計りの區民の騒動は一方ではなかつた。

「流れたのぢやなからうか、可愛想にこの増水ではとても助りつこはないだらう」

人々はこんな事を言ひながら晴れやらぬ五月闇の中を空をもがさんばかりの松明の光りをあちらこちらに輝かしながら何處へ行つたとも知れぬ徳さんの行方をさがし歩いた。

夜の更くと共にその騒ぎは一層はげしくなつて行つた。生れて漸く五つになるかならぬかの男の子を抱いて徳さんの女房は泣きはらした眼をしばたゝかせながら騒ぐ人々について走つた。川向ひの舟木の人々も焚火の光に變事をさとり五月雨を集めて滔々轟々といきまく川を腕そろひの若者どもの必死の捜査も甲斐なければ、未明下流に死休をもとめようと死者のために篝火などして夜伽をするのであつた。

この徳さんは姓名を金子徳松と言つて村内きつての實直家で脇目も振らず一心不乱に働く一方であつた。妻との間には金八と云ふ男兒をもうけて何不自由なく幸福に日を暮してゐた。とは云へ不意の出来事に際會した女房は半狂亂になつて緑なす黒髪を背にふり亂しつゝ人の止めるのも聞かばこそ黒白もわからぬ五月闇の中を滔々と流るゝ川面を眺めながら堤防を上には下にかけてめぐりながら歸らぬ夫の名を悲しげに呼びつゞけるのであつた。河の音はさまざま高からねど聲は大空中に死して静寂たる中に杜鵑の聲が一しきり憐れつぽく鳴き渡るのがきこえた。

短い夏の夜のほのゝくと明けそめし頃篝火たく夜伽の人々の耳に「助けて呉れ！」と呼ぶ聲がかすかに青木(場所の名)から聞えた。

すは事よとかけつけた人々は川岸に突出た大樹の梢の上に死んだと思つた徳さんが首をつるされて低いうめき聲をだしてゐるのを見つけた。「それ徳さんだ！」と船を出して大樹の下に浮かべ徳



さんの身を縄でつり下して家へつれ歸つた。家人のよろこび 區民の安心しばらく歡喜の聲にみちくた。村の一人が徳さんに「どうしてあんな木の梢にぶらさがつてゐたのだ？」と尋ねると徳さんは「何も知らない」と言ふばかりだつた。皆が眉をひそめると「川邊に行つて足を洗ふまで知つてゐるが……それから後は話せない」と狐にでもだまされた様なことを言ふので村人は狐にだまされたんだらうと口々に言ひながら歸つて行つた。

その日から徳さんは變になつた。今まで一心不乱に働いてゐた徳さんが仕事をせず夜は出て行き晝は寝る、山に行つて衣を破り身体を傷つけて家人を驚かす事もしばしばであつた。偶には日ごとつぶり暮れても歸らないのでロケ谷の人々は山又山を捜しめぐつて漸く半死半生の身体を戸板に載せて歸つて來た。「どうした」と糺すと「知らぬ」と答へる。何だ馬鹿々々しいと村の人々は歸つて行く。五日六日たつと又見えなくなる。こんな風にして村をあげての騒ぎが折々繰返へされるのであつた。

或日徳さんが不圖こんな話をした「私が大水に誤つて川に落ち流れた際、不圖天狗様に救はれたのが縁となつて山に登つて天狗様と共に話するのである」村の人達は驚いた。それからは山に稼ぐ人も次第に少なくなつて徳さんの行動に一層の注意をはらふ様になつた。

「それ天狗殿が中空にきたあの鈴の音をきけ」

野良の仕事の中にふいにこんな事を注意するので村の人々は耳をそばだてる、果して遙かかなたの空にかすかに鈴の音が音清く響きわたるのであつた。

庄屋をつとめてゐた土豪奥野老人などは徳さんのかうした行爲を發狂したためであらうと言ひ中空の鈴の音には信を措かなかつたが或日雇つた徳さんが午を過ぎた頃、不意に「空に鈴が鳴るので歸らして貰ひたい」と言つたので耳をそばだて、聞いてゐると果して高らかなる鈴の音をきいたので、さすがの奥野老人も茲に始めて天狗の存在の眞なるを認めたとの事である。

徳さんがいつも登つたと言ふ山はこの名高い天狗山である。頂の松の下にはいつの間にか一坪程の石室を作つてその周圍を清め二三年間こゝに起臥して偶に天狗さんのお供をするのだと言つて大塔や法師の森にあるひは富士の山に十日も二十日も所在をくらすに至つた。かうして日一日と奇異なる行爲が多くなつたので誰言ふともなく天狗徳と言ふあだなをされる様になつた。年毎に霜月の六日の夜は七五三繩をこしらへ天狗山に登り溪をへだて、岩上の一本松との間に七八十間もはり渡したとの事である。

或年の暮の事絶えて久しく聞えなかつた鈴の音が夜な／＼徳さんの家の上で鳴りはためいて村人の慄れ戦く事が一方ならぬので時の駐在巡查山本某「文明の今日かゝる事はあり得べからざる事である、取り控いで呉れよう」と村吏と共に薄暮から徳さんの所に出張した。爐邊の世間話に打興じ

てゐると今迄だまつて話をきいてゐた徳さんが急に無言のまゝスツクと立つて其場をけたてゝ素足のまゝ戸外に走り出て行つたがかうした仕振りは常の事なので家内は言ふに及ばず役人達も見かへつたばかりで別に氣にも止めずゐた。

夜は次第に更けて戸の隙間をもるゝ寒風しのぎ難く心待ちの鈴の音さへ聞えず徳さんの姿さへ見え早や十二時すぎを示したので流石の警官は「日頃の鑑識に遠はず徳松不正の点あるより今宵の詰場逃れる事の出来ないのを見きはめ姿を暗ましたに相違なし」と何事かを小聲に役人達に耳語き突と立上つて土間に下り役場員二三の村人を共に隨つて近所の家に徳さんを索したが見當らないので巡查山本某は愈々叶はぬ場合逃走したに相違なしと夜中青年の非常召集をして雪のふりしきる中を川端といはず田の畔から堤といはず夜あけ頃まで行方を捜したが見えない。夜明になると搜索隊天狗の住家と言はれる末踏の天狗山に大勢をたのみ恐るゝ齒朶草叢の生ひ茂る中を或は縦に或は横に徳さんの名を連呼して探した。遂に背後の淡雪のまだらに降りつんだ齒朶の中に両手を堅く合はせて瞑目して化石の様になつた徳さんを見出した。氷の様ひえきつた身体を焚火して温めたが両手の肉は全く密着してはなれない。

警官や吏員は「何故に山中に隠れたのであるか」と徳さんに尋ねると徳さんキツト此の人達を見上げ「昨夜戸外に天狗殿が来て自分を呼び出し御上より注目される不都合な振舞をした憎き奴故以

後の戒めにと襟首をつかんで後の山に投げこまれ今夜汝の宅に行き掌をはづしてつかはすそれまで留守事は罷りならぬと堅く肉付にされたのであります」と申し立てた。

が警官は「尙この機に及んで奇異の言を弄し人を惑はすしれ者」と叱するに徳さんかたく合はせた手をわなゝかせながら「俗人共の知らない所今宵天狗お越しとの事鈴の音杖の音聞かして進んぜやう」村の重だつた人は何事か喋し合して歸つた。役人や警官は約束の鈴の音を聞かんと夕方から詰めかけ静かな夜を框に腰打かけた。昨夜とは打つて變り夜はいたく更けて十二時を過ぎた頃どこからともなく乾燥しきつた冬空に高く低く鈴の音がつゞいて響いたので一同はたゞ目と目を合はせて不思議の事實に失神せんばかりであつた。

彼等は居たまらず框から上にあがると今朝より掌を合し端坐瞑目せし徳さんは何時の間にか両手をはづして膝の上に置くと思ふ間もあらず一陣の風サツと家を動かし燈を消す。驚き点火するに徳さんの姿は見えす魂消る警官吏員達は逃げる様に夜の道を急いで歸つていつた。

或年の夏稲葉に害虫がひどくついて驅除に困つた際、徳さんは天狗の水を一般に配つたと言ふ。この靈水は無盡で一度つきても天狗より賜はる鐵扇もて石壺にふるればよどみなく湧き出したと言ふ事である。大塔の山、法師の森へ日を費さずして往來し二三日中に富士へ登山し、濁流渦巻く日置川を足先をぬらすばかりで涉り天狗のふりならず鈴の音を人に聞かせる等奇異の行の多かつた徳

さんは多くの疑問を残して十八九年前に八十餘歳の高齡を以つて去つた。

今尙徳爺さんの舊宅の表庭には天狗の足跡保護の小祠があつて天狗山の石祠と共に村民に大切に保護され霜月七日には盛大な祭典を行ひ投餅等の催しがある。

蛇 原 (日置)

時は五月初旬、端午の節句の頃でございました。諸國行脚の弘法大師は疲れ切つた足で而もお腹が減つてよう／＼日置へとたどりつかれました。その頃といつたら今の町なんかは小屋一軒もない荒野であつたのださうです。

大師は大へんお困になりました。そしてしばらく立ち止まられて四方をおながめになりました。するとはるか向ふの方に家らしいものが見えました。空腹も忘れられてお急ぎになりました。だん／＼近づくにしたがつて民家だといふ事をお確めになりました。その時の大師のお喜びはありませんでした。

そして何か施してもらはうと思ひましてその家におはいりになりました。家には若い夫婦が二人きりでした。八つ時なので八つ茶をたべてゐました。節句のちまきも焼いてゐました。二人は誰か

の訪問にびつくりしました。やがてみすぼらしいお遍路さんと知つたのです。

すぐ御飯も何もかも隠してしまひました。多分物を乞ふのだらうと覺つたからでしょう。然し焼いてゐたちまきの事はすつかりと忘れてゐました。大師が物を乞ふた時に夫婦は口を揃へて何もありませんとさも當惑さうに冷笑しながら言ひました。三人はしばらく無言のまゝゐましたが急に大師は「あの餅を」といひかけますと夫婦ははつとしましたが臆ていゝ考が浮んで來たのでした。

「あの餅は中に蛇があるのです。」と子供だましの様な事をいひました。大師はなにも申しませんでした。

「有難うさようなら。」と暇乞をして別れました。

二人はほつと胸を撫で下しました。そしてちまきを食はうとして二つに割りました。「ワツ」と二人は殆んど同時に驚きました。無理ありません。蛇が飛び出しました。不思議に思つてためしに戸棚から皆んなちまきを出して來て一つ一つわつて見ましたが、どれを割つても蛇が出て來ました。

そして見る間にその邊に蛇が一ぱいになりました。二人は今さら偽をいつた事を後悔しました。それから此の地を蛇原といひ出したのださうです。今でも此の地にちまきは拵らへぬさうです。

茂兵衛と旅僧 (日置)

夏!!それは暑い／＼夏のまひるの事であつた。白金の様な太陽は地上の一切が焦げて仕舞へとはかりに強い光を放つてゐる。そよ風一つも吹かない。田畑の作物も野山の草木はおろか人間も何も全く生氣が無い程の暑さだ。その上連日續く早魃に道の土埃が時々ポツ／＼と立昇る様な氣配である。

實際二十何年目の暑さだ。茂兵衛爺も不平たらく／＼野良仕事から引上げて歸つた。裏山の蟬は一しきり鳴く。時は平安朝の頃世は泰平を壽き彌生の花に浮かれ三五夜の月に酔ふ月郷雲客は樂しいまどひもあつたらうが南紀州の草深い田舎には何程の文化も訪れる由がなかつた。それよりも村長から都に貢ぐ献米が年と共に多くなり村人の誰の口からも不平の聲の洩れる今日此頃、又しても此の早魃!!彼等の心は極度に荒んで行く。茂兵衛爺が野良から歸つて晝寝をしてゐた時分白埃の立つ山道を一人の旅僧の歩いて來るのが見受けられた。その姿が如何にも苦しさうである。墨染の法衣は所々破れて野バラの葉がからまつてゐるし白衣は汗で絞る程濡れてゐる。旅僧は時々空を見上げた。けれど空には輝く太陽と一片の白雲が山際に見ゆるばかりであつた。

旅僧は朝からこの峻しい紀州の山道を歩いて來たのだ。今は非常な渴と空腹とに苦しんでゐる。村里離れた茂兵衛爺の家が目についた時彼は非常に嬉しさうだつた。痛い足を杖にすがつて爺が住家の門前に辿りついた。住家とは云ふものゝすゝぼつた藁屋の疊も何もない駄々ツ廣い家にすぎぬ。唯表は百姓家の常として可なり大きく柿の木と蜜柑の木がまばらに植つてゐる。「頼まうお頼み申す」先刻の旅僧は斯う云ひながら笠を取つた。日にやけた顔とは云へ太く長い眉、澄みきつた目なざし、秀でた鼻、引きしまつた口、それは無限の慈悲を湛へ、しかも犯しがたい威嚴が具つてゐる風貌であつた。けれど無智な田舎者には唯一個の乞食坊主としか見へなかつた。家の中では爺の空駟が聞えるばかり返事がない。「お頼み申す」旅僧が再度所望した時、爺はものうげな半眼を開いて起もやらずに旅僧の姿を眺めてゐた。

「何ぞ御用かえー」「拙僧は朝來山越しにて隣村より参りし者、先程より一滴の水も飲まず、非常に咽喉のかわきを覺えたればお湯などお水など頂戴いたしたい……」茂兵衛爺が返事もせず目をつぶつてゐる。「若し主……」この時茂兵衛はムツクリ起き上つて怒鳴りつけた。「喧ましいわい、この乞食坊主奴、暑けりや咽喉のかわくのも尋常だ。俺だつて此の暑さにや田の作物を取りに行く事すら出來ないんだ。これから二三丁下れば河があら、其處へ行つてたらふく飲みやがれ。俺あ家にやお前にやる水が無いわい！」かう云ふなり又横になつて空駟を始めた。

劍もほろゝの挨拶に聊かむつとした旅僧もやがて靜かに一禮して笠をとつて出て行つた。牛小屋の牛はモーともものうげに鳴いた。溢るゝ汗をぬぐひながら村に近づいた時、成程一流の河がある。然かもこの日でりに滾々と流れてゐるのは天の賜に相違ない。旅僧は岩を下つて水をすくつてやつと渴を醫した。暫らく考へてゐたが何思つたかハッシとばかりもつたる杖で水面をたゞき又何處へか旅を續けた。日もすでに西にかたぶいて旅僧の影が長く後に引かれつゝ彼方に消えて仕舞つた。それから數日した頃次第に河水が少くなり所々河底が見え始めて來た。あれ程清冽を湛へた水量がにわかになつたのには村人も不思議がらずには居られなかつた。

噂が噂を生んで人々は安い心地ではゐられなかつた。又數日水はすっかり無くなつて河原の石にはまぶしい太陽が照りつけてゐる。茂兵衛爺も勿論知らぬではなかつたがまさかあの事がと考へてゐたが氣になつたので村の人に話した。村人の一人は驚いて叫んだ。「ソリヤー！噂に高い空海上人様ぢや、旅僧に姿をやつして諸國を行脚なされてゐるとは隣村で聞いた。これはきつと俺等の非道をお怒になつての罰にちがひない、あゝ勿体無い事をした、南無阿彌陀佛々々々々」村人達も驚いてめい／＼罪を詫びたが最後の祭となつて仕舞つた。河は依然として水が枯れてゐる。茂兵衛爺も死に村人の誰もかれも死んで時は流れた。河にはもはや永遠に水がない。夏の夕べ哀愁をひくかのやうな月見草の花がほの白う黄昏時の闇の中に咲いてゐるのも淋しい情景だ。

ねじびやくしんの傳説 (日置)

梵音寺と云ふお寺は非常に景色の好い所にありました。境内からすぐ緑濃き大きな松原についでその下にきれいな日置川が流れてゐました。

或夏の暑い日の午後一番の観音様がまわつてきました。そして梵音寺の前を通りかゝつた時「此の寺は中々好い寺だ。景色はよいし見はらしが何ともいへぬ。このお寺へお宿をさせていたゞかう。」と案内を乞ひました。所がこゝの住持が晝寝をしていかほど起しても起きません。観音様は腹をお立てになつて「こゝの寺はよい寺だが住持は悪いやつだ。」といつて石段をおりました。そして其處にあつた大きな白びやくしんの木をねじて何處かへ行つてしまひました。

ねじられた白びやくしんの木は根から枝の端に至るまでぐる／＼とねじつてゐたさうです。そしてねじびやくしんの下に観音様をすゑ祠を建てました。大きな松は明治二十二年の水害に流されましたさうです。白びやくしんの木とその下の観音様は私たちの小さい時までのこつてゐたさうですがとう／＼それも枯れてしまひました。

辨財天の化身 (周參見)

周參見の海岸から四五丁沖に古木の茂つた稻積島が靜かに村の平和を守りつゝ横はつて居る。實に神祕的な物語の潜んでゐるさうな島である。

昔或上人が諸國巡錫の途此處に來て早速島に渡つて修業を始めた。丁度明日で満願といふ時後の祠から大蛇があらはれ焰の様な息を吐きつゝ上人に飛び掛らうとした。上人は驚き濱邊に逃げた。けれどもそこには一艘の舟もなかつた。大蛇は跡を追つて來る、最早之れ迄と下駄のまゝ海上に投じた。すると不思議や上人の身は迂るが如く陸に向つて走つた。

大蛇は尙も追つかけた。やがて海岸も近づいた頃であつた。突然上人の頭の上にあつた石が落ちて上人は下敷きになり遂にそのまゝ死んだ。大蛇は島に引返した。之を見た村人は大蛇を辨財天の化身だと傳へ其處に社を建て、祀り上人の死んだ所は観音谷として今も傳へられてゐます。

稻積島の森 (周參見)

神武天皇御東征の時熊野灘にて暴風に遇ひ給ひ皇舟漂蕩せし時難を紀南の周參見浦小泊りに避け

給ひ暫し寓居せんと申し召され又稻積には兵糧を積み儲はへて舟師を整へんとせらる。小泊りは王泊りにて稻積は糧食を積む意ならむ。中世長祿の頃周參見氏は稻積島に居城すとあり。又島の東面に辨財天を祀りしが明治四十二年二月山崎王子社に遷し奉る。祭神は市杵島姫命にして延寶二年の勸請に係る。

此島は昔より神威莊嚴にして船人など妄りに樹を伐りて船に入りなば出帆の時必らず凶事ありとて今も尙恐るゝ所なり。以前は官林なりしが近年拂ひ下げを受けて區有となれり。森の下陰に大谷渡しと稱する珍草頗る多く繁茂し形蘭に似て風趣裕かなり。

天狗退治 (周參見)

村の西に天神山といふ小高い山がある。磴を得て登る事數町餘右側に丁度庭木の如く枝の出てる古木をみるだらう。それと同時にその下に「奉修太乘抄典石經」と刻んだ石碑をみるだらう。それには次のやうな傳説があるのだ。

昔それはいつだつたか知らない。夜なくその山の麓に天狗が現はれて色々な悪戯をするのでした。或は屋根に石を投げたり或は夜更けて戸を打つたり、ひどいになると人をさらつたりするの

だつた。村人も何んとかしたいと思つたが天狗だ、うつかり無茶をすると飛んだ事になると誰も手を出さなかつた。

一年二年と早や過ぎた天狗の悪戯は益々つるばかりだつた。村人も最後の手段を講ぜざるを得なかつた。最後の手段それは當時村人の崇拜の的となつてゐた高僧が或る山に庵を結んでゐた。人の心の奥までも見抜くばかりの目ざし。兒女も親しみよるその童顔、それに又學識の高い大徳であつた。彼の唱へる念佛には如何なる悪鬼も降服するといふ不可思議な功德がこもつてゐた。村人の願つてゐたのはその念佛の力だつた。

やがて村人の總代は庵を訪れた。秋漸く深くして庵の傍の紅葉がはら／＼散る頃だつた、總代は靜かに見交しつゝ門をくゞつた。今まで高く聞えてゐた讀經の聲がやがてびたと止んだ……

暫くして出て來た村人の面には喜の色が現はれてゐた。後七日の日はいつの間にか過ぎ八日目の朝千草に虫のすだく頃再び村人の總代は庵の表に現はれた。彼等が庵を辭した時、彼等の手には巻物があつた。噫此の巻物こそ高僧の心血を注ぎ七日七夜身は済戒沐浴して作り得た悪鬼降伏の巻物であつた。やがてそれを埋めるべき日が來た、あの石碑こそその巻物を埋めた所だ、赤い夕日の照る村中どことなしに喜ばしい平和の氣分はみなぎつてゐた。立ちのぼる煙までもゆる／＼天狗の出なくなつた事は云ふまでもなく。

なみなき (周參見)

周參見に「なみなき」と稱する磯がある。昔、神武天皇が大和地方を御平定になる時、船で此處に立寄られた。その時に此處は波なく、全く池の様であつたので「なみなき」と云ふ様になつた。

エセレンポー (周參見)

波濤高く岩に碎けて玉と散る鯨潮吹く熊野灘を我が住家ぞとばかり、或は紅の夕日影を帆一ぱいに浴びながら悠々と漕ぎ歸り、或は太平洋の眞只中で夜通し鏝釣る荒くれ男の漁夫達にも迷信深い傳説が數多く存在してゐる。しかもそれが有り得べき解き得べからざる者とし恐れてゐる。

今は昔といつても何時頃か更に判らぬが、周參見の沖合にある稻積島に「エセレンポー」と稱する島とも獸とも判らぬ者が住んでゐた。木深い奥の祠に巢を作り漁夫が釣してゐる間に色々と惡戯するのださうだ。今日も今日とて朝早くから二人の漁夫が稻積島内の絲卷に腰かけて餘念なく釣を垂れてゐた。

この絲卷島は丁度出ばつた平い岩で「うまべ」の木が覆ふて木蔭になつた風通しのよい所である。下は藍を湛えた太平洋の怒濤が打つては返し返してはうち寄せてゐる、それに風の朝など幾十羽とも知れぬ鷗が飛びかひ、朝日に閃々と白い腹を見せて美しい光景を呈してゐる。又盃のやうな夕日が海に沈まんとして空も海も眞紅に彩られる頃、間々歐州航路の汽船が黒煙堆裏水平線を縫ふて走つてゐるのは實に點睛の感がある。

さて黄昏まで釣りを垂れてゐた二人はつくねんと坐つてゐた所が今日に限つて魚が澤山とれる。お晝までには十數匹も釣り上げた。お晝も簡単に濟し獲物は木の枝につりさげ再び釣り始めた。それから約二三時間もたつた頃後方に當つて奇妙な叫び聲がする。と同時にあつた筈の魚が無い「オイ魚が無いぞ」「又エセレンポーにやられたんだな、けどあいつのことだからまあほつとけよ」と語合つてゐた。でも山の方では例の聲がして石を轉したり木を投げたりするはてはキイ／＼と人を笑罵する。こんな事で二人とも夕方になるまで一匹もつる事が出来なかつた。あまりのいま／＼しさに「エセレンポーてなんだ。あれや狸ぢやないか、四足者(獸)だよそれが恐くつてへゝ人間様とはいへる者か」とさんざ不平を鳴らして家に歸つた。

由來此稻積島に祀つてゐる辨財天は、四足者が嫌ひで四足者が住めぬ事になつてゐる。所が今まで「エセレンポー」の正體は何者とも判らぬからまあこゝに住つてはゐたものゝはからずも漁夫の口か

ら狸だと知れ神の怒にふれたのか翌朝来て見れば十數匹の狸が屍となつて波のまに／＼漂つてゐた。口走つた漁夫もあまり幸福でもなく暮したといふ事である。今でも辨財天がある爲か、この島中に一匹の獣も無いさうだ。

こつち勝つた勝山（安宅）

今より數百年前淡路島に一小名があつた。弱肉強食の戰國の弊は此の平和なる島にも及ぼして遂に豊臣氏に破られて、壓迫の若痛にたへかねた彼は一族郎黨家人を引具して紀州路に落ちのびた。そして日置川を溯り其處を永住の地とした。彼は貧民に金を與へ仁政を行ひ遂に其の長となつた。（今日の日置町大字安宅の地にして安らかに宅を營む意より此の地名起ると云はる。今日猶安宅姓を名乗る者多し）時世は流る。戰國時代はいつしか豊臣氏の統一する所となり、徳川氏はこれを倒してこゝに封建政治を布いた。彼は安宅三河守と名乗り所謂殿様となつた。戰國の世ならば鬼も角泰平の世となればお家騒動等一家の醜い争が行はれ易いものであつた。

數代の後の或る殿様の子に二人の男子があつた。長男は愚者でなかつたけれど氣のきかぬ方であつた。正直なる人間であつた。次男は賢者ではないがするい方であつた。長男を中心とする家老や

家人の保守黨。次男を中心とする佞臣等が姦策を用ひ讒言を用ひて殿様の氣色をうかがひ我利に生きんとあせつた。

殿様は老後を何らの楽しみもなく黙々として何も語らずに居た。そして寂しい生涯を悲しく終つた。家老等は家の長く續かざる事を知つて嘆いた。或者は切腹して申しわけした。姦臣等は表面悲しさをなせしつゝも殿様の死と腹切する家臣等を見て快心の笑をもらした。

争は益々露骨となつた、遂に兵火は交へられた。長男は館を守つた。はせつけた家臣には物のわかつた者ばかりで主に老人の御馬前組だつた。主君の前には身命ををしまぬ人々だつた。それで老人でも大身の槍をしごき大刀引き抜いて群る雜兵切りたふしなぞ殺した。次男の大勢もさすがに追ひつめられて陣近くまでも退く事數度であつた。敵は若者の新手々々を入れかへ／＼せまつた。如何に心はあせつても身体は動かなかつた、一人死に二人死に長男の兵は益々少くなつた。

平和なる村は徒らに兵火に災厄され、戰死者のあはれな死骸が累々と横はるのみで、今しも釣瓶落しの晩秋の夕陽にこの荒涼たる情景を打眺むる者誰か轉た人生の落寞を感じぬものがあらう。

其夜長男は生殘る家來を數へては長歎久しうするのであつた。丁度その時敵の間者のつけたる火が館に燃え上つた、メラ／＼と燃え上る火を見た時彼は判然と自分を意識した。自分は不肖であつた、自分の不肖なる爲に村は焼かれ民は死した。今はたゞ死以外に彼の取るべき道はなかつた。正

直なる人間の頭には死んで詫びようと云ふ事より外に何ものもなかつたのだ。

彼は家臣の前に坐つたまゝ、「許してくれ最期だ」と云つて頭を下げた。戦の勞をねぎらふ言葉もどいつかへて出なかつた。一坐の者はハラハラと涙を落した。死が悲しいのではない。死がうれしいのだ。長男の最期の態度がうれしいのだ。一人の家人がつと立つて朗々と謡曲をうたつて、舞をまつた。とめどなく流れる涙に、心もかきむしられる様な惱ましい劇的シーンであつた。

我先きに敵の首級を上げて功名を立てんとした軍兵共は謡曲の朗々たるに太刀先が鈍つた、唯茫然として大刀を引つさげたまゝ頭をうなだれた。正なるものゝ悲痛な最後の叫びが濛々たる火焰の中に渦巻かれて聞えた。

平常に變らぬ鶏の聲と共に夜は明けた、劍戟の叫びも止んだ、新しい朝日の光に照らされてゐる敗陣のあとの光景は何といふ惨めなものであらうか。早や死骸にも霜はあつた。館の焼け残りが白い煙を立てゝ居た。百姓達も歸つて來た。

時は移る、次男の陣取つた山々は堂々たる樓閣の建築が始まつた。やがて家並がそろつて町も出來た。

あつち負けて葬れ……

こつち勝つて勝山……

かういふ俗歌が巷間に傳つた。彼は其の山を勝山と名づけたのだ。然し彼は暴政に暴政を重ねられたる戦後の民より税を取つて土木事業を起した。これによつて人民の恨みの聲は如何なる方法を用ふとも絶えなかつた。

(附記、此の家は其の後落ちぶれ明治維新後全く平民となり、明治二十二年の水害に少しくあつた武器等も全くなくして其後北海道に移住してしまつた)

法經塔と箸折峠 (近野)

法經塔は近野村字近露の箸折峠にある。花園天皇が熊野行幸の際に此處で御休みになつた。さうして御飯を召上らせられる時、傍にあつたカヤを折つて御召上らせられた。そして後其の箸を折つて捨てられた。それで其處を箸折峠と名付けたのである。其處に花園天皇熊野御巡幸の際法經及法衣を埋納せられ碑を建てられたのがこの法經塔である。

血か露か (近野)

天正年代日高の丸山城主湯川直春が戦國又兵衛に追撃されて近露を通り過ぎる時は未だ夜の明け
てゐない頃であつた。それで自分の衣服が濡れてゐるのは、血か露かと家來に尋ねた、それでこの
地を近露と言ふ様になつたのです。

三 日 森 (近野)

近野村字野中の南方に颯峴山々が重疊して聳えてゐる。その高い峰の内でも最も高い峰、それが
三日森である。照天姫が小栗判官を車に乗せて湯峰さして山又山を越えられる途、この森を越した
のです。この森を越すに照天姫は三日もかゝつた。それで三日森と言ふのです、小栗判官や照天姫
の傳説は本宮附近に澤山あります。

高 畑 (富里)

高畑は富里村字平瀬にある。紀州侯が明治以前に此邊の兵隊すなはち四番組といふものゝ西洋流
の訓練をする場所とせられた所といひます。

將軍瀧の由來 (富里)

富里村の方から流れて來る大川があります。其の大川と三川村日向口と言ふ所で落ち合つて居る
川が乃ち此の傳説を作つた將軍川であります。其の將軍川を段々と溯つて行くと其處にはかなり大
きな瀧があります。軽々水は瀧壺に落ちこんで水煙が濛々と四邊をこめて居ります。此の瀧が昔か
ら人の口に言ひ傳へられて居る將軍の瀧であります。其の昔何處かの戦に敗れた一人の將軍がな
り澤山の家來をひきつれて此處に人目をしのぶ落武者となつたのです。落武者は何かにつけて心配
の多いものですから、其處で米のとき汁を川下に流さなかつたといふことです。

又將軍は家來を申といふ所の向側にあたる烏の森といふ所に使はして敵の襲來に備へて居りまし
た。それは寒い日も暑い日も年が年中見張りをするのでした。けれども此將軍の武運がつかたので
ありませうか。家來が或る日の事、相かはらず警戒して居ると、何に驚いたのでせうか、澤山の烏
が一時にぱつと飛び立ちました。そして其の黒々としたぬば玉の羽が日光をうけてきら／＼と鎧の
金具の様に輝きました。

これを見た家來がいちづに敵を警戒してゐたものですから、すぐと敵が襲來したものだと思ひ込

んでしまひました。さう考へると川の流れの音、木々をわたる風の音でさへ敵の作る関の聲と聞き
ました。そこで大あはてにあはてた家來は早速息せき切つて走り歸りすぐとこの事を將軍に言上し
ました。此れを聞いた將軍はとう／＼武運の盡くる時が來たのだと怨を殘して家來共と一緒に瀧壺
に入水して敢えない最後を遂げたのです。其の時に愛犬を抱いて瀧壺へ飛び込まれた。犬は陸に上
らうと頻りにもがき泳ぎまはつて、そこらの石にかきつきました。そして其のかいた爪痕が今も歴
然と残つてゐます。

それから幾年かの星霜を経ました。瀑は昔とかはりなくとう／＼と瀧壺に落ち込んで濛々水煙を
上げて居ます。それから將軍の瀧といふ名がつけられました。そしてそこに源を發して流れてゐる
川を將軍川と言つて居ます。尙又不思議なことは村に早魃が續いた時に此の瀧に參詣するときつと
雨を降らしてくれます。

大塔峰 (富里)

東に大塔海拔二千尺、西水蠶、南半作並にはてなき熊野三千峰げに大塔峰こそどういふ由緒で此名
を得たか？。これこそそのかみ吉野朝庭南朝の勢衰へ給ふに及んで大塔宮護良親王は時勢のやむを

得ないのを考へ給ふて、都から遙々と山伏の姿に身をやつして紀州の川添村を通り、富里村の東い
わゆる大塔峰にお逃げあそばされてこゝにしばしお忍びになつたので此名がある。

やがて宮は又大塔峰より下り出でられる時、麓の劔山と云ふ所に御劔をお置きなされて、行かれ
たと。我らの祖先はこれを恭しく祀り奉つたのが今の劔神社だ。劔山の前に立つた時これが宮の形
見かと思ふとそゝろ涙がにじみ出て當時を追懷せずには居られない。

大石が太る乳大師 (豊原)

日置川の奥、西牟婁郡豊原村西大谷の大師谷と稱する谷の岩窟に大師堂がある。里人は昔から
「乳大師」とあがめ稱して信仰してゐるが、この乳大師の靈顯は顯著であるといふので、つたへ聞
いた信仰者が各地にわたり、田邊町及附近在からの參詣者多く、遠くは北海道邊にも靈顯に感じて
信仰して居る向きがあるといふ。

乳大師は、乳の無い婦人に乳をさづけてくれるといふ、そのありがたき、無邊絶大の慈愛が形に
あらはされてゐるのは、大師堂の岩山の根にある乳岩である、この乳岩なるものが靈顯不可思議の
示現であるといはれてゐる。

不思議の乳岩——それは岩根の箇所に乳のやうに突起してゐるもので、絶えず乳汁のやうな白色の水が滴たつてゐる。乳のない婦人はこの白い水をいたゞいて呑むと乳が出る、その白水が乾けば粉末ができる。遠地のものはその粉末を服むとよろしいといふのである、この乳岩が不思議だとされるのは、土地の老人の談によると、ちゝ岩は明治十四五年頃には突起部は一升瓶位の大きさのものであつた、それがいつの間にかやだんぐと大きくなつて、今では幅一尺位、丈は二尺五寸位となつてゐる、岩が自然にこんなに大きくなる。これは信仰者の多くなるにつれ、お大師さんがその慈愛の無邊であることを示現して下さる生きた證據だと崇拜せられてゐる。

ちゝ大師の起源——は今から二百年以上も昔のことだといふ、この大師谷の岩窟に足をとゞめた老遍路夫婦が、大師堂建立を發願して毎日晝はひねもす讀經にすごし、夜間は夫婦づれで下手の日置川積に下りて基石大の小さい石を拾ひ集めてその石面に一々經文を記したのが山と積まれた、この小石は大師堂の礎に埋められた。

やがて老遍路夫婦の一念が達して大師堂ができ、村人の信仰が深くなつて行つた、それにしてもちゝ汁の出る岩が靈顯の示現となりちゝ大師として益々あがめられるやうになつたのはいつの頃のことか。

岩が自然に太る、これはちゝ色をした白い水がちゝ岩に注がれる、その水は岩の細粉を含んでゐ

るので突起部に集まつて突起部がだんぐ太る。それからその白い水となる岩山の細粉には何か婦人にちゝの出やすくなる精分、たとへばカルシウムなどといった精分が多分に含まれてゐるのだらうと、近ごろ學問的に説明する人もある。

天 狗 岩 (富里)

富里村大字下川下熊谷にあつて、凡そ長さ五十間幅三十間此の岩は熊谷の東側にあつて、實に偉大なものである。此の邊は一般に岩が多いけれども、天狗岩は、まれな大きな岩である。昔から毎月十五日と十八日には天狗が來て、笛をふき、太鼓をうつて、騒ぐといつてゐるし、又時としては、櫛を折つて岩の上に積んでゐることがあるといつてゐる。

御 屋 敷 (富里)

富里村大字下川上字安川の大塔山の麓にある。二三段歩の廣さである。

元弘の頃護良親王は、大和の十津川から玉置莊司に追撃せられ、御難戰遊ばされし時芋瀬馬之助

知時の助けによつて、下川上、安川大塔山の麓に御潛み遊されたとの事で、其の遺跡を稱して御屋敷といつてゐる。御屋敷に續いて丸山があり、御屋敷谷がある。土地は平坦でない、雜草が一面に繁つてゐる。昔は大朝日夜雞の鳴くのをきいたと。

劍神社の森 (富里)

富里村大字下川上字陸平にある。(陸平は元は公家平か、公卿平か)面積は凡そ一二段である。建武の中興にあたり、護良親王京都に還られ給ふに望んで、地方へ記念のためか、公卿平へ御劍を遺され家臣に之を保持させた。それでこの地方は吉野朝廷へ叛かなかつたといふ。現今神靈は鮎川に遷されてゐる。現在は劍を奉祀せし跡は樹木が茂つてゐる。

水 呑 峠 (富里)

富里村大字平瀬に大岡彈正といふ落武者があつて、地方の慣例によつて、正月二日に書初めをしようと思つて衆を招いた時、釣上の僧も其の席に列つてゐた。然るに文字の吉凶上から大岡氏の怒

りにふれる所となつた。所が大岡氏は直に刀を抜いて僧を斬らうとすると僧はすぐ逃出したので、大岡氏はその後を追つて此の峠まで來た時、僧は喉が渴いたので、しきりに水を飲んで居た。大岡氏は矢庭にその僧を殺害した。それで此の峠を水呑峠といふ様になつたのだといふ。此の時大岡氏はこゝで血刀を洗つたので同氏の子孫は此の谷にて水をのまないといふことである。

安 (富里)

建武の頃護良親王の御佩刀を大字下川上陸平(公卿平)に遺すに當り家臣に奉持させた。(郷民、敬して其の家臣を安殿といつた。安とは長らく安らけくといふ、大平を祈り且つ御代を尊稱する號だと)其の後安氏の子孫、本郡鮎川村に轉するやうになつて奉持する所の御劍を携へ行くのを郷民に知られて追跡され、其の柄をのこし、辛うじて其の劍を奉持することが出來たと。かうして安氏は劍を奉持して鮎川村に行つたが鮎川の郷民は之を拒んだので、止むなく同村小川谷に安祀したのだと。(現今鮎川劍神社の神靈だと)そして、安殿が久しく親王が御劍を奉持して居住された(下川上の)所を安といひ、且つ其の近方をも安と稱してゐるのだと。